

茨城県教育財団文化財調査報告第137集

阿見東部工業団地造成工事
地内埋蔵文化財調査報告書

星 合 遺 跡
中ノ台遺跡

平成 9 年 9 月

茨 城 県
財団法人 茨城県教育財団

茨城県教育財団文化財調査報告第137集

阿見東部工業団地造成工事 地内埋蔵文化財調査報告書

ほし せい 遺 跡
星 合 遺 跡
なか の だい 遺 跡
中 ノ 台 遺 跡

平成 9 年 9 月

茨 城 県
財団法人 茨城県教育財団

序

茨城県は、首都圏に位置する地理的優位性と、高速道路をはじめとした交通ネットワークの発達や港湾施設等の整備により、北関東エリアの中心としての役割がますます増大しています。このため、産業と生活のバランスの取れたまちづくりの観点から、地域や自然環境との調和を図りながら、地域振興事業に取り組んでいます。

阿見東部工業団地造成事業は、県の地域づくりの方針のもと、「環境にやさしい、地域に根ざした新しい産業拠点の創出」を事業コンセプトに計画されました。その予定地内には埋蔵文化財の包蔵地である星合遺跡及び中ノ台遺跡が確認されています。

このたび、財団法人茨城県教育財団は、茨城県から埋蔵文化財発掘調査事業についての委託を受け、平成8年4月から平成9年7月までの1年4か月にわたる発掘調査を実施いたしました。

本書は、星合遺跡及び中ノ台遺跡の調査成果を収録したものであります。本書が学術的な研究資料としてはもとより、教育、文化の向上の一助として活用されますことを希望いたします。

なお、発掘調査及び整理を進めるにあたり、委託者である茨城県からいただいた多大な御協力に対し、心より御礼申し上げます。

また、茨城県教育委員会、阿見町教育委員会をはじめ、関係各機関及び関係各位から御指導、御協力をいただいたことに、衷心より感謝の意を表します。

平成9年9月

財団法人 茨城県教育財団
理事長 橋本 昌

例 言

1 本書は、茨城県の委託により、財団法人茨城県教育財団が平成8年4月から平成9年7月まで発掘調査を実施した、星合遺跡及び中ノ台遺跡の発掘調査報告書である。

なお、2遺跡の所在地は次のとおりである。

星合遺跡 茨城県稲敷郡阿見町大字1条字星合2,113番地の11ほか

中ノ台遺跡 茨城県稲敷郡阿見町大字飯倉字中ノ台1,319番地の2ほか

2 上記の2遺跡の調査及び整理に関する当教育財団の組織は、次のとおりである。

理 事 長	橋 本 昌	平成7年4月～	
副 理 事 長	中 島 弘 光 齋 藤 佳 郎	平成7年4月～ 平成8年4月～	
常 務 理 事	梅 澤 秀 夫 齋 藤 紀 彦	平成8年4月～平成9年3月 平成9年4月～	
事 務 局 長	小 林 隆 郎 西 村 敏 一	平成8年4月～平成9年3月 平成9年4月～	
埋 蔵 文 化 財 部 長	沼 田 文 夫	平成8年4月～	
埋 蔵 文 化 財 部 長 代 理	河 野 佑 司	平成6年4月～	
企 画 管 理 課	課 長	小 幡 弘 明	平成8年4月～平成9年3月
	課 長	河 崎 孝 典	平成9年4月～
	課 長 代 理	根 本 達 夫	平成6年4月～
	課 長 代 理	清 水 薫	平成9年4月～(平成8年4月～平成9年3月係長)
	主 任 調 査 員	小 高 五 二	平成8年4月～
経 理 課	課 長	河 崎 孝 典	平成8年4月～平成9年3月
	課 長	鈴 木 三 郎	平成9年4月～(平成7年4月～平成8年3月主査)
	主 査	田 所 多 佳 男	平成8年4月～
	課 長 代 理	大 高 春 夫	平成6年4月～平成9年3月
	主 任	小 池 孝 孝	平成7年4月～
	主 事	柳 澤 松 雄	平成8年4月～平成9年3月
	主 事	宮 本 勉 小 西 孝 典	平成9年4月～ 平成9年4月～
調 査 第 一 課	課長(部長兼務)	沼 田 文 夫	平成8年4月～
	調査第三班長	鶴 見 貞 雄	平成8年4月～平成9年3月
	調査第四班長	萩 野 谷 悟	平成9年4月～
	主任調査員	櫻 村 宣 行	平成8年4月～平成9年3月星合遺跡調査
	主任調査員	寺 門 千 勝	平成8年4月～平成9年7月星合遺跡及び中ノ台遺跡調査 平成9年7月～平成9年9月整理・執筆・編集
整 理 課	課 長	矢ノ倉 正 男	平成9年4月～平成9年7月中ノ台遺跡調査 平成9年7月～平成9年9月整理・執筆・編集
		小 泉 光 正	平成9年4月～

3 本書に使用した記号等については、凡例を参照されたい。

4 発掘調査及び整理に際して、御指導、御協力を賜った関係各機関並びに関係各位に対し、深く感謝の意を表します。

5 遺跡の概要

ふりがな	あみとうぶこうぎょうだんちぞうせいこうじちないまいぞうおんかざいはくつちょうさほうこくしょ						
書名	阿見東部工業団地造成工事地内埋蔵文化財発掘調査報告書						
副書名	星合遺跡 中ノ台遺跡						
シリーズ名	茨城県教育財団文化財調査報告						
シリーズ番号	第137集						
編著者名	矢ノ倉正男 寺門千勝						
編集機関	財団法人 茨城県教育財団						
所在地	〒310 茨城県水戸市見和1丁目356番地の2 ☎029-225-6587						
発行機関	財団法人 茨城県教育財団						
所在地	〒310 茨城県水戸市見和1丁目356番地の2 ☎029-225-6587						
発行年月日	1997(平成9)年9月30日						
ふりがな	ふりがな	市町村	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡	所在地	コード					
星合遺跡	茨城県稲敷郡阿見町大字上条字星合2,113番地の11ほか	08443	35度 59分 46秒	140度 15分 16秒	19960401 ～ 19970331	29,106㎡	阿見東部工業団地造成に伴う事前調査
中ノ台遺跡	茨城県稲敷郡阿見町大字飯倉字中ノ台1,319番地の2ほか	08443	35度 59分 58秒	140度 15分 02秒	19970401 ～ 19970715	7,685㎡	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項	
星合遺跡	石器集地点	旧石器時代	旧石器集地点 5か所	石器	石刃, ナイフ	古墳時代後期初頭の住居跡からは、竈の煙道が住居内にある初期竈が良好な状態で確認されている。	
	集落跡	縄文時代	竈穴住居跡 1軒	縄文土器	鉢		
	墓跡		古墳時代	竈穴住居跡 19軒	石器		
		平安時代	竈穴住居跡 3軒 土坑 3基	土師器	甕, 壺, 甌, 碗, 甕, 高坏, 器台, 手捏土器		
		時期不明	土坑 59基 溝 1条	土製品	管状土鍾, 球状土鍾, 土玉, 紡錘車, 支脚		
			石製品	石製模造品, 磁石			
中ノ台遺跡	集落跡	縄文時代	竈穴住居跡 5軒 土坑 2基	土師器	甕, 高台付坏, 环	縄文時代早期～前期及び平安時代の集落跡である。	
		平安時代	竈穴住居跡 2軒	土師器	甕, 坏, 蓋, 盤		
		時期不明	土坑 35基	瓦	長頸壺		
				石製品	紡錘車		

凡 例

- 1 遺跡の地区設定は、日本平面直角座標第IX系を用いて区画した。屋台遺跡ではX軸（南北）+200.000m, Y軸（東西）+37640.000m, 中ノ台遺跡ではX軸（南北）-320.000m, Y軸（東西）+37880.000mの交点をそれぞれ基準点とした。

大調査区は、この基準点を基に遺跡範囲内を東西南北各々40m四方の大調査区に分割し、さらに、この大調査区を東西、南北に各々10等分し、4m四方の小調査区を設定した。

大調査区の名称は、北から南へ「A」, 「B」, 「C」…, 西から東へ「1」, 「2」, 「3」…とし、「A1」区, 「B2」区というように呼称した。小調査区も同様に北から南へ「a」, 「b」, 「c」…「i」, 西から東へ「1」, 「2」, 「3」…「9」…と小文字を付し、位置を表示する場合は、大調査区と合わせて、「A1 b₁」区, 「B2 b₂」区のように呼称した。

また、屋台遺跡については調査区が広いので、北からI区～IV区に分けた。（区割図参照）

- 2 遺構、遺物、土層に使用した記号は、以下のとおりである。

遺 構 竪穴住居跡…S I, 土坑…S K, 溝…S D

遺 物 土器…P, 土製品…D P, 石器・石製品…Q, 金属製品…M

土 層 攪乱…K

- 3 遺構・遺物の実測図中の表示は、以下のとおりである。



● 土器

■ 土製品

▲ 石器・石製品

△ 金属製品

— 硬化面

LB ロームブロック

S 石

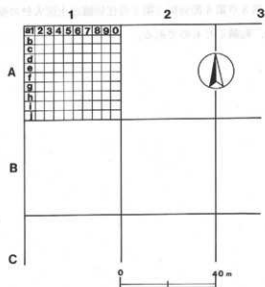
- 4 土層観察における色相、含有物の量の判定については、『新版標準土色粘』（小山正忠・竹原秀雄編著 日本色研事業株式会社）を使用した。

- 5 遺構、遺物実測図作成方法及び掲載方法については、以下のとおりである。

(1) 遺跡の全体図は縮尺200分の1, 住居跡や土坑等は縮尺60分の1にした。

(2) 遺物は原則として土器は3分の1, 石器は3分の2に縮尺した。種類や大きさにより異なる場合もあり、それらについては、個々にS=1/〇と表示した。

(3) 土器の計測値のA-口径, B-器高, C-底径, D-高台径, E-高台高, F-つまみ径, G-つまみ



第1図 調査区呼称方法概念図

高を示した。また、()は現存値、〔 〕は推定値を示した。

- (4) 遺物観察表の備考欄は、土器の現存値や実測番号 (P)、出土位置及びその他の必要と思われる事項を記した。
- (5) 写真図版中の遺物に付した番号は押図と遺物の番号である。
- (6) 第3章第4節分析(第5号住居跡出土炭火材の樹種)はバリノサーヴェイ株式会社 に依頼した結果を要約、転載したものである。

目 次

序	
例 言	
凡 例	
第1章 調査経緯	1
第1節 調査に至る経過	1
第2節 調査経過	1
第2章 位置と環境	5
第1節 地理的環境	5
第2節 歴史的環境	6
第3章 屋台遺跡	11
第1節 遺跡の概要	11
第2節 基本層序	11
第3節 遺構と遺物	12
1 竪穴住居跡	12
(1) 縄文時代	12
(2) 古墳時代	12
(3) 平安時代	75
2 土 坑	86
3 炉 穴	101
4 溝	101
5 旧石器集中地点	103
6 遺構外出土遺物	106
第4節 分 析	111
第5節 ま と め	112
第4章 中ノ台遺跡	115
第1節 遺跡の概要	115
第2節 基本層序	115
第3節 遺構と遺物	116
1 竪穴住居跡	116
(1) 縄文時代	116
(2) 平安時代	126
2 土 坑	131
3 遺構外出土遺物	143
第4節 ま と め	147
写真図版	

插图 目次

第1图	调查区呼称方法概念图	第35图	第17号住居跡実測図	59
第2图	周辺遺跡分布図	第36图	第17号住居跡竈・出土遺物実測図	60
第3图	星合遺跡調査区剖面(以下、星合遺跡)	第37图	第18号住居跡炉・出土遺物実測図	62
第4图	星合遺跡基本土層図	第38图	第19号住居跡実測図	64
第5图	星合遺跡遺構全体図	第39图	第19号住居跡竈実測図	65
第6图	第1号住居跡・出土遺物実測図	第40图	第19号住居跡出土遺物実測図	66
第7图	第1号住居跡実測図	第41图	第20号住居跡実測図	68
第8图	第1号住居跡竈実測図	第42图	第20号住居跡出土遺物実測図	69
第9图	第1号住居跡出土遺物実測図	第43图	第22号住居跡・出土遺物実測図	72
第10图	第2号住居跡実測図	第44图	第22号住居跡竈実測図	73
第11图	第2号住居跡出土遺物実測図	第45图	第23号住居跡実測図	74
第12图	第3号住居跡実測図	第46图	第6号住居跡・竈実測図	76
第13图	第3号住居跡竈・出土遺物実測図	第47图	第6号住居跡出土遺物実測図	77
第14图	第4号住居跡実測図	第48图	第10号住居跡実測図	79
第15图	第4号住居跡竈実測図	第49图	第10号住居跡竈実測図	80
第16图	第4号住居跡出土遺物実測図	第50图	第10号住居跡出土遺物実測図	81
第17图	第5号住居跡実測図	第51图	第21号住居跡・竈実測図	83
第18图	第5号住居跡竈・出土遺物実測図	第52图	第21号住居跡出土遺物実測図	84
第19图	第7号住居跡実測図	第53图	第2号土坑・出土遺物実測図	86
第20图	第7号住居跡実測図(1)	第54图	第6号土坑・出土遺物実測図	87
第21图	第7号住居跡実測図(2)・出土遺物実測図	第55图	第22号土坑実測図	88
		第56图	第34・35号土坑・出土遺物実測図	89
第22图	第8号住居跡・出土遺物実測図	第57图	第36号土坑・出土遺物実測図	90
第23图	第9号住居跡実測図	第58图	第37号土坑・出土遺物実測図	92
第24图	第9号住居跡竈・出土遺物実測図	第59图	第41号土坑・出土遺物実測図	93
第25图	第12号住居跡・出土遺物実測図	第60图	第45号土坑・出土遺物実測図	94
第26图	第13号住居跡実測図(1)	第61图	第1・3・5・7・10号土坑実測図	95
第27图	第13号住居跡実測図(2)・竈2実測図	第62图	第11~15・17~21号土坑実測図	96
第28图	第13号住居跡竈1・出土遺物実測図	第63图	第23~33・38~40・42号土坑実測図	97
第29图	第14号住居跡・出土遺物実測図	第64图	第43・44・46・47~59号土坑実測図	98
第30图	第15号住居跡実測図	第65图	第60~63号土坑実測図	99
第31图	第15号住居跡竈実測図	第66图	第1号炉穴実測図	101
第32图	第15号住居跡出土遺物実測図	第67图	第1号溝土層断面図・出土遺物実測図	102
第33图	第16号住居跡実測図			
第34图	第16号住居跡竈・出土遺物実測図	第68图	第1~3号石器集中地点遺物出土状況図	103

第69図	第1号石器集中地点出土遺物実測図	105	第84図	第7号土坑実測図	132
第70図	第2・3号石器集中地点出土遺物実測図	106	第85図	第8号土坑・出土遺物実測図	132
第71図	遺構外出土遺物実測図(1)	107	第86図	第11号土坑・出土遺物実測図	133
第72図	遺構外出土遺物実測図(2)	108	第87図	第12・16・17号土坑実測図	134
第73図	遺構外出土遺物実測図(3)	109	第88図	第18号土坑・出土遺物実測図	136
第74図	中ノ台遺跡基本土層図(以下、中ノ台遺跡)	115	第89図	第22号土坑実測図	137
第75図	中ノ台遺跡遺構全体図	117~118	第90図	第23号土坑実測図	137
第76図	第1号住居跡実測図	119	第91図	第26号土坑実測図	138
第77図	第4号住居跡実測図	120	第92図	第30号土坑実測図	138
第78図	第6号住居跡実測図	122	第93図	第31号土坑実測図	139
第79図	第8号住居跡実測図	124	第94図	第33号土坑実測図	140
第80図	第9号住居跡実測図	125	第95図	第39号土坑実測図	140
第81図	第2号住居跡・出土遺物実測図	127	第96図	その他の土坑実測図(1)	142
第82図	第3号住居跡・出土遺物実測図	129	第97図	その他の土坑実測図(2)	143
第83図	第3号土坑・出土遺物実測図	131	第98図	遺構外出土遺物実測図(1)	144
			第99図	遺構外出土遺物実測図(2)	146

表 目 次

表1	周辺遺跡一覧表	9	表4	中ノ台遺跡住居跡一覧表	130
表2	星合遺跡住居跡一覧表	85	表5	中ノ台遺跡土坑一覧表	143
表3	星合遺跡土坑一覧表	99			

写真目次

- 屋台遺跡 (PL1 ~ PL20)
- PL 1 遺跡全景, I, II, III区調査終了全景, IV区調査終了全景
- PL 2 遺跡遠景, 遺構確認状況, 第1, 2, 11号住居跡完掘状況, 第1, 2号住居跡遺物出土状況, 第1号住居跡竈完掘状況
- PL 3 第3, 4, 5, 7号住居跡完掘状況, 第3, 4, 5, 7号住居跡竈完掘状況
- PL 4 第8, 9, 12, 13号住居跡完掘状況, 第9, 12号住居跡遺物出土状況, 第9, 13号住居跡竈完掘状況
- PL 5 第14, 15, 16, 17号住居跡完掘状況, 第15, 16号住居跡遺物出土状況, 第15, 16, 17号住居跡竈完掘状況, 第16号住居跡竈遺物出土状況
- PL 6 第18, 19, 20, 22, 23号住居跡完掘状況, 第20号住居跡遺物出土状況, 第18, 22号住居跡竈遺物出土状況
- PL 7 第6, 10, 21号住居跡完掘状況, 第6, 10, 21号住居跡遺物出土状況, II区旧石器調査状況, 第1石器集中地点遺物出土状況
- PL 8 第2, 4, 10, 19号土坑完掘状況, 第6, 12, 21, 22号土坑遺物出土状況
- PL 9 第25, 34, 35, 36, 37号土坑完掘状況, 第30, 36, 37, 45号土坑遺物出土状況
- PL 10 第1, 2号住居跡出土遺物
- PL 11 第2号住居跡出土遺物
- PL 12 第3, 5, 6, 7号住居跡出土遺物
- PL 13 第6, 7, 9, 10号住居跡出土遺物
- PL 14 第10, 13, 12, 15号住居跡出土遺物
- PL 15 第13, 15, 16号住居跡出土遺物
- PL 16 第17, 18, 19, 20号住居跡出土遺物
- PL 17 第20, 21号住居跡出土遺物, 第36, 37号土坑出土遺物, 遺構外出土遺物
- PL 18 第45号土坑出土遺物, 土製品
- PL 19 第1, 2, 3石器集中地点出土遺物
- PL 20 縄文土器, 石鏃, 炭化材相顕微鏡写真
- 中ノ台遺跡 (PL21 ~ PL25)
- PL 21 調査前全景, 遺構確認状況, 第1, 2, 3号住居跡完掘状況, 第2, 3号住居跡遺物出土状況
- PL 22 第6, 8, 9号住居跡完掘状況, 第3, 7号土坑完掘状況, 第3, 8, 11号土坑遺物出土状況
- PL 23 第11, 12, 16, 17, 18号土坑完掘状況, 第17, 18, 22号土坑遺物出土状況
- PL 24 第26, 33, 39号土坑完掘状況, 第30, 32号土坑遺物出土状況, 調査後全景, 旧石器調査状況
- PL 25 第2, 3号住居跡出土遺物, 遺構外出土遺物

第1章 調査経緯

第1節 調査に至る経過

茨城県は、首都圏に位置する地理的優位性と高速道路をはじめとした交通ネットワークの発達や港湾施設等の整備により、首都圏発展の一翼を担う北関東エリアの中心としての役割がますます増大している。そういう中、阿見町に公営企業制度を活用した、本県第1号事業として「阿見東部工業団地造成事業」が計画された。当町は、東京から50km圏に位置し、首都圏中央連絡自動車道の整備計画路線や成田新国際空港にも近く、交通アクセスの良さにより、極めて優位な立地条件を有する地域である。

平成6年5月9日、茨城県(企業局)は、茨城県教育委員会に対し、阿見東部工業団地造成事業予定地内における埋蔵文化財の有無について照会した。茨城県教育委員会は、平成7年3月14・15日に現地踏査、同年7月24～27日に試掘調査を実施し、予定地内に屋合遺跡及び中ノ台遺跡の存在を確認し、その旨を茨城県に回答した。平成8年3月5日以降、茨城県教育委員会は、茨城県と遺跡の取り扱いについて文化財保護の立場から慎重に協議を重ね、その結果、現状保存とすることが困難であることから記録保存の措置を講ずることとし、調査機関として財団法人茨城県教育財団を紹介した。

茨城県教育財団は、茨城県と埋蔵文化財発掘調査に関する業務の委託契約を結び、屋合遺跡の一部を平成8年4月1日から平成9年3月31日にかけて発掘調査を実施することとなった。

その後、調査の進捗に伴い予想されたよりも遺構が少ないことが明らかになり、屋合遺跡全体に調査を拡張した。

同様に、中ノ台遺跡については、平成9年4月1日から9月30日まで発掘調査を実施することとなった。しかし、中ノ台遺跡についても遺構が少なく、7月15日までに調査期間が短縮された。

第2節 調査経過

屋合遺跡及び中ノ台遺跡の発掘調査は、平成8年4月1日から9年7月15日までの1年4か月にわたり実施した。以下、調査経過の概要を月ごとに記述する。

平成8年度

- 4月 1日から屋合遺跡の発掘準備に取りかかった。8日に現地踏査を行い、比較的多くの縄文土器片及び土師器片を採集した。16日からは、調査補助員を雇用して調査区の清掃や調査のための器材搬入を行った。23日午前、発掘調査の円滑な進行と作業の安全を願って飯入式を行い、同日午後にはⅢ区に幅2m、長さ100mのトレンチを3本設定し、第1トレンチから試掘を開始した。28日までに、竪穴住居跡、掘立柱建物跡、溝及び土坑などを確認し、土師器片、須恵器片を中心に多数の遺物を採集した。
- 5月 Ⅲ区の試掘を継続し、7日までに竪穴住居跡3軒を確認した。8日からⅠ区の試掘に入ったが、部分的にトレンチャーによる激しい攪乱を受けていたため、調査困難と判断された一部分については調査を放棄した。つづいて、確認された遺構の調査に着手した。
- 6月 7日までにⅠ区の試掘を終了し、基壇と思われる土壌を2基確認した。10日からⅡ区の杉林の中の試掘に移った。平行に植林された杉の間にトレンチを設定し、試掘を開始した。24日までに住居跡6軒及

び土坑数基を確認し、少量の土師器片、須恵器片、石鏃及び骨舌尖頭器などを採集した。

- 7 月 5日からⅡ区の杉林に重機を入れて、立木伐開を開始した。並行して、遺構が確認された杉の木のない部分について、人力で表土除去を行い遺構調査を開始した。立木伐開終了後、25日から重機による表土除去を開始した。
- 8 月 9日に重機による表土除去を終了し、住居跡6軒及び土坑30基を確認した。12日から遺構の掘り込み作業を開始した。この間、業者委託により基準杭打ちを行った。
- 9 月 前月に引き続き、Ⅱ区の遺構調査を進めた。住居跡が3軒確認されていたⅢ区の遺構調査にも取りかかった。その結果、15日ごろまでに、Ⅱ区の住居跡6軒が、縄文時代1軒、古墳時代3軒及び平安時代2軒であることがわかった。また、30日までに、Ⅲ区の住居跡3軒が、いずれも古墳時代のものであることがわかった。
- 10 月 2日から、旧石器が採集されているⅠ区、Ⅱ区及びⅢ区にグリッドを設定して旧石器調査を開始し、Ⅱ区で旧石器集中地点を1か所確認した。調査の結果、主に頁岩製のナイフ、フレーク及びチップが出土した。Ⅰ区～Ⅲ区について調査を終了し、24日に航空写真撮影を実施した。29日から、Ⅳ区に3本のトレンチを設定して試掘調査に入った。
- 11 月 Ⅳ区の試掘を継続し、7日までに住居跡2軒及び土坑2基を確認した。13日までに住居跡及び土坑が確認された部分について、遺構調査のために部分的に人力で表土除去を行った。15日には第2号住居跡から臼玉1個が出土した。23日から重機による表土除去に入り、排土作業に合わせて遺構確認作業を進めた。
- 12 月 引き続きⅣ区の重機による表土除去を行うとともに、ジョレンで削平しながら遺構確認作業を継続した。12日には、確認された土坑から火葬骨を納めた須恵器の壺が出土した。13日に重機による表土除去が終了し、住居跡14軒を確認した。さらに遺構確認作業を進めながら、一部遺構調査を開始した。18日から業者委託により基準杭打ちを行った。遺構調査が順調に進み、古墳時代の遺物を中心に須恵器や土師器が比較的多量に出土した。
- 1 月 7日から調査を開始した。引き続き遺構調査が順調に進んだ。
- 2 月 遺構調査継続。20日までに掘り込み作業をほぼ終了し、実測図面の作成を残して、旧石器が出土している部分を拡張して旧石器調査に移った。26日には、リモコンヘリコプターを使って航空写真撮影を行った。
- 3 月 旧石器調査を継続しながら、4日には、茨城県及び阿見町教育委員会に対して発掘調査の成果を報告した。6日に報道発表を行い、8日午後には190名の参加者を集めて現地説明会を開催した。17日までに、旧石器調査を終了し、19日には安全対策を含め現地調査をすべて終了した。事務所、図面点検及び調査終了事務を行い、31日までに屋台遺跡のすべての業務を終えた。

平成9年度

- 4 月 1日から、中ノ台遺跡の発掘準備に取りかかった。7日午前中に現地踏査を行い、少量の縄文土器片を採集した。同日午後、茨城県（企業局）と調査エリアの確認等を行い、阿見町教育委員会等の関係機関へ発掘調査について説明し協力を要請した。16日に調査補助員を雇用し、同日午後からトレンチを設定して試掘を開始した。表土の深さは、調査区中央部で25～30cmだが、縁辺部は深くて1mを越えている。縁辺部での表土の堆積状況に、重機によって動かしたような様子が認められた。縁辺部近くの谷に落ち込む手前部分に、遺構が残っている可能性が高いと考え、その部分に集中的に試掘を入れた。その

結果、住居跡2軒と陥し穴と思われるものも含め多数の土坑が確認できた。

- 5 月 引き続き、遺構の分布状況を把握するため試掘を継続した。15日から重機による表土除去を開始し、並行して遺構確認作業を進めた。重機による削平のため、ローム面と耕作土の境界が明確で、表土除去は比較的早く進んだ。表土中には、遺物がほとんど見られなかった。
- 6 月 2日に重機による表土除去を終了した。5日までに遺構確認作業を終了し、電をもつ住居跡2軒、焼土を取り囲む柱穴列7組、及びピット状のものも含めて土坑250基以上を確認した。10日午前中に遺構確認状況の写真撮影を行い、午後から遺構の掘り込みを開始した。北端から次々掘り込んでいったが、木根の痕と思われるものも多かった。
- 7 月 引き続き遺構調査を進めた。7日までに、完掘遺構の実測図面作成を除き掘り込み作業を終了した。調査区南部に12m四方のグリッドを組んで、旧石器調査を行った。14日に全景写真を撮影し、15日に中ノ台遺跡のすべての現地調査を終了した。

第2章 位置と環境

第1節 地理的環境

星合遺跡は、茨城県稲敷郡阿見町大字上条字星合2,113番地の11ほかに、中ノ台遺跡は、茨城県稲敷郡阿見町大字飯倉字中ノ台1,319番地の2ほかに所在する。両遺跡は、阿見町役場から南東約4.5kmに位置している。

遺跡が所在する阿見町は、面積64.68km²で、東西9km、南北11kmのひろがりをもち、北部は霞ヶ浦をはさんで新治郡霞ヶ浦町に対し、東部は美浦村、南部は江戸崎町及び牛久市、西部は土浦市とそれぞれ境を接している。東京及び県庁所在地の水戸へ、約60kmの距離にあり、常磐線・国道6号線を通じ、常磐線荒川沖駅に近接している。また、町の北部には国道125号線が東西に走り鹿嶋臨海工業地帯に通じ、県道荒川沖阿見線は国道6号線に接続し、筑波研究学園都市の東大通りに直結している。

阿見町は、関東平野の北東部、利根川沿岸から霞ヶ浦沿岸にかけて広がる常陸台地（洪積台地）の一部をなす筑波・稲敷台地の北東部に位置している。台地の標高は、24～30mで、東から西に徐々に低下していく。台地面は、清明川・桂川・乙戸川・花室川によって開析され、台地には複雑な樹枝状の支谷が刻まれている。両遺跡の近くを流れる清明川は、阿見一区北の台地を水源とし、境までほぼ東南に流れ、境地内で流路を大きく北に転じ、石川・島津の間を流れて美浦村舟子で霞ヶ浦に注ぐ。清明川とその支流は、若栗・上条・飯倉・大形・君島・石川・追原などで複雑な樹支状の支谷を形成している。

台地は、町の土地面積の約80%を占め、畑・山林・宅地の順で利用され、沖積低地の大部分は水田として利用されている。台地では、野菜生産が盛んで、主般農業から輸送園芸・都市近郊農業への移行が急速に進んでいる。近年、宅地化、工業化が著しく、人口は46,550人（平成9年8月1日）で、西部から北西部は市街化区域が設定されて都市化が進んでいる。また、桂川沿岸には福田工業団地、追原の清明川沿いには筑波南第一工業団地が建設されている。

両遺跡は、清明川及び清明川の浸蝕によって刻まれた支谷に面して立地している。星合遺跡は、北部で清明川に面し、東部及び西部には清明川が刻んだ支谷が入り込んでいる。標高は約24mで、水田との比高は北部で約10mである。現況は、山林及び畑で、杉が植林され牛蒡やグラジオラスが栽培されている。中ノ台遺跡は、清明川が刻んだ支谷に舌状に延びた標高23～25mの台地の中央部に位置している。北部及び南部に支谷が広がり、西部にも小さな支谷が浸入している。支谷は水田として利用され、水田との比高は約10mで、斜面の傾斜は比較的急である。調査区は、杉林だったところを開拓して畑地とし、主に西瓜を栽培していた。

参考文献

- | | | |
|-------------|---------------|----------|
| ・阿見町史編さん委員会 | 『阿見町史』 | 1983年3月 |
| ・茨城県農地部農地課 | 『土地分類基本調査 土浦』 | 1983年12月 |
| ・蜂須紀夫 | 『茨城県 地学のガイド』 | 1986年11月 |

第2節 歴史的環境

尾合遺跡及び中ノ台遺跡の所在する霞ヶ浦周辺には、縄文時代以降の多くの遺跡が分布している。阿見町内にも縄文時代や古墳時代を中心に多くの遺跡が所在している。その中で、両遺跡周辺の遺跡について時代を追って概観してみたい。

旧石器時代の遺跡はこれまで確認されていない。遺物は島津の後原で礫石器が、君島天神で打製掘斧が出土している。

縄文時代の遺跡としては、島津遺跡〈2〉、島津貝塚群〈3〉、イタチ内貝塚〈5〉、宮平貝塚群〈8〉、石川遺跡〈13〉、本郷遺跡〈14〉、平遺跡〈17〉、高野遺跡〈18〉、浅間貝塚〈21〉、追原西遺跡〈23〉、茅場遺跡〈29〉、君島古墳群〈33〉、羽賀戸古墳群〈34〉、小山前遺跡〈36〉、平内次郎遺跡〈37〉及び竹の入遺跡〈38〉などがある。島津遺跡では、馬の背状の台地一帯に縄文時代前期から後期にかけての土器が比較的濃く散布している。島津貝塚群では、径約3mほどの貝塚が5か所確認されている。イタチ内貝塚では、長泰寺の裏に小規模な貝塚が確認され、縄文時代中期及び後期の土器片が採集されている。宮平貝塚群は、昭和23年に慶応大学中等部考古会により調査が行われ、6～7か所の小貝塚が台地の縁辺部に円形状に分布していることが確認されている。そのうち最大のものは、確認面での貝の散布が長軸60m、短軸40mにも及んでいて、縄文時代の前期から中期にかけての土器が出土している。浅間貝塚は、清明川の河岸急崖上にあり、ハマグリ、アサリ、ハイガイ、アカニシ等を包蔵する小規模な貝塚で、これらとともに縄文時代前期の土器も出土している。また、隣接する牛久市の山神遺跡〈40〉、なま山遺跡〈41〉、原山遺跡〈42〉、米の内遺跡〈43〉及び長久保道添遺跡〈44〉などでも縄文土器が採集されている。

弥生時代の遺跡は少なく、阿見町史には町内で下原遺跡、道記遺跡、桜立遺跡〈30〉、君島遺跡、王浦三高遺跡及び大室遺跡が紹介されている。また、牛久市の原山遺跡でも弥生土器片が出土している。

古墳時代の遺跡は極めて多く、狐数遺跡〈1〉、島津遺跡、イタチ内古墳群〈4〉、梶内台遺跡〈6〉、島瓜谷遺跡〈7〉、道心谷遺跡〈9〉、荒匂古墳群〈12〉、石川遺跡、本郷遺跡、長作古墳群〈15〉、入谷津古墳群〈20〉、西ノ入遺跡〈22〉、追原西遺跡、五斗蔭古墳〈24〉、北原古墳群〈27〉、西ノ前遺跡〈28〉、桜立遺跡、荒砂古墳群〈31〉、前原古墳〈32〉、君島古墳群、羽賀戸古墳群、八幡古墳群〈35〉、小山前遺跡、平内次郎遺跡、竹の入遺跡などが知られている。

梶内台遺跡は、国道125号線の道路改良工事に伴い昭和62年1月から3月にかけて調査が行われ、9世紀を中心に竪穴住居跡13軒、竪穴状遺構9基及び溝状遺構5条が確認され、土師器や須恵器が出土している。また、鍛冶炉であるタカラ状遺構が検出されている。道心谷遺跡は、民間の飛行場建設に伴って、昭和52年10月から翌年の2月まで調査が行われ、古墳時代後期の竪穴住居跡30軒等が確認され、土師器、須恵器、土製品及び石製品などが出土している。入谷津古墳群は、清明川左岸の舌状台地に位置し、小学校の建設に伴い円墳1基の調査が行われた。この円墳は径20m、高さ1.2mで、出土遺物から古墳時代後期のものと見られる。五斗蔭古墳は削平されていて詳細は不明であるが、円墳と考えられ石棺が出土している。君島古墳群は、清明川が開折した谷津が入り込んだ台地上に9基の墳丘が形成されている。その中で、3号墳は径27mの円墳で、削平されているため高さは不明であるが、石棺が露出し、直刀、甲冑及び円筒埴輪等が出土している。また、11号墳からは、象形埴輪、円筒埴輪、土師器、須恵器等が出土している。桜立遺跡は、清明川の水源になっている台地上に位置する。墓地造成のために発掘調査が行われ、竪穴住居跡が9軒確認された。遺構の時期は出土した埴

器台及び高坏の形態的特徴から古墳時代前期に位置付けられるものと考えられる。いずれの住居跡も火を受けているが、けやき、樫及び炭化半ばの角材などが出土している。平内次郎遺跡は、清明川が浸蝕してできた支谷に面した斜面に土師器が散布している。一角に竈跡と思われる遺構が確認できる。竹の入遺跡は、浸蝕した谷津に南向きに面した台地上に土師器が散布している。平成3年8月～10月にかけて個人の自宅兼事務所建設に伴って調査された阿見町阿見に所在する阿見東遺跡第1地点では、竪穴住居跡10軒（古墳時代中期から後期）土坑6基及び溝1条を確認し、土師器の坏、高坏、甕及び埴、須恵器の坏及び甕、石製模造品などが出土している。また、第3号住居跡からは石製模造品が集中的に、しかも、多くが床面から出土していることから石製品の工房跡ではないかと考えられている。大字小池字日本松所在の下小池東遺跡は、工業団地造成に伴い昭和53年4月から7月までの調査が行われ、竪穴住居跡11軒（古墳時代中期）を確認し、土師器、須恵器、有孔円板、勾玉等が出土している。大字阿見字宮脇所在の宮脇遺跡は、街路改良工事に伴い昭和59年10月から昭和60年2月まで調査が行われた。調査の結果、24軒の住居跡（古墳時代）、竪穴状遺構3基、竪柱建物跡3棟、粘土版築基壇1棟等を確認し、土師器及び須恵器等が出土している。

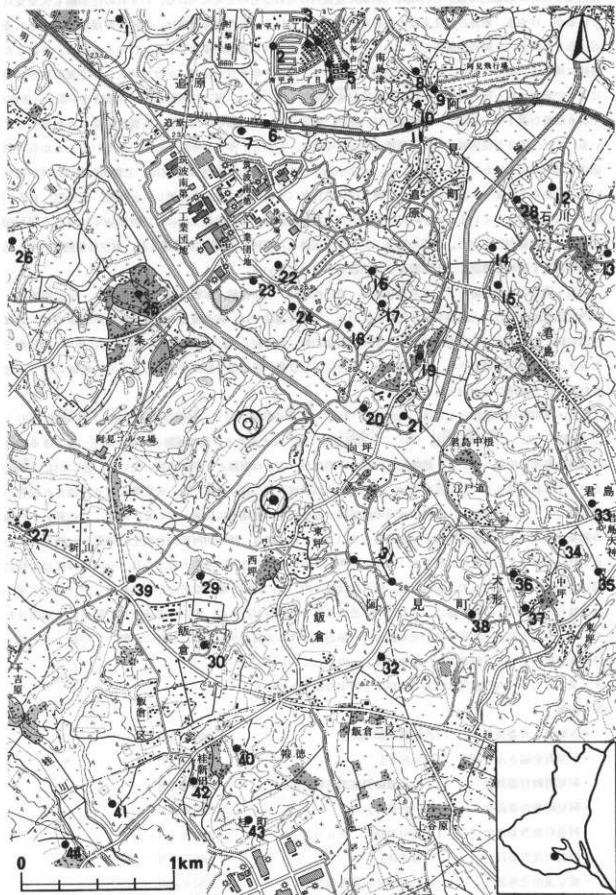
奈良・平安時代の遺跡としては烏瓜台遺跡、道心台遺跡、石川遺跡、本郷遺跡、西ノ前遺跡、小山前遺跡、平内次郎遺跡及び竹の入遺跡などが知られている。烏瓜台遺跡では、林道坂道の崖面に焼土が確認でき、のぼり窯の跡と思われる。梶内台遺跡では、竪穴住居跡13軒（9世紀）、竪穴状遺構9基、溝5条に加えて鍛冶炉であるタラ状遺構が確認され、土師器の坏、高台付坏及び甕、須恵器の甕及び釜などとともに製鉄に伴うと思われる羽口や鉄滓などが出土している。

鎌倉・室町時代の遺跡としては、島津城跡（10）、長泰寺院跡（11）、蔵福寺院跡（16）、塙城跡（19）、上条城跡（25）、若栗寄居館跡（26）、二重堀遺跡（39）などがある。島津城跡は、霞ヶ浦を一望できる細長い台地の鞍部に位置している。建物配置などは不明だが、大きな堀跡と土塁跡が残っている。近くには、「御城」という小字名が残っている。長泰寺は、16世紀末に島津城外郭に建立されたが、火災等により移設され現在の地に移って入る。塙城跡は、清明川河岸の高抜30m近い台地の先端部に位置している。本郭、二の郭とその他の郭及び精巧な上塁と飲堀を備えた堀が残っている。上条城跡は、清明川河岸の台地上に位置し、残存している土塁、堀跡などを繋ぎ合わせると、本郭の周囲を二の郭が取り巻く回字型と考えられ、その他の郭は舌状台地に合わせて築かれたものと思われる。付近には城ノ内、台、堀頭、横町などの小字名が残っている。大字小池字城の内所在の下小池城跡は、工業団地の造成に伴って調査が行われ、虎口、薬研掘りの堀などが確認されている。大字大室字字治所在の大室城跡は、宅地造成に伴って調査が行われ、城跡の本郭、二の郭、山王郭、帯郭及び根古屋などが確認され、鉄製品などが出土している。

* 文中の〈 〉内の番号は、表1及び第2図中の番号と対応する。

参考文献

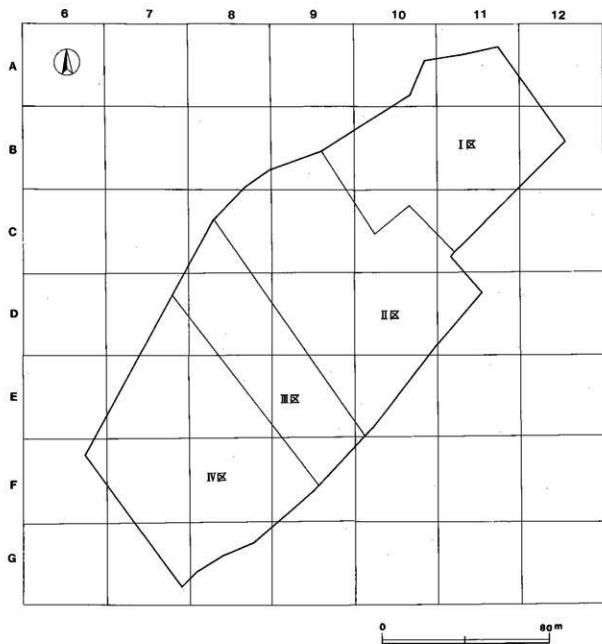
- | | | |
|-------------|--------------------|----------|
| ・茨城県教育委員会 | 『茨城県遺跡地図』 | 1990年3月 |
| ・阿見町史編さん委員会 | 『阿見町史』 | 1983年3月 |
| ・阿見町教育委員会 | 『下小池遺跡発掘調査報告書』 | 1979年3月 |
| ・阿見町教育委員会 | 『梶内台遺跡』 | 1981年12月 |
| ・阿見町教育委員会 | 『阿見町史研究 第6号』 | 1985年3月 |
| ・阿見町教育委員会 | 『宮脇遺跡』 | 1985年3月 |
| ・桜立遺跡発掘調査会 | 『桜立遺跡発掘調査報告書』 | 1982年12月 |
| ・茨城県立歴史館 | 『茨城県史料 考古資料編 古墳時代』 | 1974年2月 |



第2図 周辺遺跡分布図

表1 周辺遺跡一覧表

番 号	遺 跡 名	県 遺跡番号	時 代					番 号	遺 跡 名	県 遺跡番号	時 代					
			旧 石 器	縄 文	弥 生	古 墳	奈良・平安				鎌倉・室町	江 戸	旧 石 器	縄 文	弥 生	古 墳
◎	星合遺跡		○	○	○	○		22	西ノ入遺跡	2792			○			
◎	中ノ台遺跡			○		○		23	追原西遺跡	3977	○	○				
1	皿敷遺跡	5676				○		24	五斗蒔古墳	1673			○			
2	島津遺跡	5677		○		○		25	上条城跡	3988						○
3	島津貝塚群	5678		○				26	若栗寄居館跡	5693						○
4	イタチ内古墳群	5679				○		27	北原古墳群	5707				○		
5	イタチ内貝塚	5680		○				28	西ノ前遺跡	5708				○	○	
6	梶内台遺跡	3986				○	○	29	茅場遺跡	5713		○				
7	烏瓜台遺跡	5681				○	○	30	桜立遺跡	5714			○	○		
8	宮平貝塚群	1676		○				31	高砂古墳群	1681				○		
9	道心台遺跡	5682				○	○	32	前原古墳	5716				○		
10	島津城跡	3987					○	33	君島古墳群	1671		○	○			
11	長泰寺院跡	1675					○	34	羽賀戸古墳群	1672		○	○			
12	荒匂古墳群	5683				○		35	八幡古墳群	3980				○		
13	石川遺跡	5684		○		○	○	36	小山前遺跡	5717		○		○	○	
14	本郷遺跡	5687		○		○	○	37	平内次郎遺跡	5718		○		○	○	
15	長作古墳群	5688				○		38	竹の入遺跡	5719		○		○	○	
16	蔵福寺院跡	3990					○	39	二重堀遺跡	5722						○
17	平遺跡	5689		○				40	山神遺跡	3411		○				
18	高野遺跡	5690		○				41	なぎ山遺跡	3412		○				
19	塙城跡	3989					○	42	原山遺跡	3413		○	○			
20	入谷津古墳群	5691				○		43	米の内遺跡	3414		○				
21	浅間貝塚	5692		○				44	長久保道添遺跡	3415		○				



第3图 星合遗址调查区剖图

第3章 星合遺跡

第1節 遺跡の概要

星合遺跡は、阿見町の南東部に位置し、JR常磐線荒川沖駅から南東に8km程に所在している。当遺跡は、標高24km程の舌状台地上に立地し、遺跡の北東側には清明川が流れ、北西側と南東側には小支谷が清明川に向かって開口しており、地形的変化に富んでいるところである。遺跡の現況は、畑地と山林で、調査面積は、29,106㎡である。

今回の調査によって、縄文時代中期の竪穴住居跡1軒、古墳時代前期の竪穴住居跡3軒、後期の竪穴住居跡16軒、平安時代の竪穴住居跡3軒、その他、溝1条、竅穴1基、土坑62基（内火葬墓跡1基、土坑墓2基）、旧石器の集中地点3か所を検出した。以上のことから、当遺跡は旧石器時代から平安時代にかけての複合遺跡であることが判明した。

遺物は、遺物収納箱（60×40×20cm）に35箱出土した。旧石器時代の遺物は、ナイフ形石器、石刃、剥片が出土している。縄文時代の遺物は、縄文土器片、有舌尖頭器、磨製石斧、磨石、敲石、石鏃が出土している。古墳時代の遺物は、土師器（甕、壺、甌、坏、椀、高坏、器台、手捏）・須恵器（甕、坏、蓋、高坏、甕）・土製品（管状土錘、球状土錘）・石製模造品（勾玉、剣）、白玉、ガラス小玉等が出土している。奈良・平安時代の遺物は、土師器（甕、高台付坏、坏）・須恵器（甕、坏、蓋、盤）・灰胎陶器（長頸壺）・瓦・石製品（紡錘車）が出土している。

第2節 基本層序

当遺跡においては、調査2区東部、C10e₂区にテストピットを設定し、基本土層の観察を行った。（第4図）

第1層は、22～60cmの厚さの耕作土層で、黒褐色をしている。

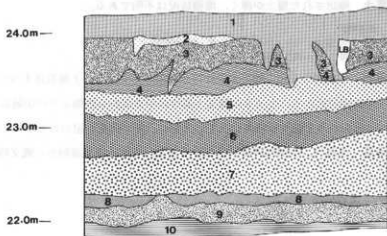
第2層は、5～23cmの厚さで、明褐色をしたソフトローム層である。

第3層は、24～50cmの厚さで、ローム大・小ブロックを含んだ明褐色のハードローム層への漸移層である。

第4層は、6～48cmの厚さで、ローム大ブロックを多量に含んだ明褐色のハードローム層である。

第5層は、17～38cmの厚さで、黄褐色のハードローム層である。

第6層は、28～50cmの厚さで、明褐色のハードローム層である。



第4図 星合遺跡基本土層図

- 第7層は、38～70cmの厚さで、褐色のハードローム層である。
- 第8層は、3～12cmの厚さで、にぶい黄橙色の粘土層への漸移層である。
- 第9層は、12～26cmの厚さで、にぶい褐色の常総粘土層である。
- 第10層は、灰褐色の常総粘土層である。
- 遺構は、第2層上面で確認した。旧石器は、第2・3層から出土している。

第3節 遺構と遺物

1 竪穴住居跡

今回の調査では、縄文時代をはじめ、古墳時代から平安時代に至る住居跡を23軒検出した。以下、検出された竪穴住居跡の特徴と、そこから出土した主な遺物について記載する。

(1) 縄文時代の住居跡

第11号住居跡（第6図）

位置 II区東部，D10d，区。

規模と平面形 長径5.80m，短径5.17mの楕円形。

主軸方向 N-90°

壁 壁高は10～20cmで、外傾して立ち上がる。

床 平坦で、硬化面は見られない。

ピット 5か所（P₁～P₅）。P₁～P₃は、長径18～30cm，短径15～25cmの円形及び楕円形で、深さ12～26cmである。規模や配置から主柱穴と思われる。

覆土 確認された覆土が薄く、堆積状況は不明である。

土層解説

- 1 黄褐色 ローム小ブロック少量，炭化物微量
- 2 褐色 黒色土粒子少量

遺物 土師器片5点，縄文土器片77点が出土している。土師器はすべて混入である。第6図1の縄文土器片は中央部付近から、2・3の縄文土器片は中央部から西側よりの中層および下層から出土している。縄文中期と思われる土器片は数多く出土しており，縄文前期と思われる1・3の縄文土器片は混入と思われる。

所見 本跡は，炉跡は確認できなかったが，形状・出土遺物から縄文時代中期の住居跡であると思われる。

(2) 古墳時代の住居跡

第1号住居跡（第7～9図）

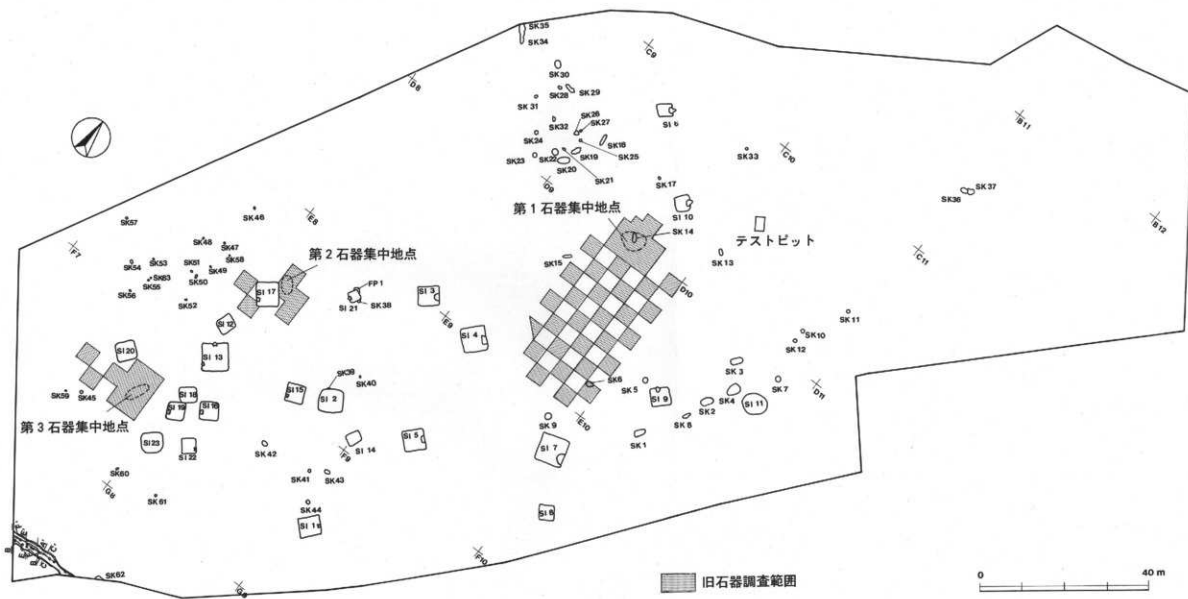
位置 IV区南東部，F9e，区。

規模と平面形 長軸5.18m，短軸4.89mの方形。

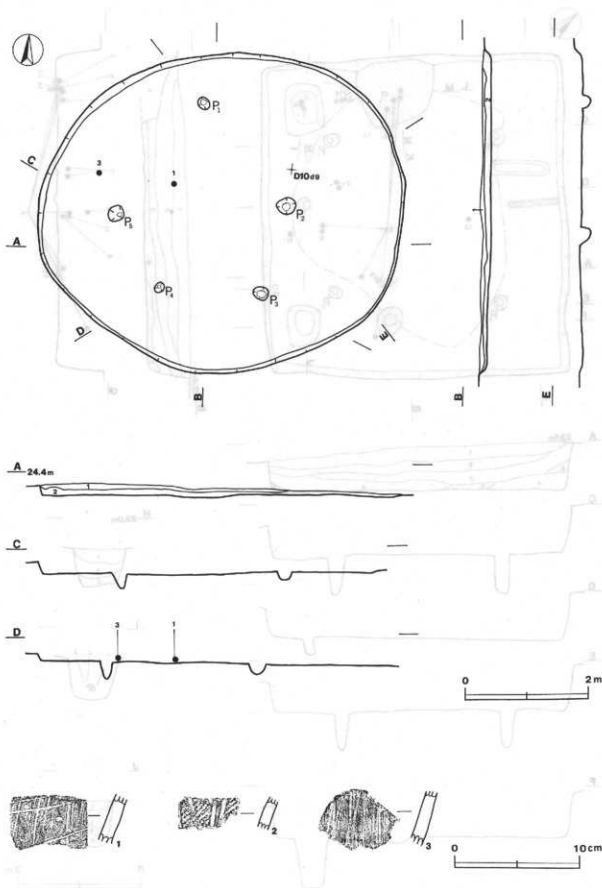
主軸方向 N-47°-E

壁 壁高は40～74cmで，ほぼ垂直に立ち上がる。

床 平坦で，出入口部から竈にかけての中央部が踏み固められている。北西壁側に2条の溝が確認されている。

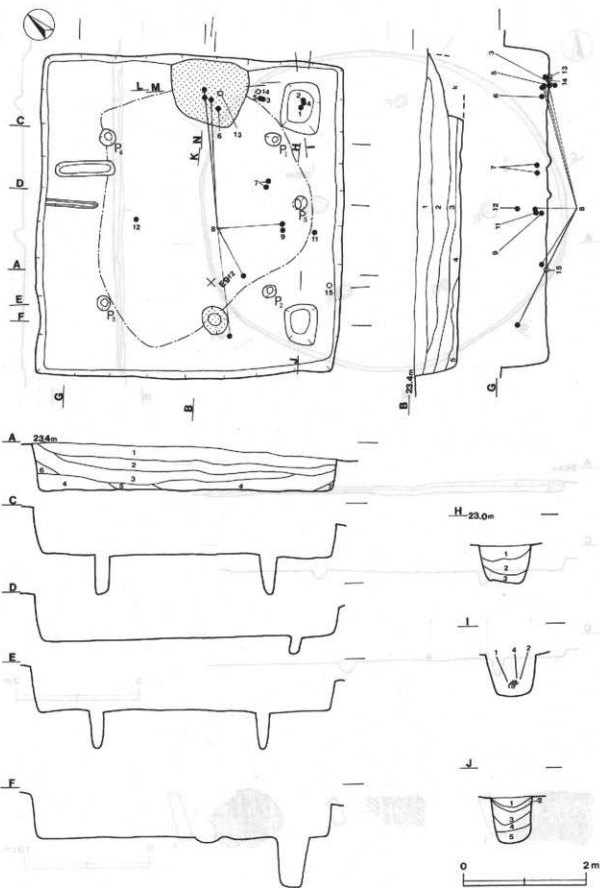


第5図 星合遺跡 遺構全体図



第6图 第11号住居跡・出土遺物実測図

2017年度調査報告書・第1巻 図17



第7图 第1号住居跡实测图

国史館東京分館蔵、縄文時代資料、第1巻

幅8~21cm、深さ4~7cmで、断面形はU字状をしている。

ピット 5か所(P₁~P₅)。P₁~P₄は、長径22~27cm、短径20~26cmの円形及び楕円形で、深さは60~65cmである。いずれも、その規模や配置から主柱穴と考えられる。P₅は、長径が22cm、短径が18cmの楕円形で、出入口施設に伴うピットと考えられる。

貯蔵穴 東コーナー部に貯蔵穴1、南コーナー部に貯蔵穴2が付設されている。貯蔵穴1は長軸82cm、短軸66cmの長方形で、深さは60cmである。断面形は逆台形で、平坦な底面から外傾して立ち上がる。貯蔵穴2は長軸65cm、短軸53cmの長方形で、深さは73cmである。断面形はU字状である。

貯蔵穴1土層解説

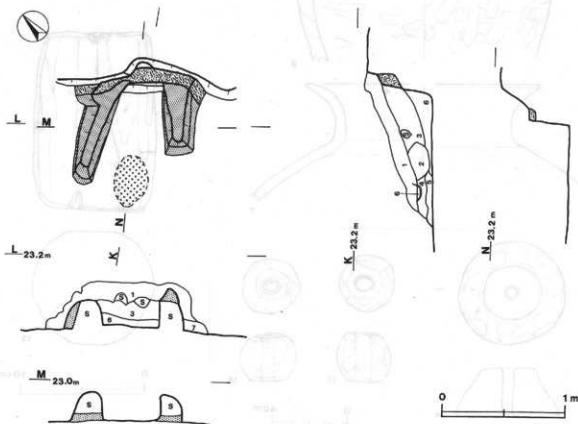
- 1 赤褐色 rome土少量炭化物・焼土粒子・rome小ブロック微量
- 2 暗褐色 rome土粒子・焼土粒子微量
- 3 黒褐色 炭化物・rome土少量、焼土粒子微量

貯蔵穴2土層解説

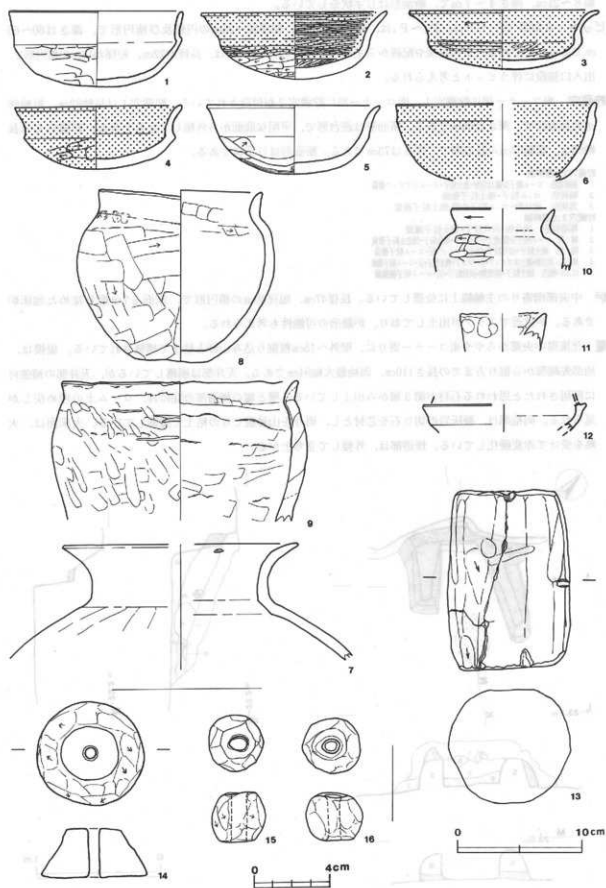
- 1 赤褐色 炭化物・炭化粒子・焼土粒子微量
- 2 褐色 rome土少量、焼土小ブロック・炭化粒子・炭土粒子微量
- 3 褐色 焼土粒子・炭化粒子・粘土ブロック・炭・rome土微量
- 4 褐色 炭化物・焼土小ブロック・小ブロック・焼土粒子・炭・rome土微量
- 5 におい褐色 焼土粒子・炭化物・炭化粒子・炭・rome土微量

炉 中央部南寄りの主軸線上に位置している。長径47cm、短径40cmの楕円形で、床面を7cm掘り窪めた地床形である。炉付近でスラグが出土しており、炉鍛冶の可能性も考えられる。

竈 北東壁中央部からやや東コーナー寄りに、壁外へ15cm程掘り込み山砂と粘土で構築されている。規模は、両袖先端部から掘り方までの長さ110cm、両袖最大幅94cmである。天井部は崩落しているが、天井部の補強材に使用されたとと思われる石材が第3層から出土している。壁と竈の煙道部の間には、rome土の埋め戻しが見られる。両袖部は、凝灰岩の切り石を芯材とし、周りを山砂混じりの粘土で構築している。火床面は、火熱を受けて赤変硬化している。煙道部は、外傾して立ち上がる。



第8図 第1号住居跡 竈実測図



第9图 第1号住居跡出土遺物実測図

図面実測 縮尺1/20 1:20

覆土層解説

- | | | | |
|----------|--------------------------------|---------|-----------------------------------|
| 1 におい赤褐色 | ローム粒子・焼土中・小ブロック・焼土粒子微量 | 5 極暗赤褐色 | 焼土粒子少量・ローム・炭化物・炭化粒子・粘土粒子・灰粒子微量 |
| 2 極暗赤褐色 | 焼土中・小ブロック・焼土粒子・炭化物・炭化粒子・粘土粒子微量 | 6 暗赤褐色 | 粘土粒子少量・焼土中・小ブロック・焼土粒子・粘土粒子・山砂・灰微量 |
| 3 暗赤褐色 | 焼土大ブロック・焼土粒子・炭化物・炭化物・灰少量 | 7 灰褐色 | 炭化粒子中量・山砂・粘土少量・焼土粒子微量 |
| 4 暗赤褐色 | 焼土中・小ブロック・焼土粒子少量・炭化物・山砂・灰微量 | | |

覆土 7層からなる自然堆積である。

土層解説

- | | | | |
|--------|---------------------|------|--------------|
| 1 黒褐色 | ローム粒子・焼土粒子微量 | 5 赤色 | 焼土粒子多量 |
| 2 暗褐色 | ローム粒子少量・焼土粒子微量 | 6 褐色 | ローム粒子中量 |
| 3 暗褐色 | ローム粒子少量 | 7 黒色 | ローム粒子・焼土粒子微量 |
| 4 極暗褐色 | ローム粒子少量・焼土粒子・炭化粒子微量 | | |

遺物 土師器片1,532点, 須恵器片13点, 土製品17点, 礎234点, 鉄滓4点が出土している。第9図1と2, 4の土師器環は, 貯蔵穴1の覆土下層から逆位の3枚重ねで出土している。3と5の土師器環は, 竈底面から2枚重なって正位の状態で, 6の土師器環は竈内覆土下層から出土している。7と9の土師器甕は, 中央部からやや南東壁寄りの覆土下層から出土している。8の土師器甕は, 南東壁付近から竈にかけて, 中層から床面に散在して出土した破片が接合したものである。10の土師器小型壺は北西部から, 11の手型土器は南東壁中央付近の覆土下層から出土している。12の須恵器環は, 中央部付近の覆土中層より出土している。13の土製支脚は, 竈内覆土下層より横位で出土している。14の土製紡錘車は竈の右側から, 15の土玉は南コーナー付近から, それぞれ床面から出土している。16の土玉は貯蔵穴覆土中から, 出土している。

所見 本跡は, 床一面に炭化材・焼土塊が多く出土していることから, 焼失家屋と考えられる。時期は, 竈が壁外に出ていない初期竈であることや, 須恵器環, 横置器が出土していることから, 古墳時代後期(5世紀末)と考えられる。炉と竈が共存しており, 如から竈に移行していく時期を知る上で貴重な遺構になると思われる。

第1号住居跡出土遺物観察表

図表番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第9図 1	土師器環	A 13.6 B 6.0	丸底。体部は内彎して立ち上がり, 中位に明瞭な稜を持つ。口縁部は外反する。	口縁部内・外面横方向のナデ。体部内面ナデ, 外面へう削り後一部へう磨き。底部内面ナデ, 外面へう削り。	石英・長石・雲母 鈍い黄褐色 普通	P 1 P L10 100% 貯蔵穴内覆土下層
	土師器環	A 15.0 B 5.3	丸底。体部は内彎して立ち上がり, 中位に明瞭な稜を持つ。口縁部は外反して開く。	口縁部内面横方向のへう磨き。外面横方向のナデ。体部から底部内面へう磨き, 外面へう削り後ナデ。内・外面赤彩。	石英・長石・バミ ス 褐色 良好	P 2 P L10 100% 貯蔵穴内覆土下層 二次焼成
3	土師器環	A 15.1 B 4.7	丸底。体部は内彎して立ち上がり, 中位に明瞭な稜を持つ。口縁部は強く外反して開く。	口縁部内・外面ナデ。体部から底部内面へう磨き。体部外面中位部分的にへう磨き, 下位から底部外面ナデ。内・外面赤彩。	石英・長石 褐色 普通	P 3 P L10 95% 竈底面
	土師器環	A 13.4 B 5.0	丸底。体部は内彎して立ち上がり, 中位に明瞭な稜を持つ。口縁部は強く外反して開く。	口縁部内・外面横方向のナデ。体部から底部内面ナデ, 外面へう削り後ナデ。内・外面赤彩。	長石・雲母・砂粒 スコリア 赤褐色 普通	P 4 P L10 99% 二次焼成 貯蔵穴内覆土下層
5	土師器環	A 14.0 B 5.5	丸底。体部は内彎して立ち上がり, 中位に不明瞭な稜を持つ。口縁部は外反する。	口縁部内・外面横方向のナデ。体部から底部内面ナデ, 外面へう削り後ナデ。	雲母・砂粒 普通	P 5 P L10 95% 竈底面
	土師器碗	A 15.0 B (6.0)	丸底。体部は内彎して立ち上がり, 上位に不明瞭な稜を持つ。口縁部は端部がわずかに外反する。	口縁部内・外面横方向のナデ。体部内面ナデ, 外面へう削り後ナデ。内・外面赤彩。	長石・雲母・砂粒 褐色 不良	P 6 P L10 20% 竈内覆土下層

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第9図 7	甕 土師器	A(19.0) B(9.3)	体部から口縁部にかけての破片。体部は内彎し、頸部は「コ」の字状で、口縁部は外反する。	口縁部内・外面横方向のナデ。体部内・外面ナデ。	砂粒・スコリア 鈍い橙色 普通	P 7 P L10 15%覆土下層 口縁部内部圧痕
8	甕 土師器	A 13.0 B 13.5 C 5.8	底部から口縁部にかけての破片。平底。体部はわずかに内彎して立ち上がり、口縁部は上方に伸びる。	口縁部内・外面横方向のナデ。体部から底部内面ナデ、外面へう削り後ナデ。	細粒・バミス 褐色 普通	P 8 P L10 60% 床面
9	甕 土師器	A(9.5) B(11.1)	体部から口縁部にかけての破片。体部は内彎し、小さな口縁部はわずかに外反する。比較的厚手である。	口縁部内・外面横方向のナデ。体部内面ナデ及び部分的にヘラナデ、外面へう削り後ナデ。	砂粒・スコリア 鈍い橙色 普通	P 9 P L10 15% 覆土下層
10	小形甕 土師器	A(8.9) B(5.0)	体部から口縁部にかけての破片。体部は内彎し、口縁部は外反する。	口縁部内・外面横方向のナデ。体部外面横方向のへう削り、内面ナデ。	バミス 鈍い橙色 普通	P13 20% 覆土下層
11	手捏 土師器	A(7.0) B(3.2)	体部から口縁部にかけての破片。体部は外傾し、口縁部はわずかに外反する。	口縁部内・外面指頭によるナデ。体部外面ナデ。	雲母・スコリア 灰褐色 普通	P 12 25% 覆土下層
12	坏 須恵器	A(13.2) B(2.3)	体部片。体部はわずかに内彎し、口縁部との境に明瞭な線を持つ。	ロクロ成形。体部内・外面ナデ。	長石 灰褐色 普通	P11 5% 覆土中層

図版番号	器種	計 測 値				出土地点	備 考
		長さ(cm)	幅 (cm)	高さ (cm)	孔径 (cm)		
第9図3	土製文脚	径 9.7		14.6	-	140.2	甕内覆土下層 DP 1 P L10
14	土製紡輪	径 5.5		2.6	0.8	77.5	床 面 DP 2 P L18
15	土 玉	径 3.1		2.6	0.5	22.1	床 面 DP 3 P L18
16	土 玉	径 3.0		2.5	0.8	22.6	貯蔵穴覆土中 DP 4 P L18

第2号住居跡(第10・11図)

位置 IV区北東部、E 8 i₁区。

重複関係 本跡の北西壁は、第39号土坑の南東部を掘り込んでいる。

規模と平面形 長軸5.86m、短軸5.24mの隅丸長方形。

主軸方向 N-65°-E

壁 壁高は57~80cmで、ほぼ垂直に立ち上がる。

床 平坦で、硬化面は見られない。南壁側に、溝が1条確認されている。長さ93cm、幅7cm、深さ5cmで、断面形はU字状を呈している。

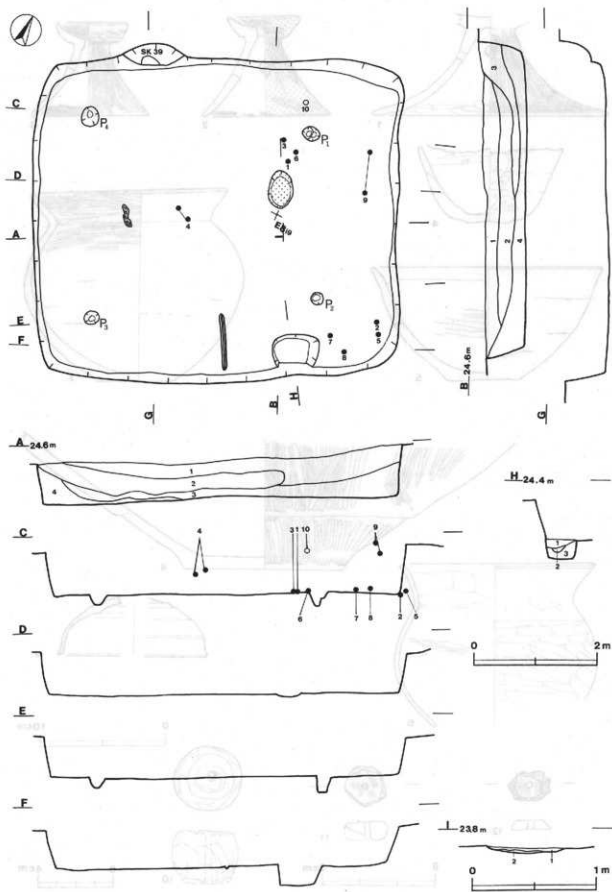
ピット 4か所(P₁~P₄)。P₁~P₄は、長径21~32cm、短径20~28cmの円形及び楕円形で、深さ16~25cmで支柱穴と考えられる。

貯蔵穴 中央部から、南東コーナー寄りに付設されている。長軸74cm、短軸47cmの長方形で、深さは35cmである。断面形は、箱形である。覆土は、3層からなる人為堆積である。

貯蔵穴土層解説

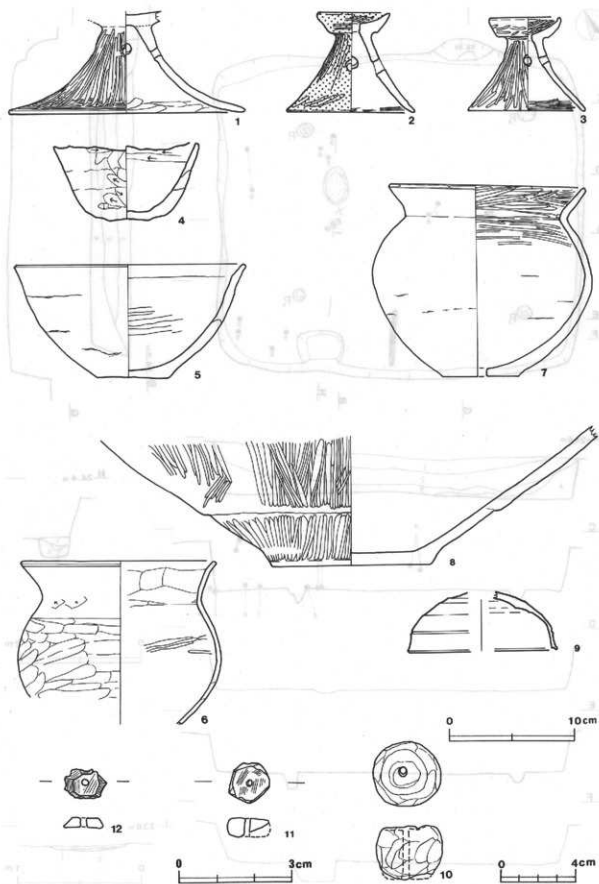
- 1 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量
- 2 褐色 ローム小ブロック少量、ローム中ブロック・炭化粒子微量
- 3 暗褐色 ローム粒子・炭化粒子少量、ローム大ブロック・中ブロック・炭化物微量

炉 中央部から北東寄りにあり、長径60cm、短径40cmの楕円形で、床面を4cm程掘り落めた地床炉である。炉床は、やや赤変硬化している。



第10图 第2号住居跡实测图

国家地质出版社地质研究所编 图17



第11图 第2号住居跡出土遺物実測図

浙江漢代考古學 第一卷 2001年

伊土層解説

- 1 深い赤褐色 焼土粒子少量、ローム粒子・焼土小ブロック少量
 2 赤 色 焼土粒子多量、焼土小ブロック少量

覆土 4層からなる自然堆積と思われる。

土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子・焼土小ブロック・焼土粒子・炭化粒子・黒色土粒子微量
 2 黒褐色 黒色土粒子少量、ローム小ブロック・ローム粒子・焼土粒子・炭化物微量
 3 暗褐色 炭化物少量、ローム小ブロック・ローム粒子微量
 4 褐色 ローム粒子・炭化物少量、焼土小ブロック・焼土粒子微量

遺物 土師器片958点、須恵器片4点、土製品2点、滑石製白玉未製品2点、滑石片6点、礫1点が出土している。第11図1と3の土師器器台は中央部から北東寄りの炉付近から、7の土師器甌は東コーナー付近からそれぞれ床面から出土している。2の土師器器台と5の土師器鉢は東コーナー付近から、8の土師器蓋は南東壁東コーナー寄りから覆土下層から出土している。4の土師器鉢は覆土中から、6の土師器甌は床面から出土している。10の土玉は、北コーナー付近の覆土上層から出土している。11と12の白玉は、床面から出土している。9の須恵器蓋は、北東壁寄り覆土上層から出土しており混入品と思われる。

所見 本跡は、遺構の形態や出土遺物から古墳時代前期（4世紀後半）の住居跡であると思われる。また、覆土上層からは、古墳時代後期の土師器片や手捏土器が集中して出土しており、本跡が埋没する段階で、土器を投棄したか、窪地を利用した祭祀が行なわれた可能性が考えられる。

第2号住居跡出土遺物観察表

図号	器種	寸法(mm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
11図1	器台 土師器	B(8.2) C(19.0)	脚部片。脚部は短く大きく開き、上位に径約8mmの孔が4つ穿たれている。	脚部内面ナデ、外面縦方向のヘラ磨き。	雲母・バイス 褐色 普通	P21 P L10 75% 床面
2	器台 土師器	A(5.7) B(8.1) C(10.2)	脚部一部欠損。脚部はわずかに外反して「ハ」の字状に開き、上位に4孔を穿つ。器受部は低く、外積して立ち上がり、中央に1孔を穿つ。	器受部内面へラ磨き、外面縦方向のヘラ磨き。脚部内面ナデ、外面縦方向のヘラ磨き。外面赤彩。	雲母・バイス 明赤褐色 普通	P22 P L10 90% 床面
3	器台 土師器	A 5.5 B 7.8 D 9.3	脚部一部欠損。脚部はわずかに外反して「ハ」の字状に開き、上位に4孔を穿つ。器受部は低く、外積して立ち上がり、中央に1孔を穿つ。	器受部内面へラ磨き、外面縦方向のヘラ磨き。器受部内面ナデ、外面縦方向のヘラ磨き。	雲母・砂粒・スコリア 鈍い褐色 普通	P23 P L11 95% 床面
4	鉢 土師器	A 11.5 B 6.0	体部から口縁部にかけて一部欠損。丸底。体部はわずかに内彎して立ち上がり、波状の口縁部に至る。	口縁部及び体部内面へラ削り。底部内面ナデ。口縁部から底部外面縦方向へラ削り。	石英・長石・スコリア 風褐色 普通	P17 P L11 85% 覆土中
5	鉢 土師器	A 8.6 B 9.0 C 5.8	平底。体部はわずかに内彎して立ち上がり、口縁部は小さく、外反する。	口縁部内・外面横方向のナデ。体部内面へラ磨き、外面ナデ。底部外面ナデ。二次焼成。	石英・雲母・砂粒 褐色 普通	P18 P L11 100% 外面縦方向観察
6	甌 土師器	A(16.8) B(12.9)	体部から口縁部にかけての破片。体部は内彎して立ち上がり、中位に最大径をもつ。頸部は「く」の字状で、口縁部は外積する。	口縁部内面へラナデ、外面へラ削り後ナデ。体部内面上位へラ磨き、下位ナデ。体部外面へラ削り後ナデ。	雲母・バイス 褐色 普通	P15 P L11 75% 床面
7	甌 土師器	A 15.5 B 15.7 C 6.2	口縁部 一部欠損。底部は平底で中央に径16mmの單孔を持つ。体部は内彎して立ち上がり、最大径を上位に持つ。頸部は「く」の字状で、口縁部は外積する。	口縁部内面へラ磨き、外面へラ削り後ナデ。体部内面上位へラ磨き、下位ナデ。体部外面へラ削り後ナデ。	石英・長石・雲母 褐色 普通	P14 P L11 80% 床面
8	蓋 土師器	B(10.3) C 13.0	底部から体部下位にかけての破片。平底。体部は下位に輪軸状を利用した裝飾的な段を持ち、直線的に外積して立ちあがる。	体部下位内面ナデ、外面縦方向のヘラ磨き。	バイス・スコリア 細顆 褐色 普通	P24 P L11 20% 床面
9	蓋 須恵器	A(12.0) B(4.0)	天井部から口縁部にかけての破片。つまり部欠損。天井部はドーム形に下降し、明瞭な線を経て、底部はわずかに外反する。	天井部外面上位回転へラ削り後ナデ。下位ナデ。天井部内面ナデ。天井部外面には狭いロクロ目が残る。	砂粒 灰褐色 (輪)輪オリブ灰色 普通	P19 P L11 30% 覆土上層 自然輪付着

図版番号	器種	計測値				出土地点	備考	
		長さ(cm)	幅(cm)	高さ(cm)	孔径(cm)			重量(g)
第119区 10	土玉	径 3.5		3.8	0.5	35.5	覆土中	DP5 PL18

図版番号	器種	計測値				石材	出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	高さ(cm)	孔径(cm)			
第119区 11	白玉	径 1.1		0.7	0.2	0.9	滑石床面	Q1
12	白玉	径 1.2		0.3	0.1	0.4	滑石床面	Q2

第3号住居跡(第12・13区)

位置 Ⅲ区中央部, D8j, 区。

規模と平面形 長軸4.98m, 短軸4.61mの方形。

主軸方向 N-51°-E

壁 壁高は56~90cmで, ほぼ垂直に立ち上がる。

壁溝 南東壁下の一部で確認されている。長さ2.4m, 幅12~20cm, 深さ4cmで, 断面形はU字状をしている。

床 平坦であり, 竈前面から中央部付近が特に踏み固められている。

ピット 4か所(P₁~P₄)。P₁~P₄は, 径26~34cmの円形で, 深さ11~68cmであり, 主柱穴と考えられる。

貯蔵穴 竈右側の東コーナー寄りに付設されている。長軸87cm, 短軸56cmの長方形で, 深さは44cmである。覆土は, 3層からなる自然堆積である。

貯蔵穴土層解説

- 1 極暗褐色 ローム中ブロック・ローム粒子・黒色土粒子微量
- 2 暗褐色 焼土小ブロック・ローム粒子微量
- 3 暗褐色 焼土小ブロック・ローム粒子微量

竈 北東壁中央部に, 山砂と粘土で構築されている。規模は, 袖部先端部から振り方までの長さ95cm, 両袖最大幅142cmである。トレンチャーによる攪乱が見られるものの, 天井部は左一部が遺存し, 遺存状態は比較的良好である。袖部は, 床面上に山砂と粘土を貼り付けて構築している。火床部は, 床面の平坦部を使用し赤変硬化している。煙道部が住居跡内にあるものの攪乱により, 煙道の立ち上がりは不明である。

竈土層解説

- 1 褐色 焼土小ブロック・焼土粒子・炭化物・山砂・粘土微量
- 2 にぶい褐色 焼土小ブロック・炭化物・炭化粒子・山砂・粘土少量, 焼土中ブロック・焼土粒子微量
- 3 暗赤褐色 焼土中ブロック・焼土粒子中量, 炭化物・炭化粒子・山砂・粘土微量
- 4 暗褐色 焼土粒子・炭化物・粘土小ブロック・山砂・灰微量

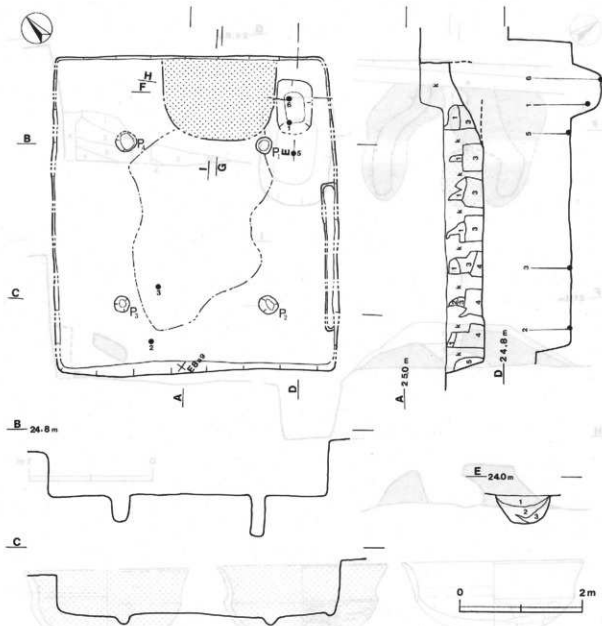
覆土 5層からなる自然堆積である。

土層解説

- 1 黒褐色 ローム小ブロック・ローム粒子微量
- 2 暗赤褐色 焼土中ブロック・焼土粒子少量
- 3 暗褐色 黒色土粒子少量, ローム中ブロック・ローム粒子微量
- 4 褐色 ローム粒子少量, ローム小ブロック・黒色土粒子微量
- 5 褐色 ローム粒子中量, ローム大ブロック少量, 黒色土粒子微量

遺物 土師器片408点, 須恵器片3点, 陶器片1点, 滑石片3点, 鉄片1点が出土している。第13区1の土師器は貯蔵穴の覆土中層から, 2の土師器は南西壁や西よりの床面から, 3の土師器は西部床面から出土している。4の土師器は竈付近の覆土中から, 5の土師器は貯蔵穴付近の床面から, 6の土師器は貯蔵穴の底面から出土している。

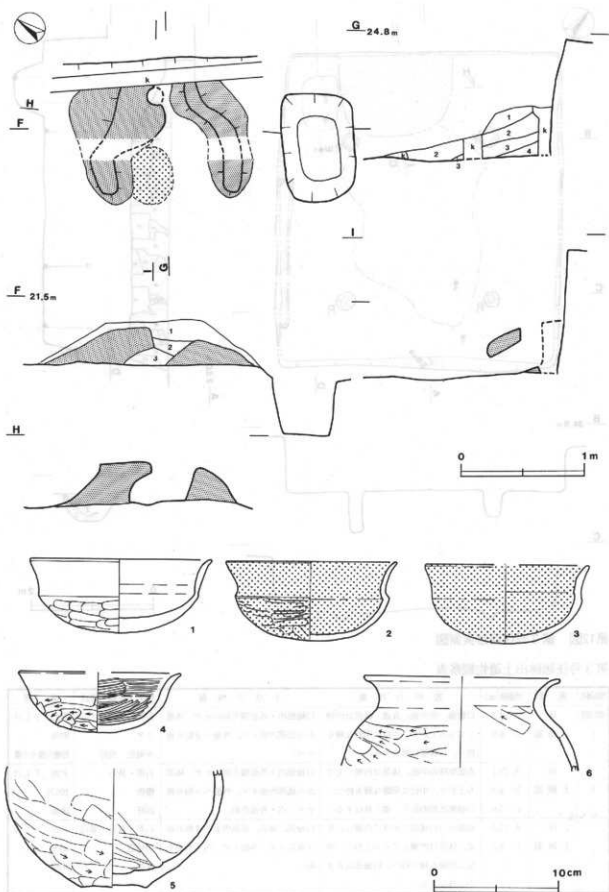
所見 本跡は, 初期竈が付設されていることや, 出土遺物から古墳時代後期(5世紀末)の住居跡と考えられる。



第12図 第3号住居跡実測図

第3号住居跡出土遺物観察表

図録番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	粘土・色調・構成	備考
第13図 1	土師器 環	A 14.3	口縁部一部欠損。丸底。体部は内彎して立ち上がり、中位に明瞭な稜を持つ。口縁部は外反する。	口縁部内・外面横方向のナデ。体部から底部内面ナデ、外面へラ削り後ナデ。	石英・雲母・スコリア	P25 P L11 99% 貯蔵穴覆土中層
		B 6.0			赤褐色 良好	
2	土師器 環	A 13.7	丸底気味の平底。体部は内彎して立ち上がり、中位に明瞭な稜を持つ。	口縁部内・外面横方向のナデ。体部から底部内面ナデ、外面へラ削り後ナデ。内・外面赤彩。	石英・長石	P26 P L12
		B 6.3			褐色	100%
		C 5.0	口縁部比較的長く、強く外反する。		良好	床面
3	土師器 環	A 13.3	底部から口縁部にかけての破片。丸底。体部は内彎して立ち上がり、中位に明瞭な稜を持つ。口縁部はわずかに外反する。	口縁部、体部、底部内面へラ削り後丁寧なナデ、外面ナデ。内・外面赤彩。	石英・長石・雲母	P27 P L12
		B 6.3			明褐色 黄濁	30% 床面



第13图 第3号住居跡竈・出土物実測図

図番	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第3期	坏	A(13.1)	底部から口縁部にかけての破片。丸底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は緩やかに外反する。	口縁部内・外面横方向のナデ。体部から底部内面へう磨き、外面へう磨り後ナデ。	長石・雲母 鈍い褐色 普通	P28 P L12 60% 覆土中
4	土師器	B 4.8				
5	甕	B(9.3)	底部から体部にかけての破片。底部は平底で突出気味。体部は球状に内彎して立ち上がる。	体部から底部内面ナデ、外面へう磨り後ナデ。	長石・雲母 暗褐色 普通	P29 P L12 30% 床面
6	土師器	C 5.2				
7	甕	A(15.7)	体部から口縁部にかけての破片。体部は内彎し、頸部は「コ」の字状で、口縁部は外反する。	口縁部内面ナデ、外面横方向の強いナデ。体部内・外面へう磨り後ナデ。	長石・雲母 鈍い褐色 普通	P30 P L12 15% 貯蔵穴底面 裏面内面灰化付着
8	土師器	B(7.3)				

第4号住居跡(第14~16区)

位置 IV区中央部、D9J区。

規模と平面形 長軸5.91m, 短軸5.46mの方形。

主軸方形 N-45° - E

壁 壁高は65~92cmで、ほぼ垂直に立ち上がる。

壁溝 北西壁下の一部で確認されている。長さ3.92m, 幅14~18cm, 深さ2cmで、断面は緩やかなU字状を呈する。

床 平坦で、竪前面から中央部付近が特に踏み固められて硬化している。

ピット 5か所(P₁~P₅)。P₁~P₄は、径19~28cmの円形で、深さ43~65cmの主柱穴と思われる。P₅は、長径17cm, 短径13cmの楕円形で、深さ59cmの出入口施設に伴うピットと考えられる。

貯蔵穴 竪右側の東コーナー寄りに付設されている。長径116cm, 短径77cmの楕円形で、深さは64cmである。

底面は平坦で、壁はほぼ垂直に立ち上がっている。覆土は、4層からなる自然堆積である。

貯蔵穴土層解説

1 褐色	ローム粒子少量・ローム中ブロック・焼土中ブロック・炭化物微量	3 暗褐色	ローム粒子・焼土粒子・炭化物・黒色土粒子微量
2 暗褐色	ローム粒子・焼土小ブロック・炭化物微量	4 極暗褐色	焼土粒子・炭化物・炭化物少量・ローム焼土大ブロック微量

竪 北東壁中央部から、やや東コーナー寄りに山砂と粘土で構築されている。煙道部は、壁内にあり、ほぼ垂直に立ち上がっている。煙道と壁との間は、ローム土による埋め戻しが行なわれている。規模は、袖部先端部から掘り方までの長さ80cm, 両袖最大幅89cmであり、トレンチャーによる擾乱が激しく遺存状態は悪い。火床部は、床の平坦面を使用しており、赤変硬化が見られる。

竪土層解説

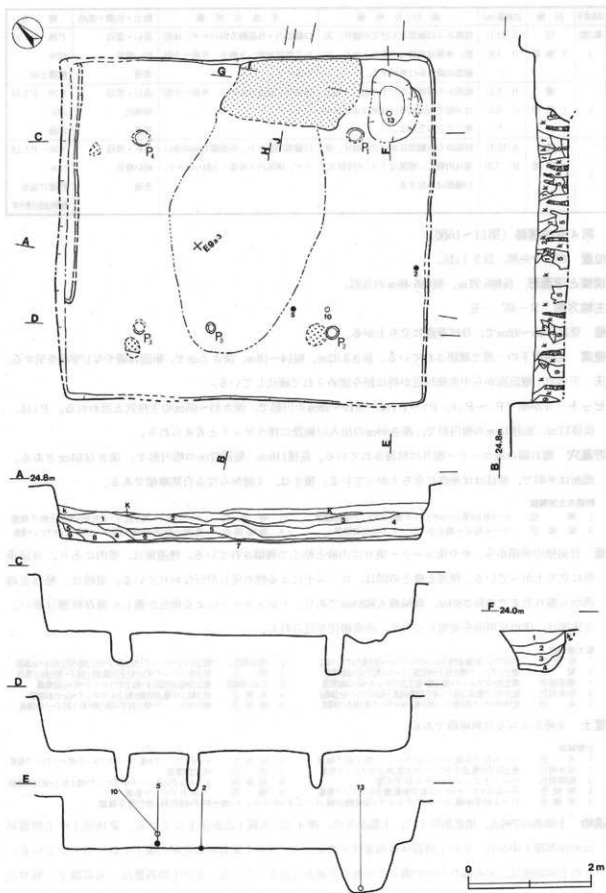
1 暗褐色	焼土中ブロック・炭化物・炭化物少量・ローム中ブロック・焼土中ブロック・炭化物	6 暗赤褐色	焼土中ブロック・焼土粒子・炭化物・炭化物少量・炭化物少量
2 褐色	焼土中ブロック・焼土粒子・炭化物・炭化物少量・炭化物少量	7 褐色	粘土中ブロック・粘土粒子少量・炭化物・炭化物少量
3 暗赤褐色	焼土大・中ブロック・炭化物・炭化物少量・炭化物少量	8 暗褐色	焼土少量・炭化物・炭化物少量・炭化物少量
4 暗赤褐色	炭化物・炭化物少量・炭化物少量・炭化物少量・炭化物少量	9 赤褐色	焼土中量・炭化物・炭化物少量・炭化物少量
5 褐色	焼土中ブロック・炭化物・炭化物少量・炭化物少量・炭化物少量	10 暗褐色	焼土中ブロック・炭化物・炭化物少量・炭化物少量

覆土 9層からなる自然堆積である。

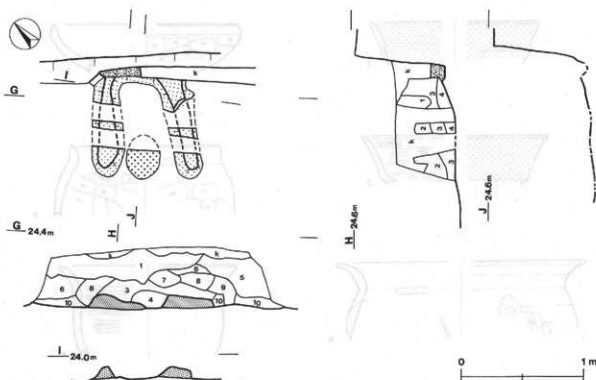
土層解説

1 黒色	ローム粒子少量、ローム小ブロック・焼土粒子微量	6 暗褐色	ローム小ブロック少量、ローム中ブロック・焼土中ブロック微量
2 暗赤褐色	焼土中量、焼土小ブロック少量、焼土中ブロック微量	7 褐色	炭化物微量
3 暗赤褐色	ローム小ブロック・ローム粒子少量	8 暗褐色	ローム粒子少量、ローム小ブロック・焼土粒子・炭化物微量
4 暗褐色	ローム小ブロック・ローム粒子少量、焼土小ブロック微量	9 褐色	ローム中ブロック多量
5 黒褐色	ローム粒子中量、ローム小ブロック・炭化物少量、ローム大・中ブロック・焼土粒子・炭化物・炭化物微量		

遺物 土師器片796点, 須恵器片1点, 土製品5点, 鏝4点, 古銭1点が出土している。第16図1の土師器環は南西部覆土中から、2の土師器環は南東壁下床面から、3の土師器環は北部の覆土中から出土している。5の土師器甕は、中央部からやや南よりの覆土下層から出土している。6の土師器甕は、南部覆土上層や北部覆土中からの破片が接合している。4の土師器碗は、北東部の床面と覆土中から出土したものが接合している。7の土師器甕と8の須恵器環は、北部の床面と覆土中から出土している。9の土師器は南西部覆土中か



第14图 第4号住居跡实测图



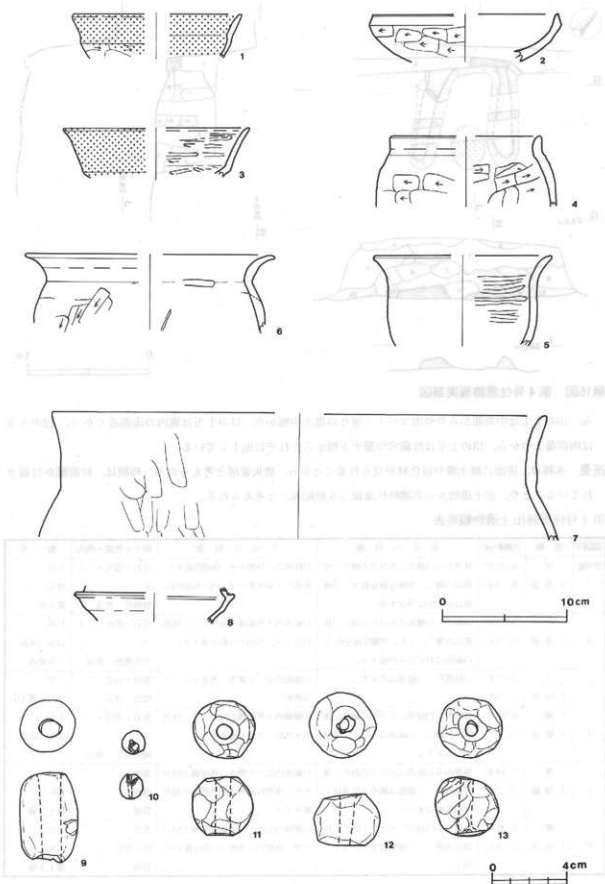
第15図 第4号住居跡竈実測図

ら、10の土玉は中央部からやや南コーナー寄りの覆土中層から、11の土玉は竈内の床面近くから、12の土玉は南部覆土中から、13の土玉は貯蔵穴の覆土下層からそれぞれ出土している。

所見 本跡は、床面に焼土塊や炭化材が見られることから、焼失家屋と考えられる。時期は、初期竈が付設されていることや、出土遺物から古墳時代後期（5世紀末）と考えられる。

第4号住居跡出土遺物観察表

図番	器種	計測値(m)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第15図 1	土師器 環	A (13.5)	体部から口縁部にかけての破片。体部は内彎し、明瞭な稜を経て、口縁部はわずかに外反する。	口縁部内・外面ナデ。体部内面ナデ、外面へう割り後ナデ。内・外面赤彩。	長石・雲母・バミス 暗褐色 普通	P35 10% 覆土中
		B (3.2)				
2	土師器 環	A (16.3)	体部から口縁部にかけての破片。体部は内彎し、上位に明瞭な稜を持つ。口縁部はわずかに内傾する。	口縁部内・外面横方向のナデ。体部内面ナデ、外面へう割り後ナデ。	長石・雲母・バミス 明赤褐色 普通	P36 10% 床面 二次焼成
		B (3.8)				
3	土師器 環	A (15.0)	口縁部片。口縁部は外反する。	口縁部内面へう磨き、外面ナデ。外面赤彩。	雲母・砂粒 橙色 普通	P37 10% 覆土中
		B (3.9)				
4	土師器 椀	A (12.1)	体部から口縁部にかけての破片。体部は内彎し、口縁部は小さく、わずかに外反する。	口縁部内・外面横方向のナデ。体部内・外面へう割り後ナデ。	長石・雲母・バミス 純い藍色 普通	P33 5% 床面
		B (5.7)				
5	土師器 甕	A (14.4)	体部から口縁部にかけての破片。体部は内彎し、頸部は緩やかに外反して口縁部に至る。	口縁部内面へう磨き、外面横方向のナデ。体部内面ナデ、外面へう割り後ナデ。	雲母 橙色 普通	P31 10% 覆土下層
		B (7.0)				
6	土師器 甕	A (39.9)	体部から口縁部にかけての破片。体部は内彎し、口縁部は強く外反して開く。	口縁部内面ナデ、外面強い横方向のナデ。体部内・外面へう割り後ナデ。	雲母・バミス 純い藍色 普通	P32 5% 覆土上層
		B (6.2)				



第16图 第4号住居跡・出土遺物実測図

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色画・焼成	備考
第10図	罎	A(55.5) B(10.0)	口縁部片。口縁部は緩やかに外反する。	口縁部内・外面ナデ。	石灰・長石・雲母 明褐色 普通	P34 10% 床面
8	坏 須恵器	A(12.8) B(2.7)	体部から口縁部にかけての破片。体部は内彎し、受部はわずかに抉れ、口縁部は内傾する。	口縁部及び受部内・外面ナデ。体部内面ナデ、外面回転ヘリ削り。	長石・雲母 灰褐色 普通	P38 5% 覆土中

図版番号	器種	計 測 値					出土地点	備 考
		長さ(cm)	幅(cm)	高さ(cm)	孔径(cm)	重量(g)		
第10図	土 罎	径 3.8		4.9	1.2	29.9	覆 土 中	DP6 P.L18
10	土 玉	径 1.3		1.4	0.2	2.0	覆 土 中 部	DP7 P.L18
11	土 玉	径 3.1		3.2	0.8	28.7	覆 床 面	DP8 P.L18
12	土 玉	径 3.6		2.3	1.0	28.8	覆 土 中	DP9 P.L18
13	土 玉	径 3.3		3.2	0.8	30.2	貯蔵穴覆土下層	DP10 P.L18

第5号住居跡(第17・18図)

位置 Ⅲ区南部, E9h3区。

規模と平面形 長軸5.09m, 短軸4.98mの方形。

主軸方向 N-45°-E

壁 壁高は28~90cmで、ほぼ垂直に立ち上がる。

壁溝 北西壁下・南西壁下で2条確認されている。長さ2.45~3.00m, 幅12~19cm, 深さ4cmで、断面形は緩やかなU字状を呈する。

床 ほぼ平坦で、竈前面から中央部付近が特に踏み固められている。

ピット 7か所(P₁~P₇)。P₁~P₄は、長径20~32cm, 短径19~27cmの円形及び楕円形で、深さ38~65cmの主柱穴と思われる。P₅~P₇は、長径26~33cm, 短径24~30cmの円形及び楕円形で、深さ9~11cmの補助柱穴と考えられる。

貯蔵穴 竈右側東コーナー寄りに付設されている。長軸84cm, 短軸68cmの長方形で、深さは88cmである。断面形はU字状である。覆土は1層からなり、上面は耕作機械による攪乱が激しい。

貯蔵穴土層解説

1 極暗褐色 炭化物少量, ローム粒子・焼土粒子微量

竈 北東壁中央部からやや東コーナー寄りに、山砂と粘土で構築されている。規模は、袖部先端部から掘り方までの長さ89cm, 両袖最大幅97cmであり、トレンチャーの攪乱により遺存状態は悪い。煙道部は、住居内にあり、壁と竈の間にローム土を充填している。また、床面はロームの埋め戻しによって、緩やかな傾斜を作っている。火床部は、床の平坦面を使用しており亦硬化している。

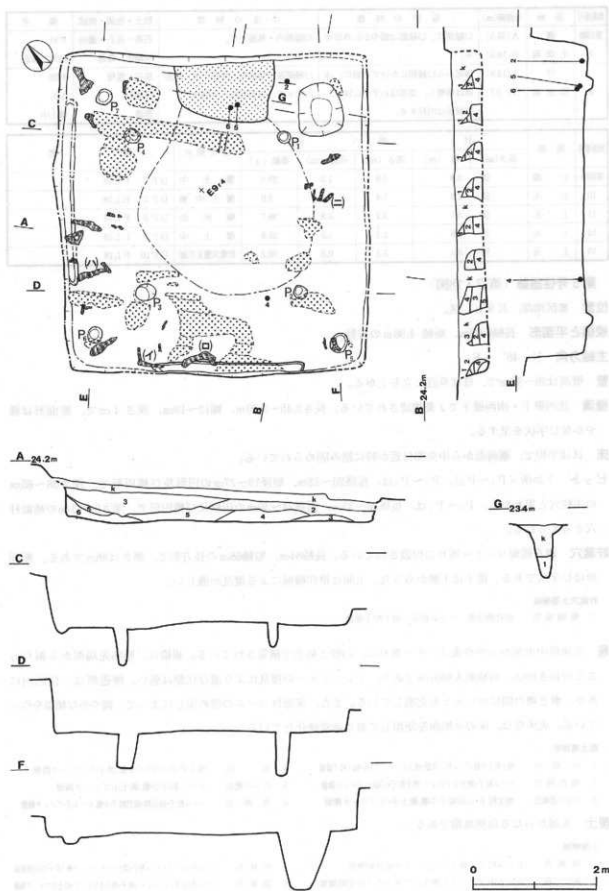
竈土層解説

- | | | | |
|----------|------------------------------------|---------|-------------------------------|
| 1 灰褐色 | 焼土粒子少量, ローム粒子微量, 焼土小ブロック, 灰・粘土粒子微量 | 4 褐色 | 焼土粒子・炭化物少量, 焼土小ブロック微量 |
| 2 暗赤褐色 | ローム粒子・焼土小ブロック, 焼土粒子・山砂小ブロック微量 | 5 におい褐色 | ローム粒子少量, 焼土小ブロック微量 |
| 3 におい赤褐色 | 焼土粒子・山砂粒子中量, 焼土中・小ブロック微量 | 6 黒褐色 | ローム粒子・炭化物・炭化物粒子少量, ローム小ブロック微量 |

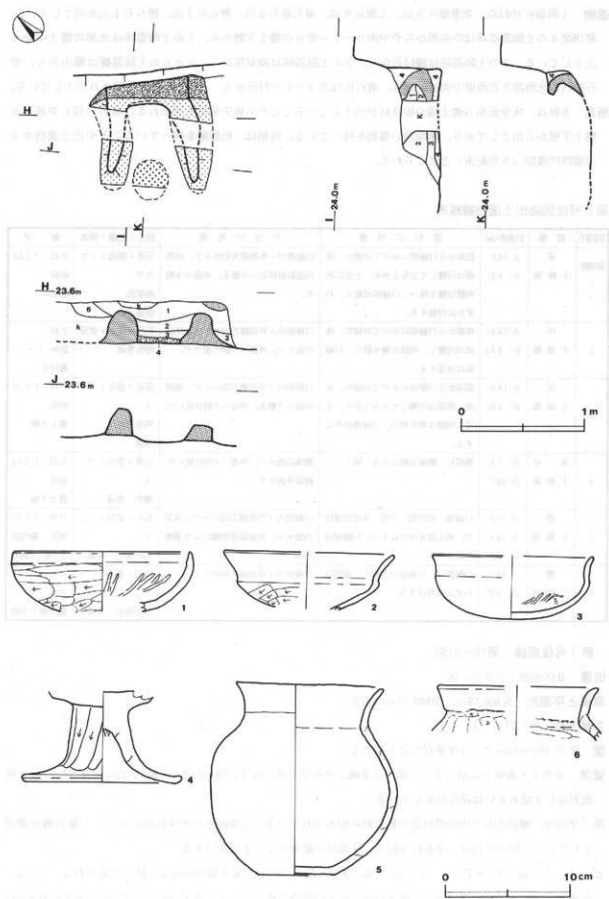
覆土 6層からなる自然堆積である。

土層解説

- | | | | |
|--------|------------------------------------|-------|------------------------------------|
| 1 暗褐色 | ローム粒子・焼土小ブロック・炭化物微量 | 4 暗褐色 | ロームブロック・ローム粒子・焼土中・小ブロック・焼土粒子・炭化物微量 |
| 2 褐色 | ローム中ブロック・焼土小ブロック・炭化物微量 | 5 暗褐色 | ローム中ブロック・ローム粒子・焼土小ブロック・焼土中ブロック微量 |
| 3 極暗褐色 | 焼土粒子少量, ローム中・小ブロック・ローム粒子・焼土小ブロック微量 | 6 黒褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子・炭化物・炭化物・黒土粒子微量 |



第17图 第5号住居跡实测图



第18图 第5号住居跡竈・出土遺物実測図

遺物 土師器片1012点、須恵器片8点、土製品6点、滑石原石2点、滑石片1点、磨り石1点が出土している。

第18図4の土師器高坏は中央部からやや南コーナー寄りの覆土下層から、1の土師器坏は北部の覆土中から出土している。2の土師器坏は甕付近から、3の土師器坏は南東部から、5と6の土師器甕は甕内から、滑石原石は北西部と北西壁中央付近から、滑石片は北コーナー付近から、それぞれ覆土下層より出土している。

所見 本跡は、床全面から焼土塊や炭化材が出土していることから焼失家屋と思われる。滑石の原石や破片が覆土下層から出土しており、興味深い様相を持っている。時期は、初期竈を持っていることや出土物から古墳時代後期（5世紀末）と考えられる。

第5号住居跡出土遺物観察表

図号	器種	計測値(m)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第18図 1	坏	A 14.8	底部から口縁部にかけての破片。体部は内彎して立ち上がり、上位に不明瞭な稜を持つ。口縁部は短く、わずかに内傾する。	口縁部内・外面鏡方向のナデ。体部内面放射状のヘラ磨き。外面へう割り。	石英・雲母・スコリア 赤褐色 普通	P42 P.L12 40%
	土師器	B(4.3)				覆土中
2	坏	A(13.8)	底部から口縁部にかけての破片。体部は内彎し、明瞭な稜を経て、口縁部は外反する。	口縁部内・外面鏡方向のナデ。体部内面ナデ、外面へう割り後ナデ。	石英・長石・雲母 褐色普通	P43 20%
	土師器	B(4.5)				甕付近
3	坏	A(13.0)	底部から口縁部にかけての破片。丸底。体部は内彎して立ち上がり、中に明瞭な稜を持つ。口縁部は外反する。	口縁部内・外面鏡方向のナデ。体部内面へう磨き、外面へう割り後ナデ。	長石・雲母・バリス 明赤褐色 普通	P44 P.L12 30%
	土師器	B(5.0)				覆土下層
4	高坏	B(7.4)	脚部片。脚部は裾が大きく開く。	脚部内面ナデ、外面へう割り後ナデ。裾部外面ナデ。	石英・雲母・バリス 褐色 普通	P40 P.L12 55%
	土師器	D 12.7				覆土下層
5	甕	A 11.9	口縁部一部欠損。平底。体部は球状で、最大径を中位にもつ。口縁部は外反する。	口縁部内・外面鏡方向のナデ。体部内面ナデ、外面器面剝離により調整不明。	長石・雲母・バリス 明赤褐色 普通	P39 P.L12 95%
	土師器	B 15.4				甕内覆
		C 6.0				土下層二次焼成
6	甕	A 13.0	口縁部片。口縁部は外傾し、端部はわずかに外反する。	口縁部内・外面鏡方向のナデ。	長石・雲母・バリス 暗赤褐色 普通	P41 P.L12 10%
	土師器	B(4.3)				甕内覆土下層

第7号住居跡（第19～21図）

位置 II区南部、E9c。区。

規模と平面形 長軸6.58m、短軸6.51mの方形。

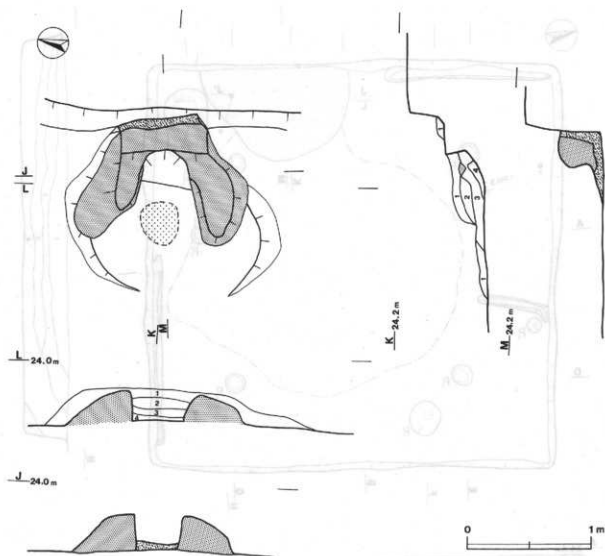
主軸方向 N-75°-E

壁 壁高は62～80cmで、ほぼ垂直に立ち上がる。

壁溝 東壁下と南壁下に沿っての一部で2条確認されている。長さ2.70～3.07m、幅5～22cm、深さ5～7cmで断面形はU字状あるいは逆台形をしている。

床 平坦で、甕前面から中央部付近が特に踏み固められている。北東壁から中央に向かって、1条の溝が確認されている。幅13～16cm、深さ11cm程で、断面形は緩やかなU字状を呈する。

ピット 7か所（P₁～P₇）。P₁～P₄は、径28～38cmの円形、深さ45～55cmで主柱穴と思われる。P₅は、長径54cm、短径50cmの楕円形で、深さ22cmの出入口施設に伴うピットと考えられる。P₇は、径28～30cmの円形で深さ7cmの補助柱穴と考えられる。P₆は、径22cmの円形、深さ9cm程で性格は不明である。



第19図 第7号住居跡電実測図

貯蔵穴 竈右側の東コーナー寄りに付設されている。長径112cm、短径65cmの楕円形で、深さは62cmである。

断面形は、逆台形である。覆土は、3層からなる自然堆積である。

貯蔵穴土層解説

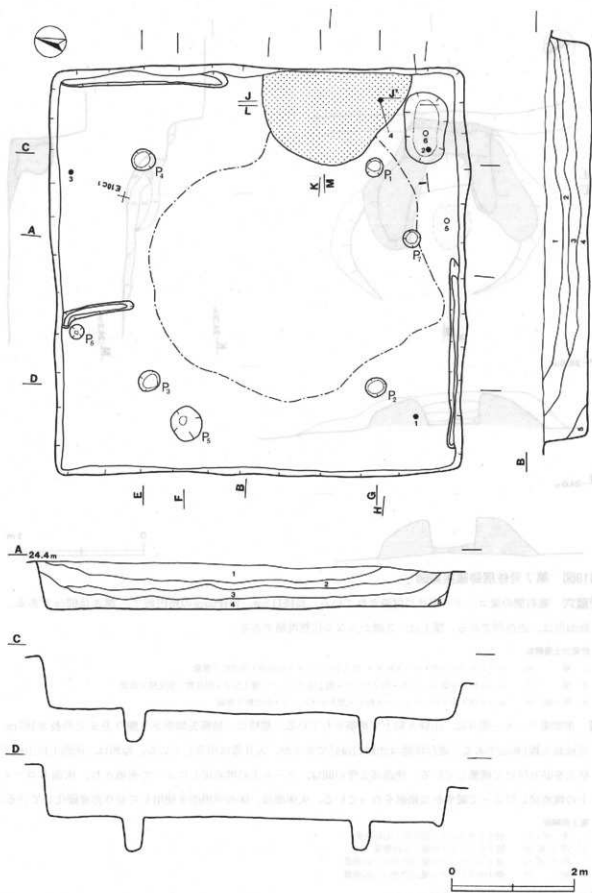
- 1 褐色 ローム小ブロック・ローム粒子・焼土小ブロック・炭化物・炭化粒子微量
- 2 褐色 ローム粒子少量、ローム大・中ブロック・焼土中ブロック・焼土粒子・炭化物・炭化粒子微量
- 3 暗褐色 ローム中・小ブロック・ローム粒子・焼土中ブロック・炭化粒子微量

竈 東壁東コーナー寄りに、山砂と粘土で構築されている。規模は、袖部先端部から掘り方までの長さ107cm、両袖最大幅140cmである。遺存状態は比較的良好であるが、天井部は崩落している。袖部は、床面上に山砂と粘土を貼り付けて構築している。煙道部と壁の間は、ローム土の埋め戻しによって充填され、床面もローム土の埋め戻しによって緩やかな傾斜を作っている。火床部は、床の平坦面を使用しており赤変硬化している。

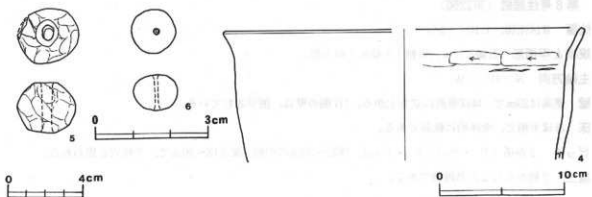
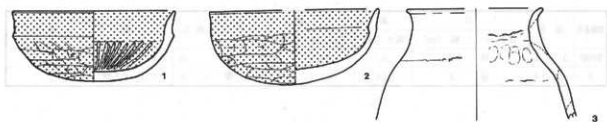
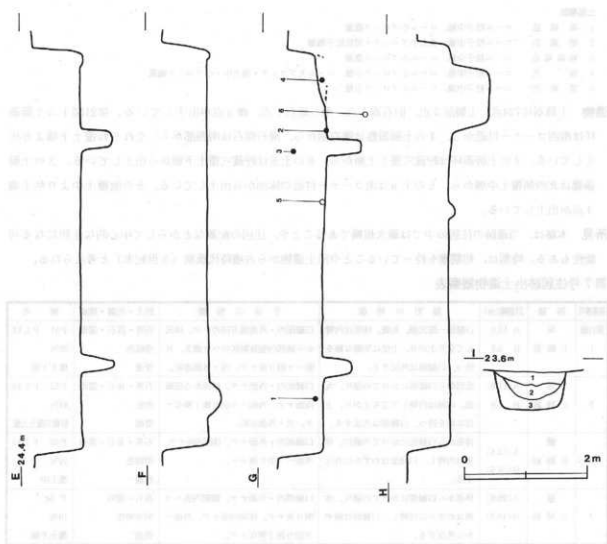
竈土層解説

- 1 赤褐色 焼土小ブロック・炭化物・山砂微量
- 2 暗赤褐色 焼土小ブロック少量、山砂微量
- 3 暗赤褐色 焼土小ブロック中量、炭化物・山砂微量
- 4 褐色 焼土中ブロック少量、炭化物・山砂微量

覆土 5層からなり、自然堆積である。



第20图 第7号住居跡实测图(1)



第21图 第7号住居跡実測图(2), 出土遗物实测图

土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子少量、ローム小ブロック微量
 2 暗褐色 ローム粒子少量、焼土小ブロック・黒色粒子微量
 3 極暗褐色 ローム粒子少量、ローム小ブロック微量
 4 褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック少量、ローム大ブロック・焼土中・小ブロック微量
 5 暗褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック少量

遺物 土師器片724点、土製品2点、旧石器1点、滑石原石1点、礫3点が出土している。第21図1の土師器環は南西コーナー付近から、4の土師器甌は竈右側から、滑石原石は南西部から、それぞれ覆土下層より出土している。2の土師器環は貯蔵穴覆土上層から、6の土玉は貯蔵穴覆土下層から出土している。3の土師器甌は北西部覆土中層から、5の土玉は南コーナー付近の床面から出土している。その他覆土中より粘土塊4点が出土している。

所見 本跡は、当遺跡の住居の中では最大規模であることや、住居の配置などからして中心的な住居になる可能性もある。時期は、初期竈を持っていることや出土遺物から古墳時代後期（5世紀末）と考えられる。

第7号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	粘土・色調・焼成	備考
第21図 1	土師器 環	A 13.0	口縁部一部欠損。丸底。体部は内彎して立ち上がり、上位に明瞭な稜を持つ。口縁部は外反する。	口縁部内・外面横方向のナデ。体部から底部内面放射状のヘラ書き、外面へラ削り後ナデ。内・外面赤彩。	石英・長石・雲母 赤褐色 普通	P51 P.L12 98% 覆土下層
		B 5.6				
2	土師器 環	A(11.0)	底部から口縁部にかけての破片。丸底。体部は内彎して立ち上がり、上位に稜を持つ。口縁部は外反する。	口縁部内・外面ナデ。体部から底部内面ナデ、外面へラ削り後丁寧なナデ。内・外面赤彩。	石英・長石・雲母 赤色 普通	P52 P.L13 46% 貯蔵穴覆土上層
		B 5.9				
3	土師器 甌	A(12.4)	体部から口縁部にかけての破片。体部は内彎し、口縁部はわずかに外反する。	口縁部内・外面ナデ。体部内面ナデ、外面へラ削り後ナデ。	石英・長石・雲母 明褐色 普通	P53 P.L13 10% 覆土中
		B(8.5)				
4	土師器 甌	A(28.0)	体部から口縁部にかけての破片。体部はわずかに内彎し、口縁部は緩やかに外反する。	口縁部内・外面ナデ。頸部内面へラ削り後ナデ。体部内面ナデ、外面へラ削り後丁寧なナデ。	長石・雲母 明赤褐色 普通	P 54 10% 覆土下層
		B(10.3)				

図版番号	器種	計		測			出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	高さ(cm)	孔径(cm)	重量(g)		
第22図	土玉	径	3.2	2.7	0.6	24.7	床面	DP11 P.L18
6	土玉	径	1.2	1.0	0.1	1.5	覆土中	DP12 P.L18

第8号住居跡(第22図)

位置 II区南部、E10f₂区。

規模と平面形 長軸3.72m、短軸〔3.45m〕の方形。

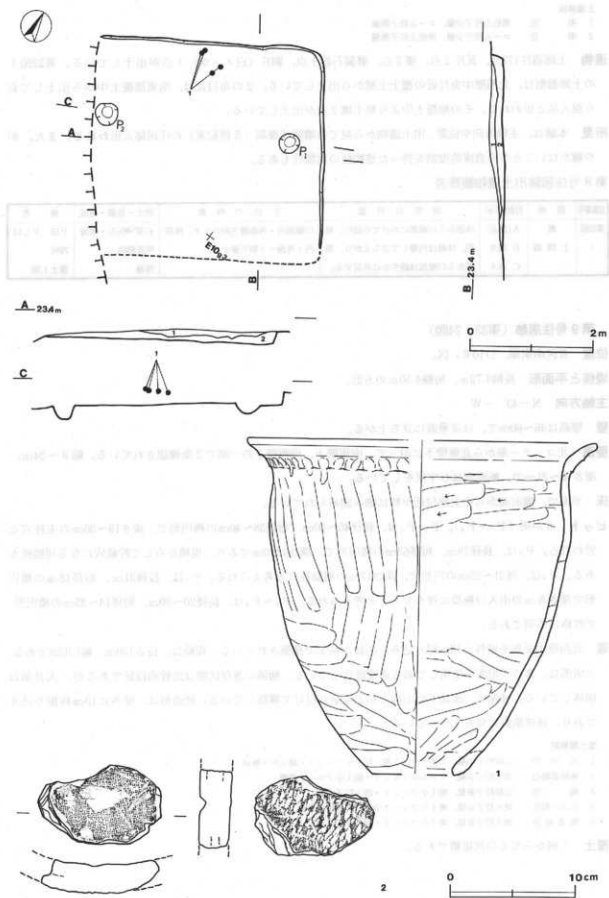
主軸方向 N-31°-W

壁 壁高は23cmで、ほぼ垂直に立ち上がる。(片側の壁は、削平されている。)

床 はほぼ平坦で、全体的に軟弱である。

ピット 2か所(P₁・P₂)。P₁・P₂は、径32~36cmの円形、深さ18~20cmで、主柱穴と思われる。

覆土 2層からなる自然堆積である。



第22图 第8号住居跡・出土遺物実測図

土層解説

- 1 褐色 黒色土粒子少量、ローム粒子微量
 2 褐色 ローム粒子少量、黒色土粒子微量

遺物 土師器片177点、瓦片2点、礫2点、磨製石器1点、銅片(白メノウ)1点が出土している。第22図1の土師器は、北西壁中央付近の覆土上層から出土している。2の布目瓦は、南東部覆土中から出土しており混入品と思われる。その他覆土中より粘土塊2点が出土している。

所見 本跡は、主軸方向や位置、出土遺物から見て古墳時代後期(5世紀末)の住居跡と思われる。また、炉や竈がないことから倉庫的役割を持った建物跡の可能性もある。

第8号住居跡出土遺物観察表

図録番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第22図	瓶	A(28.0)	体部から口縁部にかけての破片。無底。体部は内彎して立ち上がり、頸部からL線形は緩やかに外反する。	口縁部内・外面横方向のナデ。体部内・外面へう割り後ナデ。	石英・炭石・蜜母	P55 P L13
1	土師器	B 26.9 C 6.4			明赤褐色 普通	70% 覆土上層

第9号住居跡(第23・24図)

位置 II区南東部、D10g区。

規模と平面形 長軸4.72m、短軸4.50mの方形。

主軸方向 N-43°-W

壁 壁高は45~60cmで、ほぼ垂直に立ち上がる。

壁溝 北コーナー部から北東壁下に沿って、南東壁下、南西壁下の一部で2条確認されている。幅9~24cm、深さ4~21cmで、断面形はU字状をしている。

床 平坦で、竈前面から中央部付近が特に踏み固められている。

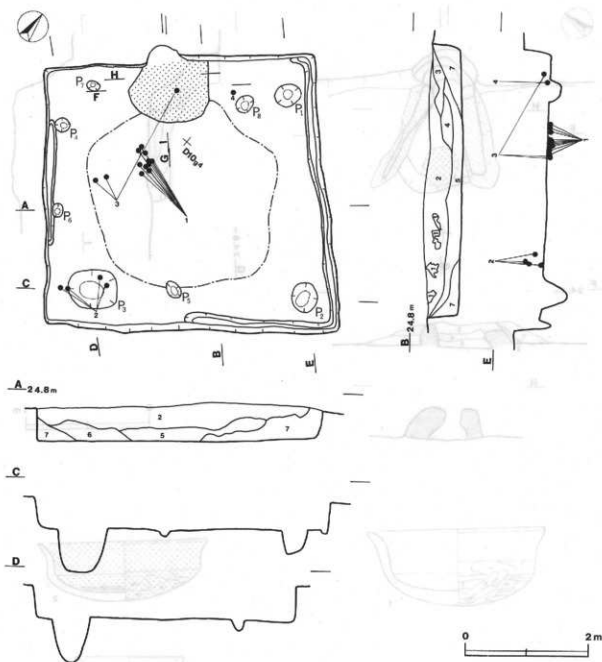
ピット 8か所(P₁~P₈)。P₁・P₂は、長径45~50cm、短径38~40cmの楕円形で、深さ19~36cmの主柱穴と思われる。P₃は、長径79cm、短径63cmの楕円形で、深さは70cmであり、規模からして貯蔵穴になる可能性がある。P₄は、径21~25cmの円形で、深さ17cmの補助柱穴と考えられる。P₅は、長径31cm、短径18cmの楕円形で深さ8cmの出入口施設に伴うピットと考えられる。P₆~P₈は、長径20~30cm、短径14~25cmの楕円形で性格は不明である。

竈 北西壁中央部を壁外に13cm掘り込み、山砂と粘土で構築されている。規模は、長さ120cm、幅1.02cmである。火床部は、床の平面面を使用しており赤変硬化している。袖部の遺存状態は比較的良好であるが、天井部は崩落している。袖部は、床面上に山砂と粘土を貼り付けて構築している。煙道部は、壁外に10cm程掘り込みであり、ほぼ垂直に立ち上がっている。

遺土層解説

- 1 灰赤色 山砂粒子中量、黒色土粒子少量、粘土小ブロック・炭土粒子微量
 2 稀暗赤褐色 埴土粒子少許、ローム中ブロック・埴土小ブロック微量
 3 褐色 山砂粒子多量、埴土小ブロック・炭土粒子少量
 4 にぶい褐色 埴土粒子中量、埴土小ブロック少量、炭化粒子微量
 5 暗赤褐色 埴土粒子多量、埴土小ブロック・炭化粒子微量

覆土 7層からなる自然堆積である。

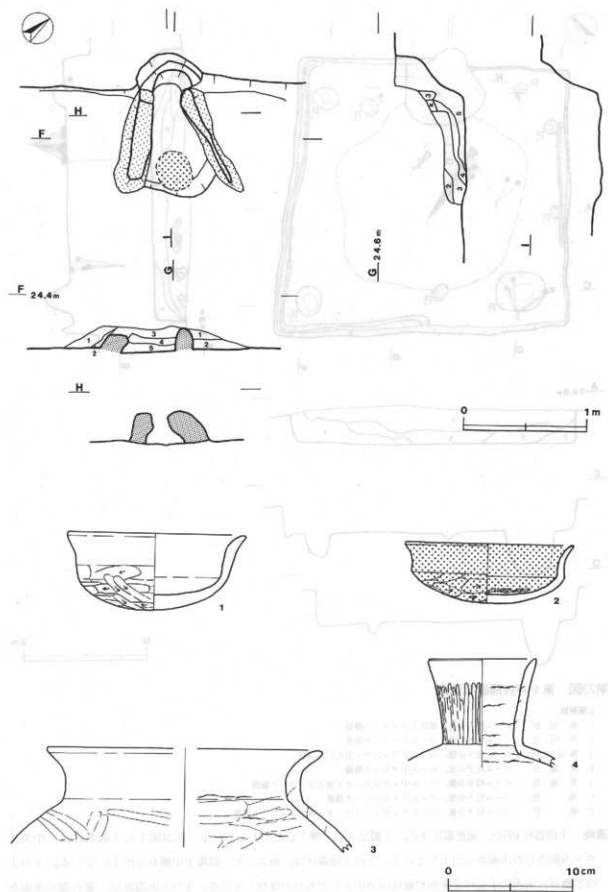


第23図 第9号住居跡実測図

土層解説

- | | |
|--------|--------------------------------|
| 1 暗褐色 | ローム粒子少量、黒色土小ブロック微量 |
| 2 黒褐色 | ローム粒子中量、ローム小ブロック微量 |
| 3 極暗褐色 | ローム粒子少量、ローム小ブロック・炭化粒子微量 |
| 4 黒褐色 | ローム粒子少量、ローム小ブロック微量 |
| 5 黒褐色 | ローム粒子少量、ローム中・小ブロック・焼土小ブロック微量 |
| 6 褐色 | ローム粒子少量、ローム中・小ブロック微量 |
| 7 褐色 | ローム粒子少量、ローム大・中・小ブロック・焼土小ブロック微量 |

遺物 土師器片435点、須恵器片4点、土製品3点、礎7点が出土している。第24図1の土師器環は、中央部やや西側寄りの床面から出土している。2の土師器環は、南コーナー部覆土中層から出土している。3の土師器甕は、南西壁中央付近床面や礎底面から出土したものが接合している。4の土師器壺は、礎右側の床面から出土している。その他覆土中より粘土塊4点が出土している。



第24图 第9号住居跡竈・出土遺物実測図

所見 本跡は、床面を築いた後に竈が構築されており、床の平坦面を火床部している。竈は、壁を掘り込み煙道が少し外に出ているため初期竈の中では新しい方ものと考えられる。時期は、竈の構築状況と出土遺物から古墳時代後期（6世紀初頭）と考えられる。

第9号住居跡出土遺物観察表

図録番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第2図 1	土師器 環	A 14.2	底部から口縁部にかけての破片。丸底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は外反する。	口縁部内・外面横方向のナデ。体部から底部内面ナデ、外面へ削り後丁寧なナデ。	長石・雲母 褐色 普通	P56 P L13 90% 床面
		B 6.2				
2	土師器 環	A 13.5	底部から口縁部にかけての破片。丸底。体部は内彎して立ち上がり、下位に明瞭な稜をもつ。口縁部は比較較的長く、外反して開く。	口縁部内・外面横方向のナデ。体部から底部内面へう磨き、外面へ削り後ナデ。内・外面赤彩。	長石・雲母 暗赤褐色 普通	P58 P L13 80% 覆土小層
		B 4.8				
3	土師器 壺	A (22.0)	体部から口縁部にかけての破片。体部は内彎し、頸部は「コ」の字状で、口縁部は外反して開く。	口縁部内・外面横方向のナデ。体部内・外面ナデ。	石英・長石・雲母 細砂 褐色 普通	P59 P L13 20% 床面及び竈底面
		B (8.2)				
4	土師器 壺	A 8.7	体部から口縁部にかけての破片。体部は内彎し、頸部は「L」の字状で、口縁部は外反する。	口縁部内面ナデ、外面横方向のへら磨き。体部内・外面ナデ。	雲母 黄褐色 普通	P57 P L13 30% 床面
		B (7.6)				

第12号住居跡 (第25図)

位置 IV区中央部, E 8 i, 区。

規模と平面形 長軸4.32m, 短軸4.28mの方形。

主軸方向 N-65° -W

壁 壁高は30~44cmで、ほぼ垂直に立ち上がる。

床 平坦で、全体的に軟弱である。

炉 中央から北西寄りに位置し、長径45cm, 短径36cmの楕円形で、4cm程掘り窪めた地床炉である。炉床部は、わずかに赤変硬化している程度である。

土層解説

- 1 暗赤褐色 焼土小ブロック・焼土粒子少量
- 2 暗赤褐色 焼土粒子中量, 黄土中・小ブロック微量

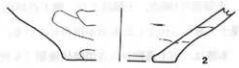
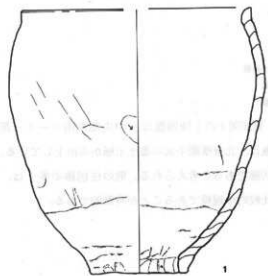
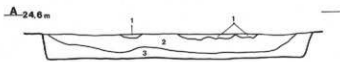
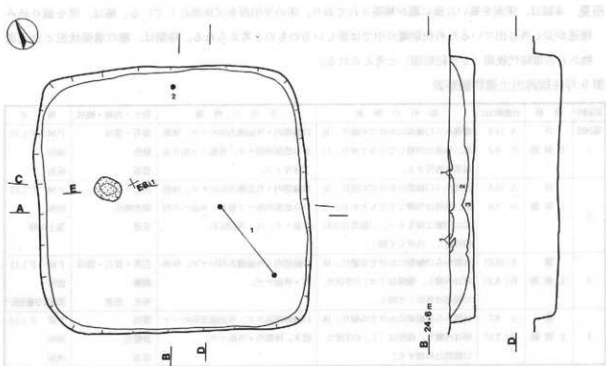
覆土 3層からなる人為堆積である。

土層解説

- 1 褐色 ローム粒子少量, ローム小ブロック・炭化物・黒色土粒子微量
- 2 黒褐色 黒色土粒子中量, ローム中・小ブロック・ローム粒子微量
- 3 暗褐色 ローム粒子少量, ローム中・小ブロック・黒色土粒子微量

遺物 土師器片166点, 土製品1点, 礫1点が出土している。第25図1の土師器瓶は、中央部や南コーナー部の覆土上層から出土したものが接合している。2の土師器瓶は、北東壁際中央の覆土上層から出土している。

所見 本跡は、出土遺物から古墳時代後期（5世紀末）の住居跡であると考えられる。他の住居跡の多くは、この時期竈を持っているのに対し、本跡は、地床炉であり比較的小規模であることが特徴的である。



第25図 第12号住居跡・出土遺物実測図

第12号住居跡出土遺物観察表

図録番号	器種	計測値(㎝)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色面・焼成	備考
第25図 1	土師器	A 18.3	底部から口縁部にかけての破片。無底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部に至る。	口縁部内・外面横方向のナデ。体部内面ナデ、外面へう削り後ナデ。体部外面下端指頭圧痕跡。	石灰・長石・雲母 純い橙黄色 普通	P66 P.L14 45% 覆土上層
		B 21.2				
		C 7.6				
2	土師器	B(4.2)	底部から体部にかけての破片。平底。体部は外傾して立ち上がる。突出気味の底部中央に単孔。	体部内面ナデ、外面へう削り後ナデ。	雲母 純い黄褐色 普通	P88 10% 覆土上層
		C 9.0				

第13号住居跡(第26~28図)

位置 IV区中央部, F 8 a₁ 区。

規模と平面形 長軸6.44m, 短軸6.38mの方形。

主軸方向 N-30°-W

壁 壁高は70~80cmで、ほぼ垂直に立ち上がる。

壁溝 北西壁の一部と南コーナー部の一部を除いて確認されている。幅6~26cm, 深さ2~10cmで、断面形はU字状を呈する。

床 平坦で、竈前面から中央部付近が特に踏み固められている。南西壁中央部寄り2条(a・b), 南東壁中央部からやや東コーナー寄り1条(c), 北東壁寄り2条(d・e)の溝が確認されている。それぞれ、中央に向かって延びている。長さ70~105cm, 幅7~25cm, 深さ4~13cmで、断面形はU字状あるいはV字状をしている。

ピット 12か所(P₁~P₁₂)。P₁~P₇は、径28~36cmの円形で、深さ32~56cmの支柱穴と思われる。P₈~P₁₁は、長径30~32cm, 短径20~30cmの円形あるいは楕円形で、深さは5~16cmであり、位置から見て、出入口施設に伴うピットと考えられる。P₁₂は長径32cm, 短径26cmの楕円形で、深さは38cmであり、位置関係から間仕切り溝にかかわるピットと考えられる。P₁₂は、径24cmの円形、深さ11cm程で性格は不明である。

貯蔵穴 竈1付近の南コーナー寄りに付設されている。長径130cm, 短径92cmの楕円形で、深さは95cmである。断面形は逆台形である。覆土は、3層からなる自然堆積である。

貯蔵穴土層解説

- | | | | |
|-------|---------------------|------|--------------------------|
| 1 暗褐色 | ローム小ブロック少量 | 3 褐色 | ローム中ブロック・ローム粒子・焼土小ブロック微量 |
| 2 暗褐色 | ローム小ブロック少量, ローム粒子微量 | | |

竈 南西壁と北西壁の2か所で確認されている。竈1は、南西壁中央部より南コーナー寄りの部分を壁外に27cmほど掘り込み、山砂と粘土で構築されていた痕跡が認められる。煙道部は、外傾して立ち上がっている。

竈2は、北西壁中央を壁外に約25cmほど掘り込み、山砂と粘土で構築されている。規模は、長さ130cm, 幅96cmである。遺存状態は、比較的良好であるが天井部は崩落している。火床部は、床の平坦面を使用している。煙道部は壁を少し掘り込み、外傾して立ち上がっている。新旧関係は、竈1の袖部、天井部が取り除かれていることや、竈の付設位置、構造から見て竈1から竈2に作り替えが行なわれたものと考えられる。

竈1土層解説

- | | | | |
|--------|--------------------------------|------|--------------------------------|
| 1 暗赤褐色 | ローム粒子・焼土小ブロック・焼土粒子・灰・山砂・焼土粒子微量 | 2 褐色 | 焼土粒子少量・ローム中ブロック・焼土小ブロック・焼土粒子微量 |
|--------|--------------------------------|------|--------------------------------|

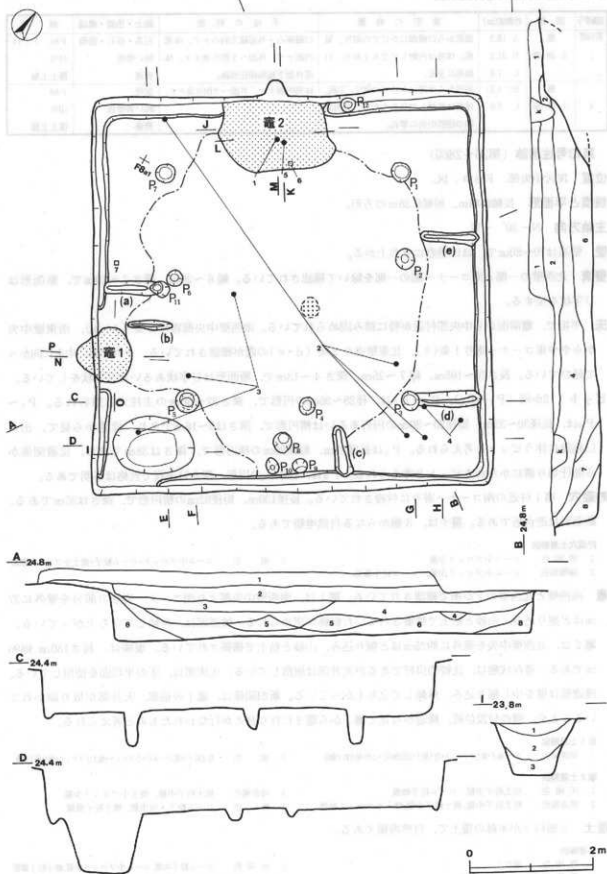
竈2土層解説

- | | | | |
|--------|---------------------------|--------|-------------------|
| 1 灰褐色 | 焼土粒子少量, ローム粒子微量 | 3 暗赤褐色 | 焼土粒子中量, 焼土小ブロック少量 |
| 2 暗赤褐色 | 焼土粒子中量, 焼土粒子少量, 焼土小ブロック微量 | 4 褐色 | ローム粒子・灰少量, 焼土粒子微量 |

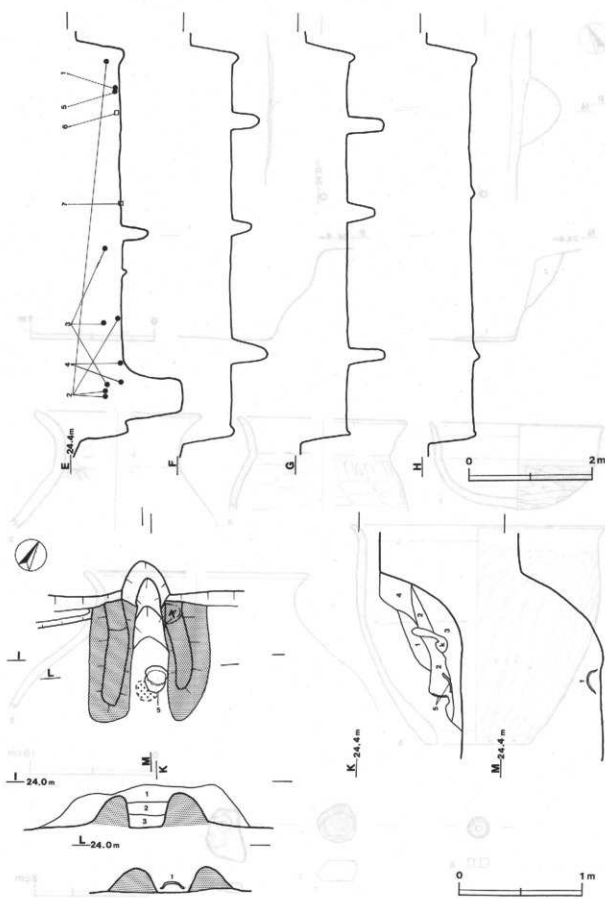
覆土 2層以下が本跡の覆土で、自然堆積である。

土層解説

- | | | | |
|-------|---|-------|-----------------------------|
| 1 黒褐色 | 耕作土 | 5 暗褐色 | ローム粒子中量, ローム小ブロック少量, 焼土粒子微量 |
| 2 黒褐色 | ローム粒子微量 | 6 灰褐色 | ローム粒子・焼土粒子少量, 焼土小ブロック微量 |
| 3 褐色 | ローム粒子中量, ローム小ブロック少量, 焼土粒子微量 | 7 暗褐色 | ローム粒子少量, ローム小ブロック微量 |
| 4 暗褐色 | ローム粒子中量, ローム小ブロック少量, ローム中ブロック・焼土小ブロック微量 | 8 褐色 | 焼土粒子・灰土粒子・ローム粒子少量 |

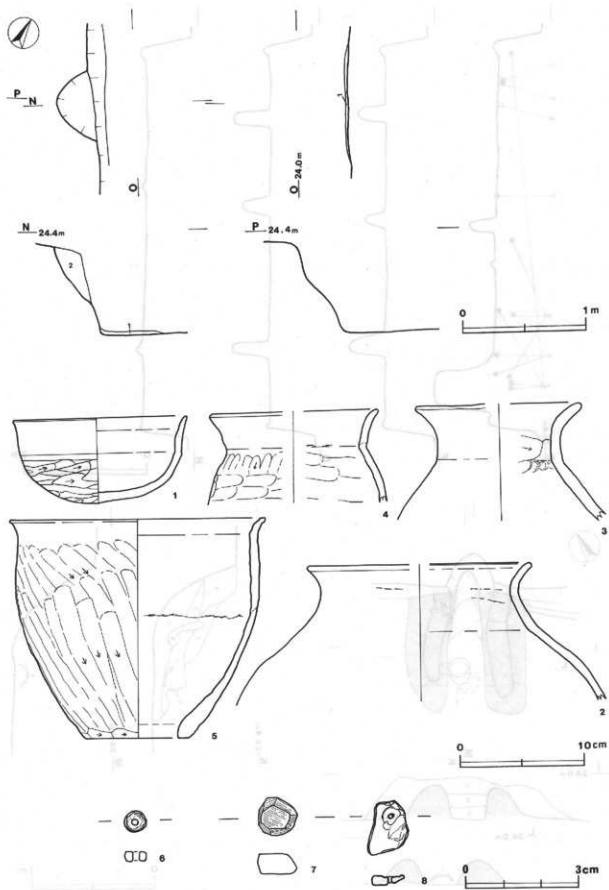


第26图 第13号住居跡实测图(1)



第27图 第13号住居跡实测图(2) 竈2实测图

图13号住居跡出土品・1 竈形跡(2) 1/100 0005, 100



第28图 第13号住居跡竈1・出土遺物実測図

图28 第13号住居跡竈1・出土遺物実測図

遺物 土師器片1,380点, 須恵器片2点, 土製品10点, 石製品3点, 滑石片2点, 礫13点が出土している。第28図5の土師器甕は, 正位の状態で甕内下層から出土している。1の土師器環は甕火床部付近で, 5の土師器甕の下から逆位で出土している。2の土師器甕は, 東コーナー部や西コーナー部の覆土中層および下層から出土したものが接合している。3の土師器甕は, 中央部や南コーナー部の覆土中層から出土したものが接合している。4の土師器甕は, 東コーナー付近の床面から出土したものが接合している。6の円玉は甕付近の覆土下層から, 7の円玉は南西壁中央床面から, 8の滑石製の勾玉は南西部覆土中から出土している。粘土塊13点が覆土中から出土している。

所見 本跡の時期は, 初期竈を持つていることや出土遺物から古墳時代後期(6世紀初頭)と考えられる。また, 当遺跡の中でも最大級であることや, 住居の配置などから中心的な住居跡と思われるが, 出土遺物や甕の付設場所から見て, 第7号住居跡よりは後出と思われる。

第13号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第28図 1	土師器 環	A 13.9	口縁部及び底部一部欠損。平底気味の丸底。体部は内彎して立ち上がり, 中位に明瞭な稜を持つ。口縁部は外反する。	口縁部内・外面横方向のナデ。体部内面ナデ, 外面へう割り後ナデ。	長石・雲母 赤色 普通	P68 P L14 98% 甕火床部 二次焼成
		B 7.2				
2	土師器 甕	A (18.0)	体部から口縁部にかけての破片。体部は内彎し, 頸部から口縁部は緩やかに外反する。	口縁部内・外面横方向のナデ。体部内面ナデ, 外面へう割り後ナデ。	長石・雲母 鈍い黄褐色 普通	P69 P L14 15% 覆土下層
		B (11.4)				
3	土師器 甕	A 13.4	体部から口縁部にかけての破片。体部は内彎し, 頸部から口縁部は緩やかに外反する。	口縁部内・外面横方向のナデ。頸部内面へう割り。体部内面ナデ, 外面へう割り後ナデ。	石英・長石・雲母 鈍い褐色 普通	P70 P L14 20% 覆土中層
		B (9.1)				
4	土師器 甕	A 13.6	体部から口縁部にかけての破片。体部は内彎し, 頸部から口縁部は緩やかに外反する。	口縁部内・外面横方向のナデ。体部内面ナデ, 外面へう割り後ナデ。	石英・長石・雲母 褐色 普通	P71 P L14 20% 床面
		B 7.4				
5	土師器 甕	A 20.4	口縁部一部欠損。無底。体部はわずかに内彎して立ち上がる。口縁部は小さく, 外反する。	口縁部内・外面横方向のナデ。体部内面ナデ, 外面へう割り後ナデ。	長石・ベニミス 褐色 普通	P67 P L15 95% 甕内下層
		B 17.7				
		C 8.3				

図版番号	器種	計 測 値					石 材	出土地点	備 考
		長さ(cm)	幅(cm)	高さ(cm)	孔径(cm)	重量(g)			
第28図	白 玉	径 0.6		0.4	0.2	0.1	滑 石	覆 土 下 層	Q 9
7	白 玉	径 1.1		0.6	—	0.7	滑 石	床 面	Q 8
8	勾 玉	径 2.2		0.5	0.1	4.4	滑 石	覆 土 中	Q10

第14号住居跡(第29図)

位置 IV区東部, E9j区。

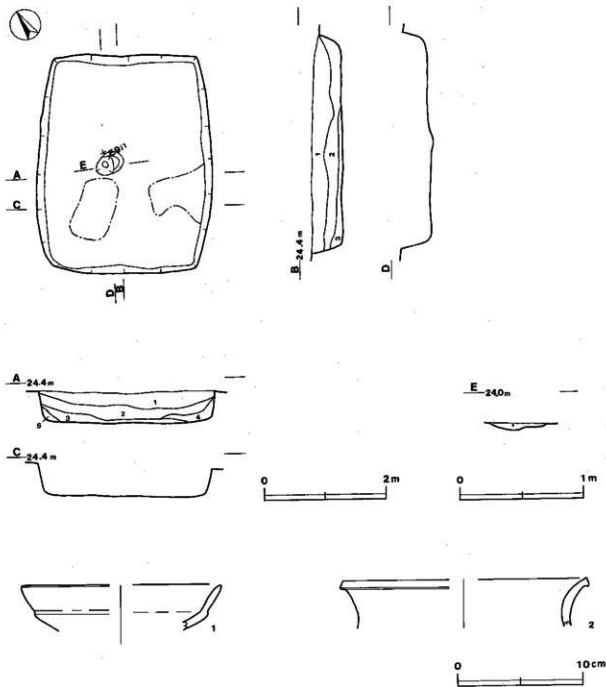
規模と平面形 長軸3.50m, 短軸2.77mの長方形。

主軸方向 N-70°-W

壁 壁高は35~45cmで, ほぼ垂直に立ち上がる。

床 平坦で, 炉付近から南西壁よりの一部分と南東壁中央部からやや南コーナー寄りの一部分が踏み固められている。

炉 中央部から北西寄りに位置し, 長径46cm, 短径33cmの楕円形で, 5cm程掘り込んだ地床炉である。炉床部は, やや赤変硬化している。



第29図 第14号住居跡・出土遺物実測図

伊土層解説

1 暗赤褐色 焼土粒子中量, 焼土小ブロック少量

覆土 5層からなる自然堆積である。

土層解説

- | | | |
|---|-----|---------------------------------------|
| 1 | 暗褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子・炭化物・黒色土粒子微量 |
| 2 | 褐色 | ローム中・小ブロック・ローム粒子・炭化物・黒色土粒子微量 |
| 3 | 褐色 | ローム粒子少量, ローム中ブロック・焼土小ブロック・焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 4 | 褐色 | ローム粒子少量, ローム中ブロック・炭化物・黒色土粒子微量 |
| 5 | 褐色 | ローム粒子少量, 黒色土粒子微量 |

遺物 土師器片239点、須恵器片1点が出土している。第29図1の土師器環と2の甕は覆土上層から出土している。南東部覆土下層からは、土師器甕片が出土している。

所見 本跡は、出土遺物から古墳時代後期（5世紀末）の住居跡であると考えられる。炉床部の赤変硬化が弱いことから、住居の使用期間は短かかったと思われる。また、第12号住居跡と同様、竈が付設されていないことや小規模であることが、特徴的である。

第14号住居跡出土遺物観察表

図録番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	粘土・色調・焼成	備考
第29図 1	土師器 環	A(16.0)	体部から口縁部にかけての破片。体部は内彎し、明瞭な稜を凝て、口縁部は外傾する。	口縁部内・外面横方向のナデ。体部内面ナデ、外面へラ削り後ナデ。	パミス 橙色 普通	P72
		B(3.5)				覆土上層
2	土師器 甕	A(20.0)	口縁破片。口縁部は外反する。	口縁部内・外面ナデ。	灰石・雲母 鈍い黄褐色 普通	P73
		B(3.5)				覆土上層

第15号住居跡（第30～32図）

位置 IV区の東部、E8j、区。

規模と平面形 長軸4.43m、短軸4.40mの方形。

主軸方向 N-108° -W

壁 壁高は62～85cmで、ほぼ垂直に立ち上がる。

壁溝 南西壁下と北東コーナー下で確認されている。幅17～23cm、深さ5cmで、断面形はU字状を呈する。

床 ほぼ平坦で、竈前面から中央部付近が特に踏み固められ硬化している。

ピット 6か所（P₁～P₆）。P₁～P₄は、長径20～37cm、短径16～25cmの円形あるいは楕円形で、深さ30～42cmで主柱穴と思われる。P₅・P₆は、径15～20cmの円形で、深さ3～8cmの出入口施設に伴うピットと思われる。

貯蔵穴 竈右側の南コーナー寄りに付設されている。長径93cm、短径55cmの楕円形で、深さは60cmである。断面形は逆台形である。

貯蔵穴土層解説

1 灰褐色	炭化物少量、ローム粒子・焼土粒子微量	3 暗赤褐色	ローム小ブロック少量、焼土小ブロック・焼土粒子微量
2 極暗赤褐色	焼土粒子少量、焼土小ブロック・ローム粒子微量	4 褐色	ローム小ブロック・ローム粒子少量、焼土粒子微量

竈 南西壁中央部からやや南コーナー寄りの部分を壁外に8cm掘り込み、山砂と粘土で構築されている。規模は、長さ107cm、幅95cmである。天井部は崩落しているが、遺存状態は比較的良好である。袖部は、床面上に山砂と粘土で構築されている。煙道部は、壁際に沿ってほぼ垂直に立ち上がっている。また、煙道部の掘り方の一部を壁外に若干掘り込み、その部分に山砂と粘土を貼り込み、熱に対する補強が施されている。火床部は、床の平面面を使用している。

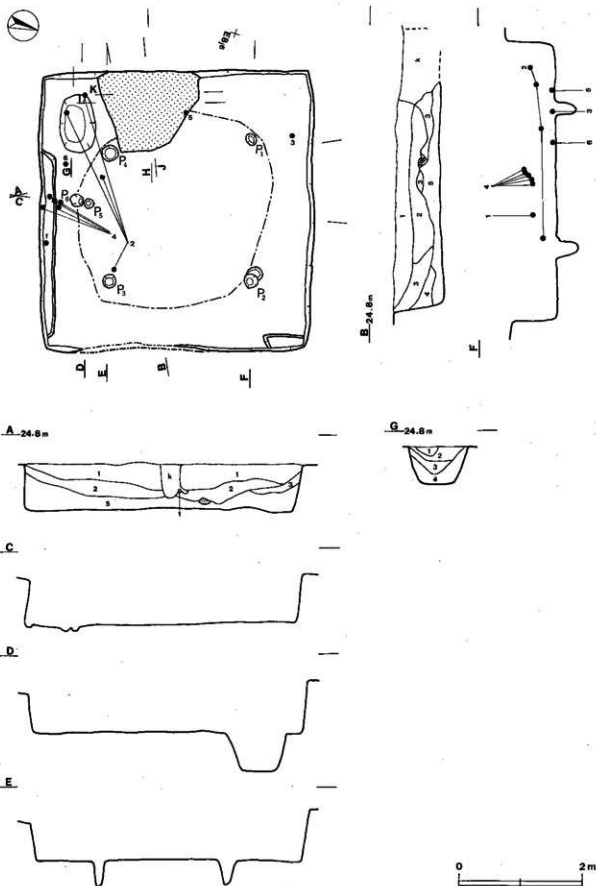
竈土層解説

1 灰赤色	ローム粒・炭化物少量、ローム小ブロック・焼土粒子微量	6 におい褐色	粘土粒子多量、焼土粒子少量
2 暗赤褐色	ローム小ブロック少量、ローム粒子・焼土粒子・粘土粒子微量	7 におい褐色	ローム粒子中量、焼土小ブロック・粘土粒子微量
3 赤褐色	焼土粒子少量、ローム小ブロック・ローム粒子微量	8 暗褐色	ローム粒子・炭化物少量、ローム小ブロック・炭化粒子・山砂粒子微量
4 極暗褐色	焼土粒子・ローム粒子微量	9 極暗褐色	ローム小ブロック・ローム粒子少量、焼土小ブロック・粘土粒子微量
5 赤褐色	焼土粒子中量、炭化物・焼土小ブロック・粘土粒子微量		

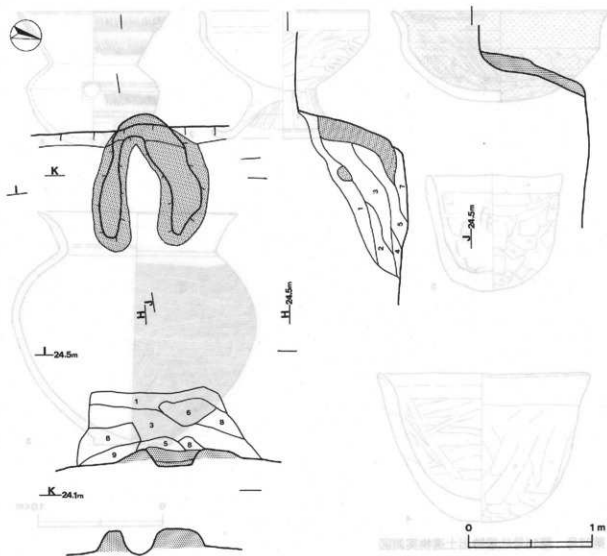
覆土 ロームブロック含有が多いことやブロック状の堆積をしていることから、人為堆積と思われる。

土層解説

1 黒褐色	ローム粒子微量	3 暗褐色	ローム小ブロック少量、ローム粒子・焼土粒子微量
2 暗褐色	ローム粒子中量、ローム小ブロック少量、黒色土小ブロック微量	4 褐色	灰粒少量、ローム小ブロック・ローム粒子微量
		5 暗褐色	ローム小ブロック少量、ローム小ブロック微量



第30图 第15号住居跡実測图



第31図 第15号住居跡電実測図

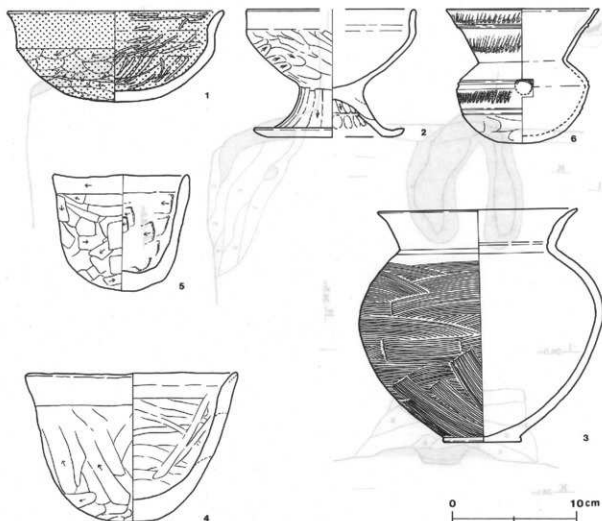
古墳時代後期(5世紀末)

遺物 土師器片828点、須恵器片2点、土製品3点、礫5点が出土している。第32図1の土師器杯と4の土師器鉢は南東壁中央付近の覆土中層から、2の土師器高杯は南部寄りの覆土中層から、3の土師器甕は西コーナー部床面から出土している。5の土師器鉢は竈付近の床面から、6の須恵器甕は貯蔵穴付近の覆土下層から出土している。その他覆土中より粘土塊9点が出土している。

所見 本跡は、初期竈を持っていることや出土遺物から、古墳時代後期(5世紀末)の住居跡であると考えられる。床面直上には、炭化材や焼土塊が見られることから焼失家屋と思われる。

第15号住居跡出土遺物観察表

図録番号	器種	計測値(m)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第32図	杯	A 17.3	底部から口縁部にかけての破片。丸底。	口縁部内面へラ磨き、外面ナデ。体部から底部内面へラ磨き、外面へラ削り後ナデ。内・外面赤影。	雲母・細礫	P78 P L14
1	土師器	B 7.3	体部は内彎して立ち上がり、上位に明瞭な縁を持つ。口縁部は外反する。		純い橙色 普通	65% 覆土中層



第32号 第15号住居跡出土遺物実測図

第15号住居跡出土遺物観察表

図表番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第32号 2	高杯 土師器	A 13.5	脚部から杯部にかけての破片。脚部は裾が大きく開く。杯部は外傾して立ち上がり、上位に明確な稜を持つ。口縁部はわずかに外反する。	口縁部内・外面横方向のナデ。体部内面ナデ、外面へラ削り後ナデ。脚部内面指頭によるナデ、外面へラ削り後ナデ。	長石・雲母 棕色 普通	P79 P.L14 65% 埋土中層
		B 10.2				
		D 12.0				
3	甗 土師器	A 16.0	口縁部一部欠損。突出気味の平底。体部はわずかに内彎して立ち上がり、最大径を上位に持つ。口縁部は外反して開く。	口縁部内・外面横方向のナデ。体部内面ナデ。体部外面には比較的濃の深いハケ目が密に施されている。	スコリア・砂粒 褐色 普通	P75 P.L15 80% 床面
		B 14.0				
		C 5.2				
4	鉢 土師器	A 16.7	体部から口縁部にかけて一部欠損。丸底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は外反する。	口縁部内・外面横方向のナデ。体部から底部内面ナデ、外面へラ削り後ナデ。	長石・雲母 褐色 普通	P74 P.L15 70% 埋土中層
		B 12.2				
5	鉢 土師器	A 9.9	体部から口縁部にかけて一部欠損。体部は内彎して立ち上がり、口縁部に至る。体部と口縁部の境に弱い稜を持つ。	口縁部内・外面横方向のナデ。体部内面へラナデ、外面へラ削り。	長石・雲母・スコリア 鈍い黄色 普通	P77 P.L15 75% 二次焼成 床面
		B 9.3				
6	甗 須恵器	A 12.2	口縁部及び頸部周辺一部欠損。丸底。体部は内彎して立ち上がる。頸部は長く、「く」の字状で、口縁部は外傾する。頸部の状端と下端に明確な稜をもつ。	口縁部及び頸部外面に磨き状工具による波状文、体部外面に同じものによる刺突文が施されている。底部外外面へラ削り後ナデ。	長石・砂粒 暗緑灰色 (釉)灰オリーブ色 良好	P76 P.L15 95% 部分的に釉付 着 埋土下層
		B 10.7				

第16号住居跡 (第33・34図)

位置 IV区中央部, F8c₃区。

規模と平面形 長軸4.90m, 短軸4.80mの方形。

主軸方向 N-110°-W

壁 壁高は52~60cmで, ほぼ垂直に立ち上がる。

壁溝 北コーナーから西コーナーを通り, 北西壁の一部と南東壁中央部寄りの壁下で確認されている。幅11~15cm, 深さ4~7cmで, 断面形はU字形をしている。

床 平坦で, 竈前面から中央部付近が特に踏み固められている。

ピット 5か所(P₁~P₅)。P₁~P₄は, 長径21~25cm, 短径15~24cmの円形あるいは楕円形で, 深さ14~40cmの主柱穴になると思われる。P₅は, 長径27cm, 短径22cmの楕円形で, 深さ14cmの出入口施設に伴うピットと思われる。

炉 中央部に位置し, 長径48cm, 短径37cmの楕円形で, 床面を5cmほど皿状に掘り込んだ地床炉である。炉床部は赤変している程度である。

伊土層解説

1 におい赤褐色 焼土粒子少量, 焼土小ブロック微量

竈 南西壁中央部からやや南コーナー寄りに, 山砂と粘土で構築されている。規模は, 袖部先端部から掘り方までの長さ98cm, 両袖最大幅99cmである。天井部は, 崩落しているが遺存状態は比較的良好である。袖部は床面上に山砂と粘土を貼り付けて構築している。煙道部は, 住居内にあり壁に沿ってほぼ垂直に立ち上がっている。火床部は, 床の平坦面を使用し赤変硬化している。

甕土層解説

1 暗褐色 ローム小ブロック少量, 焼土粒子・粘土粒子微量 3 灰赤色 粘土粒子・焼土粒子少量, 焼土小ブロック微量
2 灰赤色 粘土粒子中量, 焼土粒子少量

貯蔵穴 竈付近の南コーナー寄りに付設されている。長径105cm, 短径74cmの楕円形で深さは40cmである。断面形は, 逆台形である。

貯蔵穴土層解説

1 褐色 ローム中ブロック・ローム粒子・炭化物・炭化灰粒子微量 3 褐色 ローム粒子少量
2 暗褐色 焼土粒子炭化材少量, 焼土大中小ブロック・炭化物・炭化灰粒子微量

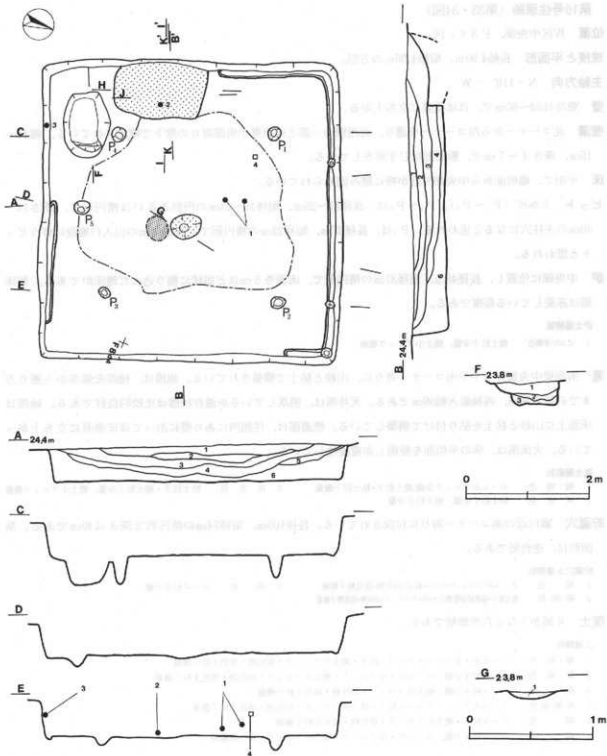
覆土 6層からなる自然堆積である。

土層解説

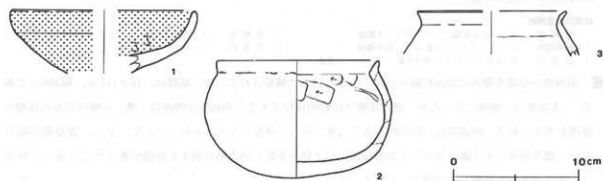
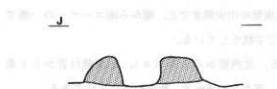
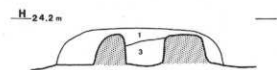
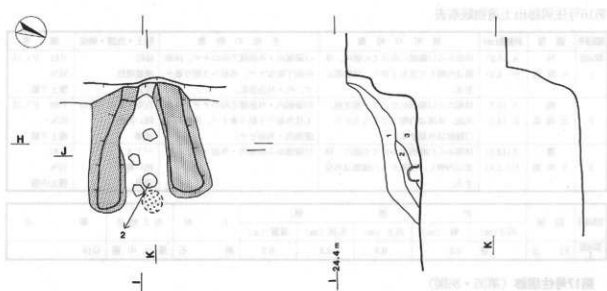
1 暗褐色 ローム中・小ブロック・ローム粒子・焼土小ブロック・炭化物・黒色土粒子微量
2 暗褐色 ローム粒子少量, ローム中・小ブロック・焼土小ブロック・炭化物・黒色土粒子微量
3 褐色 ローム粒子少量, 焼土小ブロック・炭化物・黒色土粒子微量
4 極暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子・焼土小ブロック・炭化物・黒色土粒子微量
5 褐色 ローム粒子・焼土小ブロック・炭化物・黒色土粒子微量
6 褐色 ローム粒子少量, ローム中・小ブロック・焼土小ブロック・炭化物微量

遺物 土師器片1108点, 須臾器片13点, 土製品8点, 石製品1点, 礫2点, 粘土塊3点, 滑石片18点等が出土している。第34図1の土師器坏は中央部付近下層から, 竈の火床部からは, 2の碗が火床面からやや浮いた状態で逆位で出土している。3の土師器甕は南コーナー貯蔵穴付近の中層から, 4の土玉は中央部からやや北西壁寄りの覆土中層から, 5の滑石製白玉は北西部覆土中層から出土している。粘土塊3点は覆土中から出土している。

所見 本跡は, 初期竈を持っていることや, 出土遺物から古墳時代後期(5世紀末)の住居跡であると考えられる。床面直上には, 炭化材や焼土塊が見られることから焼失家屋と思われる。



第33图 第16号住居跡实测图



第34図 第16号住居跡・出土遺物実測図

第16号住居跡出土遺物観察表

図録番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	粘土・色調・焼成	備考
第34図 1	坏 土師器	A(18.2) B(5.2)	体部から口縁部にかけての破片。体部は内彎して立ち上がり、口縁部に至る。	口縁部内・外面横方向のナデ。体部内面丁寧なナデ、外面ヘラ削り後ナデ。内・外面赤彩。	砂粒 浅黄褐色 普通	P81 P L15 55% 覆土下層
2	碗 土師器	A 13.1 B 14.5	体部から口縁部にかけて一部欠損。丸底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は外傾する。	口縁部内・外面横方向のナデ。体部上位外面ヘラ削り後ナデ。体部から底部内・外面ナデ。	石英・長石・雲母 鈍い褐色 普通	P80 P L15 96% 覆土下層
3	壺 土師器	A(12.0) B(3.4)	体部から口縁部にかけての破片。体部は内彎し、頸部から口縁部は外反する。	口縁部から体部内・外面ナデ。	バイス 鈍い褐色 普通	P82 10% 覆土中層

図録番号	器種	計 測 値					石 材	出土地点	備 考
		長さ(cm)	幅 (cm)	高さ (cm)	孔径 (cm)	重量 (g)			
第35図 4	白 玉	径 0.5		0.3	0.2	0.2	滑 石	覆土中層	Q15

第17号住居跡 (第35・36図)

位置 IV区北部, E 8 f, 区。

規模と平面形 長軸5.94m, 短軸5.48mの方形。

主軸方向 N-132° -W

壁 壁高は50~70cmで、ほぼ垂直に立ち上がる。

壁溝 南西壁の中央から西コーナー・北コーナーを通り、北東壁の中央部までと、竈から南コーナーの一部で確認されている。幅8~16cm, 深さ5~8cmで、断面形はU字状をしている。

床 平坦で、竈前面から中央部にかけて踏み固められている。北西壁から1条(a), 北東壁付近から1条(b), 中央部に向かって溝が確認されている。幅10~14cm, 深さ5~16cmで、断面形はU字状である。

ピット 5か所(P₁~P₅)。P₁~P₄は、長径25~33cm, 短径24~30cmの円形あるいは楕円形で、深さ54~84cmの支柱穴になると思われる。P₅は、径20~22cmの円形で、深さ11cmの出入口施設に伴うピットと思われる。

貯蔵穴 竈付近の南コーナー寄りに付設されている。長径120cm, 短径75cmの楕円形で、深さは83cmである。

断面形はU字状である。

貯蔵穴土層解説

- | | | | |
|-------|-----------------------------|-------|----------------------|
| 1 暗褐色 | ローム粒子少量,ローム大ブロック微量 | 4 黒褐色 | ローム粒子少量,ローム大・小ブロック微量 |
| 2 暗褐色 | ローム小ブロック少量,ローム粒子微量 | 5 黒褐色 | ローム小ブロック少量 |
| 3 暗褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子少量,ローム中ブロック微量 | | |

竈 南西壁中央部を壁外に22cm程掘り込み、山砂と粘土で構築されている。規模は、長さ111cm, 幅108cmである。天井部は、崩落しているが、遺存状態は比較的良好である。両袖部の内面は、激しく焼けており長期の使用が考えられる。煙道部は、住居内にあり、壁に沿って外傾して立ち上がっている。また、煙道部の掘り方の一部を壁外に若干掘り込み、その部分に山砂と粘土を貼り込み熱に対する補強が施されている。火床部は、床の平坦面を使用し赤変硬化している。

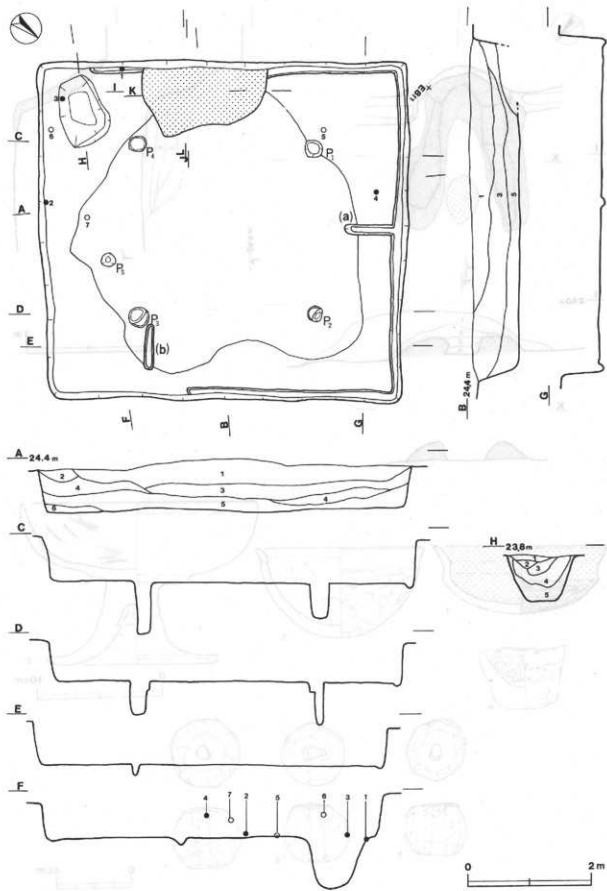
竈土層解説

- | | |
|--------|--|
| 1 暗赤褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子・焼土中・小ブロック・焼上粒子・炭化粒子・粘土粒子・山砂粒子・灰粒子微量 |
| 2 暗赤褐色 | 粘土粒子少量,ローム中・小ブロック・ローム粒子・炭化物・焼土中・小ブロック・焼土粒子・山砂・灰微量 |
| 3 暗赤褐色 | 焼土小ブロック・炭化粒子・粘土粒子少量,ローム粒子・焼土小ブロック・焼土粒子・炭化物・山砂・灰微量 |
| 4 暗赤褐色 | 焼土粒子少量,ローム中ブロック・ローム粒子・焼土小ブロック・炭化粒子・粘土粒子・山砂粒子・灰微量 |

覆土 6層からなる自然堆積である。

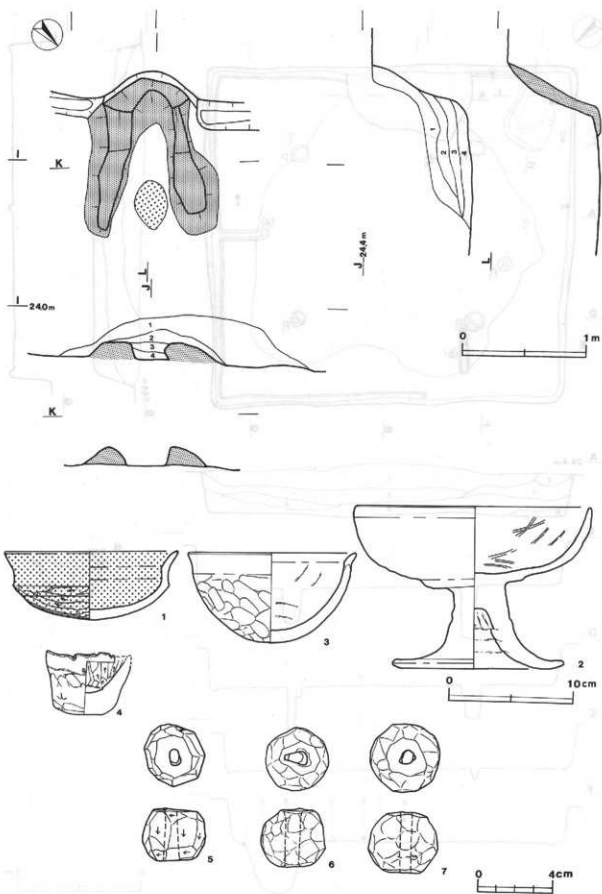
土層解説

- | | | | |
|--------|-------------------------|-------|---------------------------|
| 1 黒 色 | ローム粒子微量 | 4 黒褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子微量 |
| 2 暗赤褐色 | 焼土粒子中量,ローム粒子微量 | 5 黒褐色 | ローム粒子中量,ローム小ブロック少量,焼土粒子微量 |
| 3 暗褐色 | ローム粒子少量,ローム小ブロック・焼土粒子微量 | 6 褐色 | ローム中ブロック・ローム粒子中量,粘土粒子少量 |



第35图 第17号住居跡実測图

実地測量中心・新石器時代研究 図35



第36図 第17号住居跡・出土遺物実測図

遺物 土師器片1,032点, 須恵器片4点, 土製品6点, 滑石片12点, 礫8点が出土している。第36図1の土師器環は竈左側の床面から, 3の土師器鉢は貯蔵穴付近の覆上下層から, 2の土師器高環は南東壁中央際の覆土下層から出土している。4の手捏土器は, 北西部中央付近の覆土中層から, 5の上玉は西コーナー付近の床面から, 6の上玉は貯蔵穴付近の覆土中層から, 7の上玉は南東壁中央付近の覆土中層からそれぞれ出土している。粘土塊3点が覆土中より出土している。

所見 本跡は, 初期竈を持っていることや出土遺物から, 古墳時代後期(5世紀末)の住居跡であると考えられる。

第17号住居跡出土遺物観察表

図録番号	器種	計測値(m)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第36図 1	土師器 環	A 13.8	体部から口縁部にかけて一部欠損。丸底。体部は内湾して立ち上がり, 中位に明瞭な稜を持つ。口縁部は外反する。	口縁部内・外面横方向のナデ。体部から底部内面ナデ, 外面へラ削り後丁寧なナデ。内・外面赤彩。	雲母 赤褐色 普通	P83 P L16 70% 床面
		B 5.5				
2	土師器 高環	A 19.0	脚部及び口縁部一部欠損。脚部は比較的低く, 裾が広がる。体部は内湾して立ち上がり, 口縁部に至る。	口縁部内・外面横方向のナデ。体部から底部内面ナデ, 外面へラ削り後ナデ。脚部内面ナデ, 外面へラ削り後ナデ。	雲母 浅黄褐色 普通	P84 P L16 95% 覆土下層
		B 13.0				
		D 13.8				
3	土師器 鉢	A 13.6	底部から口縁部にかけての破片。丸底。体部は内湾して立ち上がり, 口縁部は小さく外反する。	口縁部内・外面横方向のナデ。体部から底部内面へラナデ, 外面へラ削り後ナデ。	雲母 浅黄褐色 普通	P85 P L16 90% 覆土下層
		B 7.2				
4	手捏土器 土師器	A 6.8	口縁部一部欠損。平底。体部は外湾して立ち上がる。口縁部は波状である。	口縁部から底部内・外面ナデ。体部外面上位に指頭圧痕	雲母 鈍い褐色 普通	P86 P L16 95% 覆土中層
		B 5.0				
		C 4.5				

図録番号	器種	計 測 値					出土地点	備 考
		長さ(cm)	幅 (cm)	高さ (cm)	孔径 (cm)	重量 (g)		
第36図	土 玉	径 3.2		3.0	0.7	33.7	床 面	DP13 P L18
6	土 玉	径 3.4		3.2	0.8	33.0	覆 土 中 層	DP32 P L18
7	土 玉	径 3.7		3.3	0.9	40.4	覆 土 中 層	DP33 P L18

第18号住居跡 (第37図)

位置 IV区の中央部, E8c1区。

規模と平面形 長軸4.50m, 短軸4.01mの長方形。

主軸方向 N-49°-E

壁 壁高は35~40cmで, ほぼ外傾して立ち上がる。

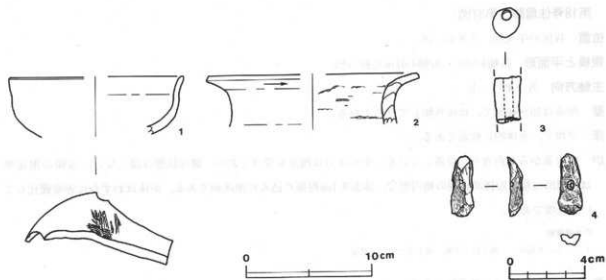
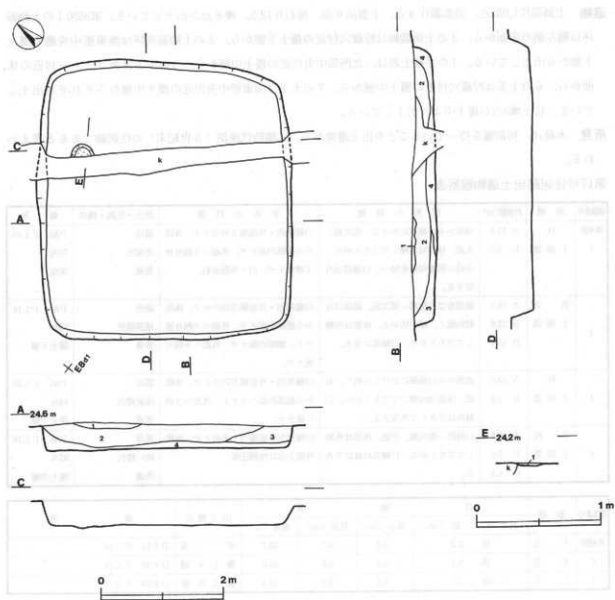
床 平坦で, 全体的に軟弱である。

炉 中央部から北西寄りに位置している。炉の半分は攪乱を受けており, 遺存状態は良くない。規模の推定値は長径35cm程, 短径30cm程の楕円形で, 床面を1cm程掘り込んだ地床炉である。如床はわずかに赤変酸化している程度である。

炉土層解説

1 ぶい赤褐色 築土粒子少量, 焼土小ブロック散見

覆土 4層からなる自然堆積である。



第37图 第18号住居跡炉・出土遺物実測図

土層解説

- 1 極暗褐色 ローム粒子少量
- 2 黒色 ローム粒子微量
- 3 暗褐色 ローム粒子少量、ローム小ブロック散量
- 4 褐色 ローム粒子中量、ローム中・小ブロック散量

遺物 土師器片194点、須恵器片1点、土製品4点、石製品1点が出土している。第37図1の土師器環と2の土師器甕は覆土上層から、3の不明土製品は北部の床面から、4の滑石製の未成品は南部覆土中から出土している。

所見 本跡は、出土遺物から古墳時代後期（5世紀末）の住居跡であると考えられる。

第18号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	粘土・色調・焼成	備考
第37図 1	土師器 環	A(14.0)	体部から口縁部にかけての破片。体部は内彎し、不明瞭な稜を経て、口縁部は外反する。	口縁部内・外両方向のナデ。体部内面割離、外面へう割り後ナデ。	雲母・バミス 鈍い赤褐色 普通	P89 P L16 20% 覆土上層 底部外面磁石混用
		B(4.8)				
2	甕 土師器	A(16.8)	口縁部片。口縁部は外反する。	口縁部内・外両ナデ。	石英・灰石・雲母 灰褐色 普通	P87 5% 覆土上層
		B(4.5)				

図版番号	器種	計 測 値					石 材	備 考
		長さ(cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	孔径 (cm)	重量 (g)		
第37図	不明土製品	径 1.6		2.5	0.5	5.9	床 面	D P14 P L18

図版番号	器種	計 測 値					石 材	出土地点	備 考
		長さ(cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	孔径 (cm)	重量 (g)			
第37図	不明未成品	3.2	1.3	0.6	—	3.1	滑 石	覆 土 中	Q11

第19号住居跡（第38～40図）

位置 IV区中央部、F8e₁区。

規模と平面形 長軸4.30m、短軸4.00mの方形。

主軸方向 N-112°-W

壁 壁高は58～72cmで、ほぼ垂直に立ち上がる。

壁溝 各コーナー部と南西壁の南側部を除いた部分で確認されている。幅9～22cm、深さ3～5cmで、断面形はU字状をしている。

床 平坦で、竈前面から中央部付近が特に踏み固められている。北東壁付近からP₂に達する溝が1条確認されている。幅11～13cm、深さ7cmで、断面形はV字状である。

ピット 5か所（P₁～P₅）。P₁～P₄は、長径26～35cm、短径22～34cmの円形あるいは楕円形で、深さ55～72cmの主柱穴になると思われる。P₅は、長径23cm、短径20cmの楕円形で、深さ21cmの出入口施設に伴うピットと思われる。

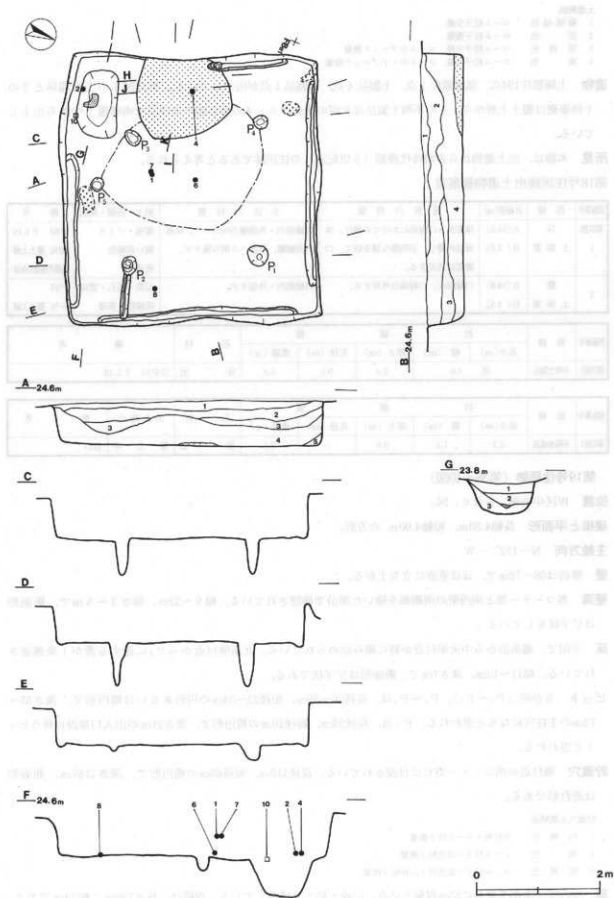
貯蔵穴 竈付近の南コーナー寄りに付設されている。長径110cm、短径63cmの楕円形で、深さは57cm、断面形は逆台形である。

貯蔵穴土層解説

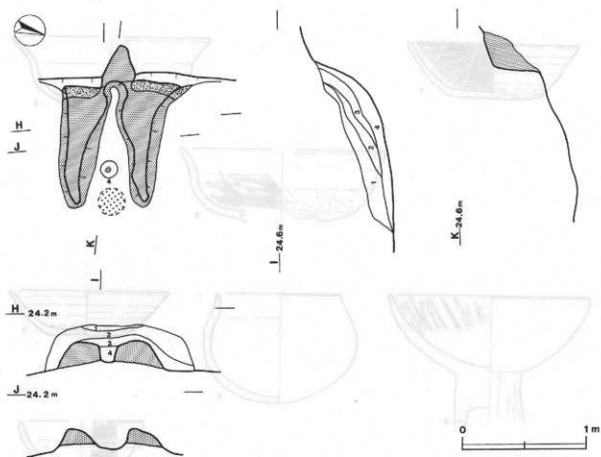
- 1 暗褐色 炭化物・ローム粒子微量
- 2 褐色 ローム粒子・炭化粒子微量
- 3 暗褐色 ローム粒子・炭化材・山砂粒子微量

竈 南西壁中央部を壁外に23cm程掘り込み、山砂と粘土で構築している。規模は、長さ130cm、幅79cmである。

天井部は、崩落しているが遺存状態は比較的良好である。袖部は、ロームの削り残しを基部とし、その上に



第38图 第19号住居跡实测图



第39図 第19号住居跡竈実測図

山砂と粘土で構築している。壁と煙道の間は、ローム土で埋め戻しされている。煙道部は、外傾して、立ち上がっている。また、煙道部の掘り方の一部を壁外に若干掘り込み、その部分に山砂と粘土を貼り込み熱に対する補強が施されている。火床部は、床の平坦面を使用し赤変硬化している。

覆土層解説

- 1 灰 褐色 粘土粒子少量、焼土小ブロック・焼土粒子・ローム小ブロック微量
- 2 灰 赤色 粘土粒子少量、焼土小ブロック・焼土粒子・ローム粒子微量
- 3 灰 褐色 ローム粒子微量、焼土小ブロック・粘土粒
- 4 赤 褐色 焼土粒子中量、焼土小ブロック・粘土粒子少量、炭化物・炭化粒子微量

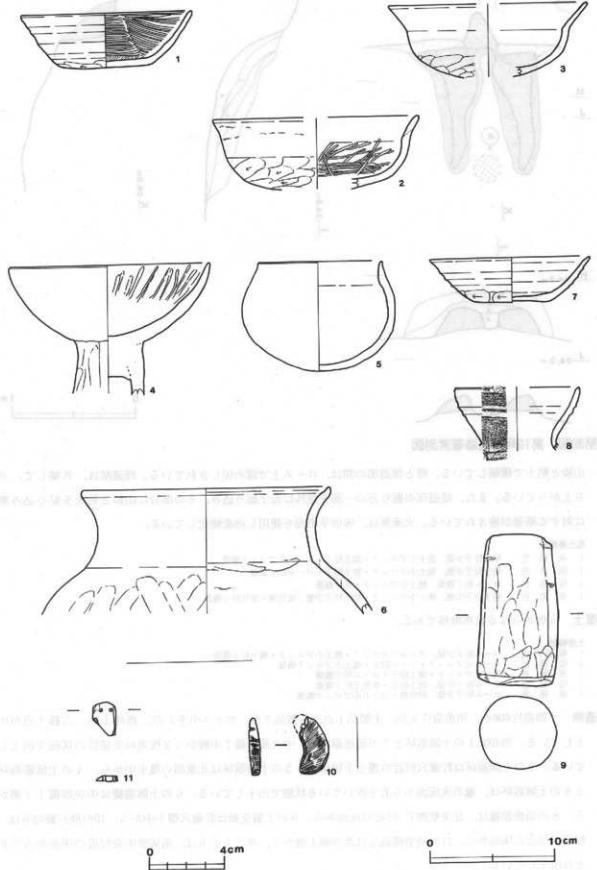
覆土 5層からなる自然堆積である。

土層解説

- 1 暗 褐色 ローム粒子少量、ローム小ブロック・焼土小ブロック・焼土粒子微量
- 2 暗 褐色 ローム小ブロック・ローム粒子・焼土小ブロック微量
- 3 黒 褐色 焼土小ブロック・焼土粒子・ローム粒子微量
- 4 暗 褐色 ローム粒子中量、焼土粒子・黒色土粒子微量
- 5 暗 褐色 ローム粒子少量、炭化物・ローム小ブロック微量

遺物 土師器片606点、須恵器片5点、土製品1点、石製品2点、ガラス小玉1点、鉄滓1点、古銭1点が出土している。第40図1の土師器環と7の須恵器環は、中央部の覆土中層から2枚重ねて逆位の状況で出土している。2の土師器環は貯蔵穴付近の覆土下層から、3の土師器環は北東部の覆土中から、4の土師器高環と5の土師器環は、竈の火床面から若干浮いている状態で出土している。6の土師器甕は中央部覆土下層から、8の須恵器甕は、北東壁側P₂付近の床面から、9の土製支脚は貯蔵穴覆土中から、10の滑石製勾玉は、貯蔵穴付近の床面から、11の剣型模造品は北西部上層から、ガラス小玉は、南東壁中央付近の床面からそれぞれ出土している。

所見 本跡は、初期竈を持っていることや出土遺物から、古墳時代後期（5世紀末）の住居跡であると考えら



第40图 第19号住居跡出土遺物実測図

れる。覆土中層部で須恵器と土師器の坏が二枚重ね（逆位）で出土しており、平安時代の遺構が掘り込まれていた可能性がある。

第19号住居跡出土遺物観察表

図番	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第4図 1	土師器 環	A 14.7	口縁部一部欠損。平底。体部はわずかに内彎して立ち上がり、口縁部に至る。	ロクロ成形。口縁部内・外面横方向のナデ。体部内面ヘラ磨き、外面ナデ。体部外面下端手持ちヘラ削り。底部内面ナデ、外面ヘラ削り後ナデ。	雲母・スコリア・白色針状物質 浅黄褐色 普通	P91 P.L16 95% 覆土中層
		B 4.4				
		C 7.4				
2	土師器 環	A(16.5)	底部から口縁部にかけての破片。丸底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は外反する。	口縁部内・外面ナデ。体部から底部内面ヘラ磨き、外面ヘラ削り後ナデ。	長石・雲母 褐色 普通	P94 P.L16 30% 覆土下層
		B(5.7)				
3	土師器 環	A(16.0)	体部から口縁部にかけての破片。体部は内彎し、口縁部は外傾する。	口縁部内面ナデ、外面横方向のナデ。外面ヘラ削り後ナデ。	石英・長石・雲母 パミス 褐色 普通	P95 P.L16 40% 覆土中 体部内面割離
		B(5.8)				
4	高土師器 環	A 16.2	脚部から環部にかけての破片。環部は内彎して立ち上がり、口縁部に至る。脚部内面上端に粘土塊充填。	口縁部内面ヘラナデ、外面横方向のナデ。体部内面上位ヘラナデ、下位ナデ、外面ヘラ削り後ナデ。脚部外面ヘラ削り後ナデ。	長石・雲母・スコリア 明褐色 普通	P92 P.L16 60% 覆土床面
		B(10.2)				
5	土師器 環	A 9.8	底部から口縁部にかけての破片。丸底。体部は球形で、最大径を越えてから、短い口縁部は真上に伸びる。	口縁部及び体部内・外面ナデ。	長石・雲母 純い褐色 普通	P126 P.L16 40% 覆土床面 二次焼成
		B 8.7				
6	土師器 環	A 20.0	口縁部片。口縁部は緩やかに外反する。	口縁部内・外面ナデ。	長石・燧石 明褐色 普通	P93 P.L16 15% 覆土下層
		B(10.0)				
7	須恵器 環	A 12.8	口縁部一部欠損。平底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。	ロクロ成形。口縁部内・外面横方向のナデ。体部から底部内面ナデ。体部外面下端手持ちヘラ削り。底部外面ヘラ削り後ナデ。	石英・長石・雲母 純い褐色 普通	P90 P.L16 96% 覆土中層
		B 3.5				
		C 5.8				
8	須恵器 環	A(10.0)	頸部から口縁部にかけての破片。頸部から口縁部は外傾する。	口縁部と頸部の境には、2本の隆線が走る。頸部外面を縞線状文が走る。	砂粒・パミス 灰オリーブ色 (釉)オリーブ黒色 普通	P127 10% 内・外面に隆線 縞面
		B(4.6)				

図番	器種	計 測 値					出土地点	備 考
		長さ(cm)	幅 (cm)	高さ (cm)	孔径 (cm)	重量 (g)		
第4図	土製支脚	径 6.0		11.8	—	568.1	床 面	DP15 P.L16

図番	器種	計 測 値					石 材	出土地点	備 考
		長さ(cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	孔径 (cm)	重量 (g)			
第4図10	勾 玉	3.1	1.4	0.6	{0.2}	3.6	滑 石	床 面	Q13
11	刺形埴器	1.8	1.1	0.3	0.1	1.4	滑 石	覆 土 上 層	Q12

第20号住居跡 (第41・42区)

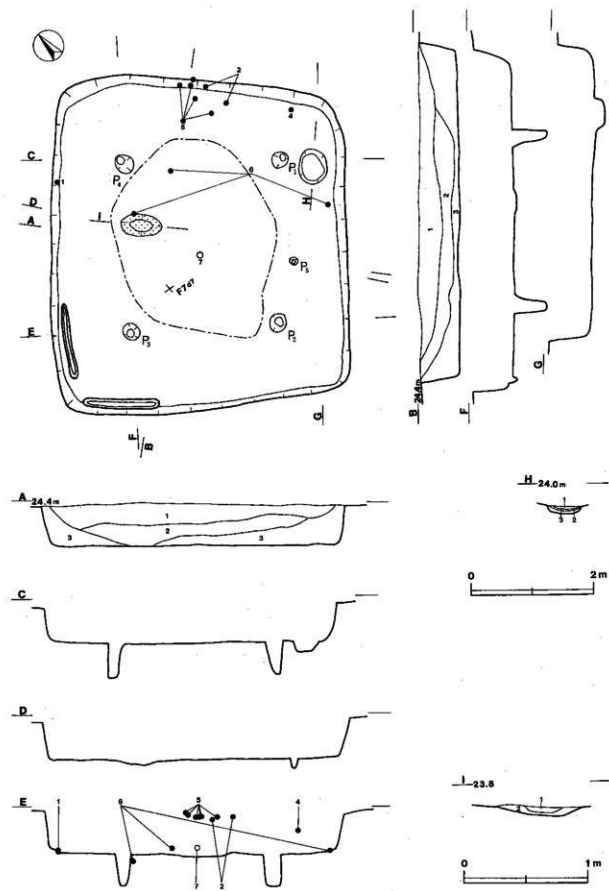
位置 IV区西部，F7c区。

規模と平面形 長軸5.36m，短軸4.76mの隅丸長方形。

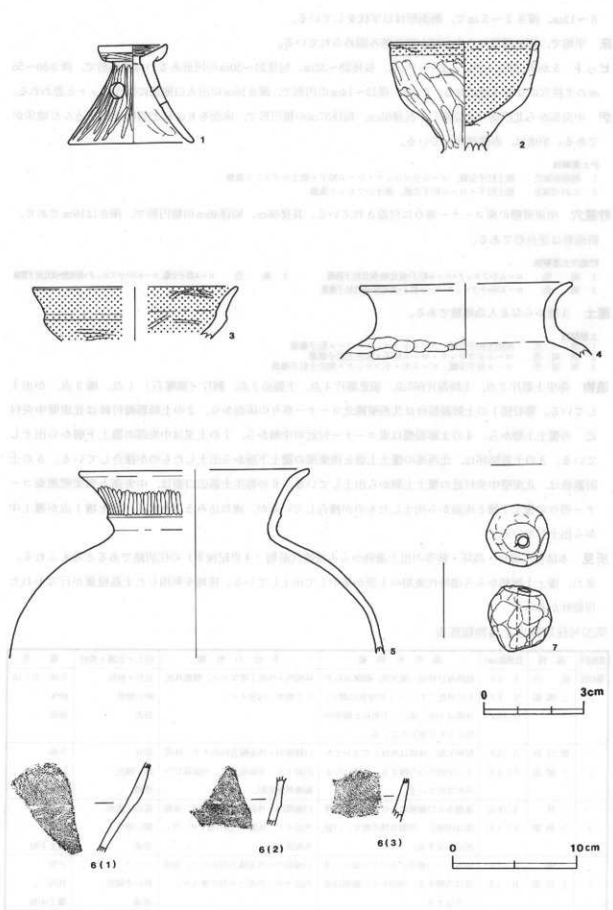
主軸方向 N-50°-W

壁 壁高は46~62cmで、ほぼ垂直に立ち上がる。

壁溝 南西壁から西コーナー寄りの一部と、北西壁から西コーナー寄りの一部の壁下で確認されている。幅



第41图 第20号住居跡実測图



第42図 第20号住居跡出土遺物実測図

8~12cm, 深さ2~5cmで, 断面形はU字状をしている。

床 平坦で, 炉の周辺から中央部が特に踏み固められている。

ピット 5か所(P₁~P₅)。P₁~P₄は, 長径28~32cm, 短径24~30cmの円形あるいは楕円形で, 深さ50~55cmの支柱穴になると思われる。P₅は, 径12~14cmの円形で, 深さ16cmの出入口施設に伴うピットと思われる。

炉 中央部から北西寄りに位置し, 長径65cm, 短径37cmの楕円形で, 床面を6cmほど皿状に掘り込んだ地床炉である。炉床は, 赤変硬化している。

炉土層解説

- 1 極端赤褐色 焼土粒子少量, ローム小ブロック・ローム粒子・焼土小ブロック微量
2 におい赤褐色 焼土粒子・ローム粒子少量, 焼土小ブロック微量

貯蔵穴 南東壁際の東コーナー寄りに付設されている。長径56cm, 短径46cmの楕円形で, 深さは16cmであり, 断面形は逆台形である。

貯蔵穴土層解説

- 1 褐色 ローム小ブロック・ローム粒子・炭化物・炭化粒子微量 3 褐色 ローム粒子少量, ローム中・小ブロック・炭化物・炭化粒子微量
2 褐色 ローム中・小ブロック・ローム粒子・炭化物・炭化粒子微量

覆土 3層からなる人為堆積である。

土層解説

- 1 黒色 黒色土粒子少量, ローム小ブロック・ローム粒子微量
2 黒褐色 ローム小ブロック・ローム粒子・黒色土粒子微量
3 黒褐色 ローム粒子少量, ローム中・小ブロック・黒色土粒子微量

遺物 弥生土器片2点, 土師器片687点, 須恵器片4点, 土製品2点, 製片(黒曜石)1点, 礫3点, が出土している。第42図1の土師器器台は北西壁際北コーナー寄りの床面から, 2の土師器脚付鉢は北東壁中央付近の覆土上層から, 4の土師器甕は東コーナー付近の中層から, 7の土玉は中央部の覆土下層から出土している。3の土師器鉢は, 北西部の覆土上層と南東部の覆土下層から出土したものが接合している。5の土師器甕は, 北東壁中央付近の覆土上層から出土している。6の弥生土器広口壺は, 中央部と南東壁際東コーナー寄りの覆土下層と床面から出土したものが接合しているが, 流れ込みと思われる。粘土塊1点が覆土中から出土している。

所見 本跡は, 器台・高環・鉢等の出土遺物から古墳時代前期(4世紀後半)の住居跡であると考えられる。

また, 覆土上層部から古墳時代後期の土器が集中して出土している。窪地を利用した土器投棄が行なわれた可能性がある。

第20号住居跡出土遺物観察表

図番	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第42図 1	器台 土師器	A 5.5	脚部及び環部一部欠損。脚部はわずかに外反して、「ハ」の字状に開く。	環部内・外面丁寧なナデ。脚部外面へう磨き, 内面ナデ。	灰石・砂粒 鈍い橙色 普通	P96 P.L16 80% 床面
		B 7.9	環部は小さく浅い。中央孔と脚部中に3孔が穿たれている。			
		D 10.2				
2	脚付鉢 土師器	A 12.0	脚部欠損。体部は外反して立ち上がり, 中位から内彎する。端部はつまみだされている。	口縁部内・外面横方向のナデ。体部内面ナデ, 外面指ナデ。内面及び口縁部外面赤彩。	黄丹 鈍い橙色 普通	P98 70% 覆土上層
		B(8.8)				
3	環 土師器	A(16.5)	体部から口縁部にかけての破片。体部は内彎し, 明瞭な接を経て, 口縁部は外反する。	口縁部内・外面横方向のナデ。体部内面ナデ, 外面へう磨り後ナデ。内・外面赤彩。	灰石・黄丹 鈍い橙色 普通	P100 10% 覆土下層
		B(4.3)				
4	壺 土師器	A(17.0)	体部から口縁部にかけての破片。体部は内彎する。頸部から口縁部は強く外反する。	口縁部内・外面横方向のナデ。体部内面ナデ, 外面へう磨り後ナデ。	バミス 鈍い赤褐色 普通	P99 10% 覆土中層
		B(6.8)				

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第43図 5	土師器 査	A 18.6	体部から口縁部にかけての破片。体部は内彎し、口縁部は下位に段を持ち、外反する。	口縁部内面横方向のナデ、外面上位へう磨き、下位へう削り後ナデ。体部内面ナデ、外面へう削り後ナデ。	石英・長石・雲母 鈍い黄褐色 普通	P97 P L17 30% 覆土上層
		B (15.0)				
6	広口壺 弥生土層		口縁部片。口縁部は外傾する。	口縁部には細縄文が施されている。	長石・ベイス 鈍い褐色	TP5 P L20 5% 床面

図版番号	器種	計 測 値					出土地点	備 考
		長さ(cm)	幅 (cm)	高さ (cm)	孔径 (cm)	重量 (g)		
第43図	土 玉	径 3.4		3.4	0.6	35.8	覆 土 中	DP16

第22号住居跡 (第43・44図)

位置 IV区中央部, F 8 f₁ 区。

規模と平面形 長軸3.70m, 短軸3.42mの方形。

主軸方向 N-58°-E

壁 壁高は45~65cmで、ほぼ垂直に立ち上がる。

床 平坦で、竈前面から中央部にかけて特に踏み固められている。

ピット 6ヶ所 (P₁~P₆)。P₁~P₄は、長径19~31cm, 短径14~27cmの円形あるいは楕円形で、深さ16~31cmで主柱穴と思われる。P₅は、径17~19cmの円形で、深さ7cmの出入口施設に伴うピットと思われる。

P₆は、長径49cm, 短径39cmの楕円形で、深さ9cmの逆台形をしている。中央部に位置し、壘片が覆土中から出土していて、性格は不明である。

P土層解説

- 1 暗 褐 色 ローム粒子少量・炭化物少量、焼土粒子微量

貯蔵穴 南東壁中央部付近の、やや東コーナー寄りに付設されている。長径70cm, 短径50cmの楕円形で、深さは33cmであり、底面からほぼ垂直に立ち上がる。

貯蔵穴土層解説

- 1 褐 色 ローム粒子少量、ローム小ブロック・焼土小ブロック・炭化物微量

竈 北東壁東コーナー寄りに、山砂と粘土で構築されている。規模は、長さ82cm, 幅84cmで、遺存状態は比較的良好であるが天井部は崩落している。袖部は、床面上に山砂と粘土を貼り付けて構築している。煙道部は、住居内にあり竈と壁との間は、ローム土で埋め戻しされている。火床部は、床の平坦面を使用し赤変硬化している。

竈土層解説

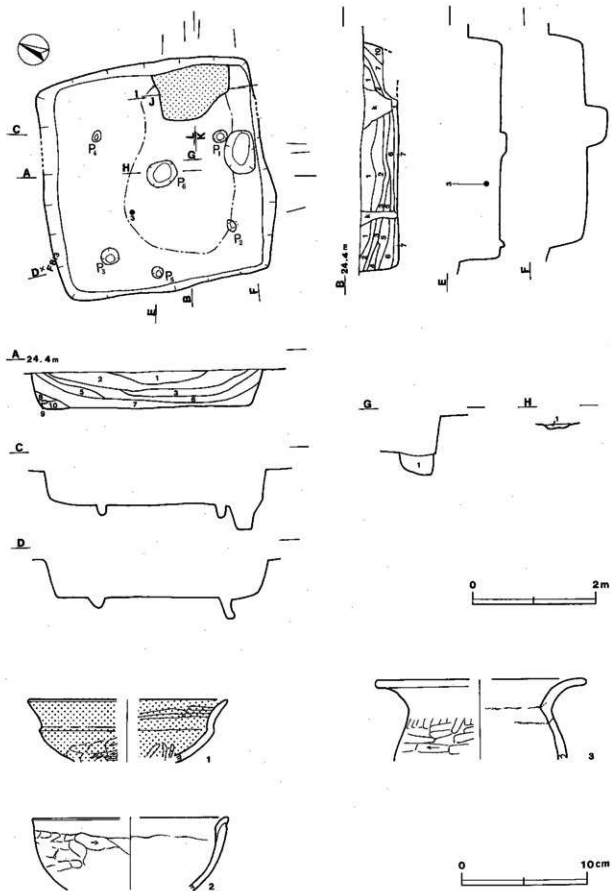
- 1 明赤褐色 ローム小ブロック・粘土小ブロック少量
2 におい赤褐色 粘土粒子多量、焼土小ブロック・炭化物粒子少量
3 赤褐色 焼土粒子多量、焼土小ブロック中量
4 暗赤褐色 ローム粒子・焼土粒子・粘土粒子少量、焼土小ブロック・山砂粒子・灰微量

覆土 ロームブロックの含有が多いことや、褐色土と黒色土が互層に堆積していることから、人為堆積と思われる。

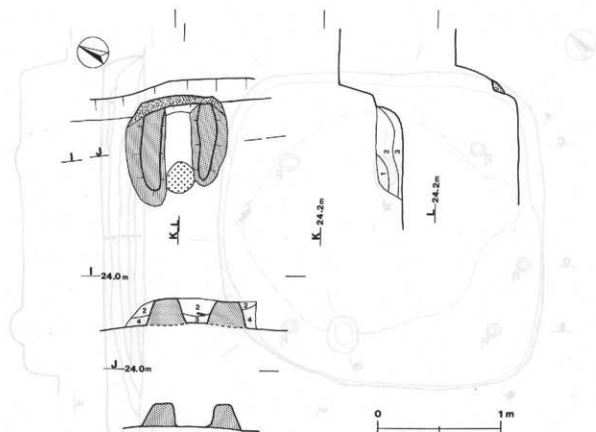
土層解説

- 1 褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック微量 6 暗褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック少量、焼土小ブロック・炭化物少量
2 褐色 ローム粒子中量、ローム中・小ブロック少量 7 褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック・炭化物少量
3 黒褐色 ローム中・小ブロック・ローム粒子少量 8 褐色 ローム粒子多量、ローム小ブロック少量、ローム中ブロック微量
4 褐色 ローム小ブロック中量、ローム中ブロック少量 9 黒色 ローム粒子少量
5 褐色 ローム小ブロック・ローム粒子・褐色土粒子少量、ローム中ブロック微量 10 におい褐色 ローム粒子多量、ローム小ブロック少量

遺物 土師器片308点, 滑石片1点が出土している。第43図1の土師器環は北東部覆土下層から、2の土師器碗



第43图 第22号住居跡・出土遺物実測図



第44図 第22号住居跡竪実測図

は覆土中から、3の土師器甕は中央部中層から出土している。粘土塊1点が覆土中から出土している。

所見 本跡の時期は、初期竈を持っていることや出土遺物から、古墳時代後期（5世紀末）と考えられる。

第22号住居跡出土遺物観察表

図録番号	器種	許容値(m)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第4図 1	環	A(16.0)	体部から口縁部にかけての破片。体部は内彎し、明瞭な線を經て、口縁部は外反する。	口縁部内面へう磨き、外面横方向のナデ。体部から底部内面へう磨き、外面へう削り後ナデ。内・外面磨耗。	バミス・砂粒 赤色 普通	P104 20% 覆土下層
	土師器	B(5.1)				
2	甗	A(15.0)	体部から口縁部にかけての破片。体部は内彎し、口縁部はわずかに外反する。	口縁部内・外面横方向のナデ。体部内面ナデ、外面へう削り後ナデ。	バミス 純い褐色 普通	P105 20% 覆土中
	土師器	B(5.7)				
3	甕	A(16.8)	体部から口縁部にかけての破片。体部は内彎し、口縁部は外反する。	外面横方向のナデ、体部内面ナデ、外面へう削り後ナデ。	バミス・スコリア 暗褐色 普通	P103 10% 覆土中層 口縁部内面割断
	土師器	B(6.4)				

第23号住居跡（第45図）

位置 IV区南部，F 8 g 1区。

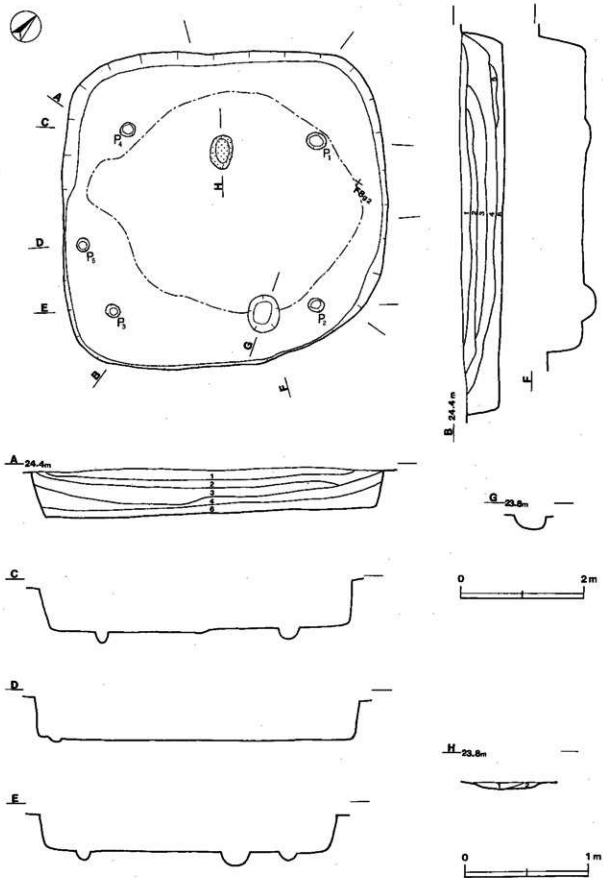
規模と平面形 長軸5.21m，短軸5.10mの隅丸方形。

主軸方向 N-43°-W

壁 壁高は53~72cmで、ほぼ垂直に立ち上がる。

床 平坦で、か付近から中央部にかけて特に踏み固められている。

ピット 5か所（P₁~P₅）。P₁~P₄は、長径24~31cm，短径20~29cmの円形あるいは楕円形で、深さ12~



第45图 第23号住居跡实测图

18cmの主柱穴になると思われる。P₁は、径20~22cmの円形で、深さ6cmの出入口施設に伴うピットと思われる。

貯蔵穴 南東壁中央部からやや東側寄りに付設されている。長径60cm、短径50cmの楕円形で、深さは21cmである。

貯蔵穴土層解説

- 1 褐色 ローム小ブロック・ローム粒子・炭化物微量

炉 中央部から北西寄りに位置し、長径55cm、短径36cmの楕円形で、床面を5cm程皿状に掘り込んだ地床炉である。

炉土層解説

- 1 濃い赤褐色 焼土粒子・ローム粒子少量
2 極暗赤褐色 ローム小ブロック・ローム粒子・炭化粒子微量

覆土 6層からなる自然堆積である。

土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子微量
2 極暗褐色 ローム粒子微量、焼土粒子微量
3 黒褐色 ローム粒子少量、焼土小ブロック微量
4 暗褐色 ローム粒子少量、ローム小ブロック微量
5 褐色 ローム粒子多量、ローム小ブロック中量、ローム中ブロック少量、ローム大ブロック微量
6 暗褐色 ローム粒子中量、ローム中・小ブロック微量

遺物 土師器片515点、礫5点が出土している。土師器片（甕と壺片）は、東コーナー部から南西壁中央付近にかけて、覆土中層および下層より出土している。細片が多く、ほとんどが接合できなかった。

所見 本跡は、床面直上の資料が少なく時期判断が難しいが、遺構の形態などから、古墳時代前期（4世紀後半）の住居跡と考えられる。

(3) 平安時代の住居跡

第6号住居跡（第46・47図）

位置 II区北西部、C9c、区。

規模と平面 長軸3.34m、短軸3.08mの方形。

主軸方向 N-52°-E

壁 壁高は20~38cmで、ほぼ垂直に立ち上がる。

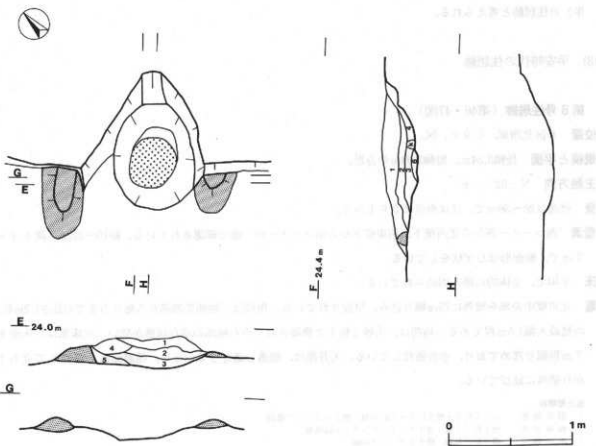
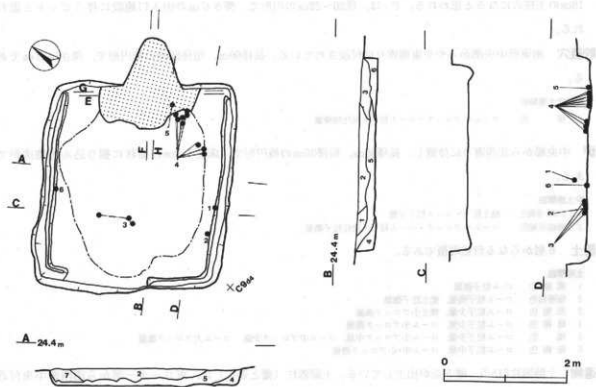
壁溝 西コーナー部から北西壁下、南東壁下から南コーナーの一部で確認されている。幅10~22cm、深さ4~7cmで、断面形はU字状をしている。

床 平坦で、全体的に踏み固められている。

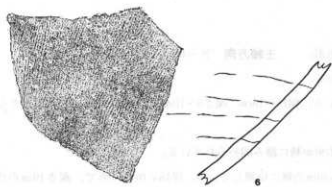
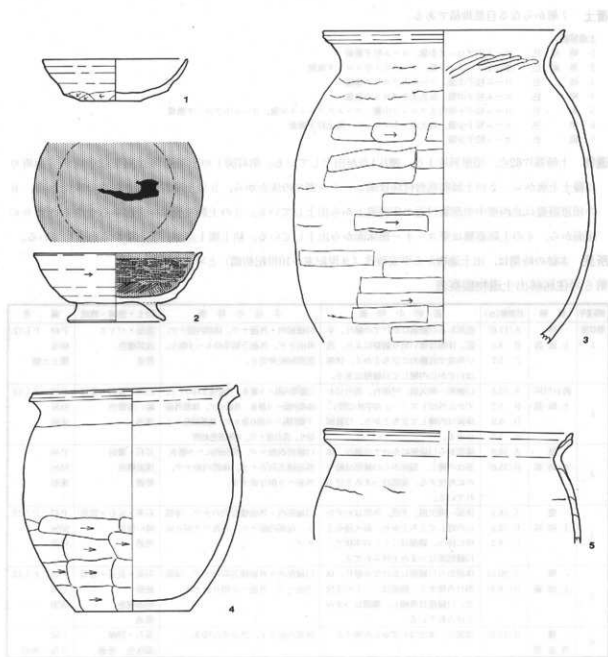
竈 北東壁中央部を壁外に75cm掘り込み、付設されている。規模は、袖部先端部から掘り方までの長さ1.2m程、両袖最大幅1.5m程である。袖部は、山砂と粘土で構築されやや右袖部の遺存状態が悪い。火床部は、床面を7cm程掘り窪めており、赤変硬化している。天井部は、崩落し遺存していない。煙道部は、緩傾して立ち上がり壁外に延びている。

竈土層解説

- 1 暗赤褐色 ローム粒子・焼土粒子・山砂少量、焼土小ブロック微量
2 極暗褐色 焼土粒子少量、焼土大・小ブロック・山砂微量
3 暗赤褐色 焼土粒子多量、焼土小ブロック少量
4 灰赤色 ローム粒子少量、焼土粒子・粘土粒子微量
5 濃い褐色 粘土粒子中量、灰少量、ローム中ブロック・焼土小ブロック微量
6 赤色 焼土粒子多量、焼土小ブロック中量



第46图 第6号住居跡・竈実測図



0 10cm

第47图 第6号住居跡出土遺物実測図

覆土 7層からなる自然堆積である。

土層解説

- 1 暗褐色 ローム中ブロック少量、ローム粒子微量
- 2 黒褐色 黒色土ブロック少量、ローム大・小ブロック微量
- 3 褐色 ローム粒子中量、ローム大ブロック微量
- 4 褐色 ローム粒子中量、黒色土小ブロック微量
- 5 褐色 ローム粒子・黒色土ブロック少量、ローム大ブロック少量、ローム小ブロック微量
- 6 褐色 ローム粒子少量、焼土中・小ブロック・焼土粒子微量
- 7 褐色 ローム粒子少量

遺物 土師器片62点、須恵器片1点、礫片1点が出土している。第47図1の土師器環は南東壁中央から南寄り
の覆土上層から、2の土師器高台付環は南コーナー寄りの床面から、5の土師器甕は電右側の床面から、6
の須恵器甕は北西壁中央部溝付近の床面直上から出土している。3の土師器甕は中央部からやや南西寄りの
床面から、4の土師器甕は東コーナー部床面から出土している。粘土塊1点が、覆土中から出土している。

所見 本跡の時期は、出土遺物から平安時代（9世紀末～10世紀初頭）と考えられる。

第6号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第47図 1	環 土師器	A(11.6)	底部から口縁部にかけての破片。平底。体部は強い削り調整により、浅い角度で直線的に立ち上がる。体部はわずかに内彎して口縁部に至る。	口縁部内・外面ナデ。体部内面ナデ、外面ナデ、外面下端手持ちへう削り。底部回転削り。	雲母・バミス 浅黄褐色 普通	P49 P L12 40% 覆土上層
		B 3.3				
		C 5.7				
2	高台付環 土師器	A 13.5	口縁部一部欠損。付高台。高台はわずかに外反して「ハ」の字状に開く。体部は内彎して立ち上がり、口縁部に至る。	口縁部内面へう磨き、外面横方向のナデ。体部内面へう磨き、外面ナデ。体部外面下部回転削り後ナデ。底部回転削り。高台部ナデ。内面黒色焼成	石英・長石・雲母 鈍い黄褐色 普通	P45 P L12 95% 床面
		B 5.7				
		D 8.0				
		E 1.5				
3	甕 土師器	A 16.9	体部から口縁部にかけての破片。体部は内彎し、頸部から口縁部は緩やかに外反する。端部はつまみ上げられている。	口縁部内面ナデ、部分的にへう磨き、外面横方向のナデ。体部内面ナデ、外面へう削り後ナデ。	長石・雲母 浅黄褐色 普通	P46 75% 床面
		B(25.0)				
4	甕 土師器	A 16.2	体部一部欠損。平底。体部はわずかに内彎して立ち上がり、最大径を上位に持つ。頸部は「く」の字状で、口縁端部はつまみ上げられている。	口縁部内・外面横方向のナデ。体部から底部内面ナデ、外面へう削り後ナデ。	石英・長石・雲母 鈍い褐色 普通	P47 P L12 90% 床面
		B 18.2				
		C 9.2				
5	甕 土師器	A(20.0)	体部から口縁部にかけての破片。体部は内彎する。頸部は「く」の字状で、口縁部は外傾し、端部はつまみ上げられている。	口縁部内・外面横方向のナデ。体部内面ナデ、外面へう削り後ナデ。	石英・長石・雲母 細雑 明赤褐色 普通	P48 P L13 15% 床面
		B(8.9)				
6	甕 須恵器	B(10.0)	体部片。体部はわずかに内彎する。	体部内面ナデ、外面平形叩き。	長石・細雑 褐灰色 普通	P50 5% 床面

第10号住居跡（第48～50図）

位置 II区の中央部、C98区。

規模と平面 長軸3.54m、短軸3.52mの方形。 主軸方向 N-45°-E

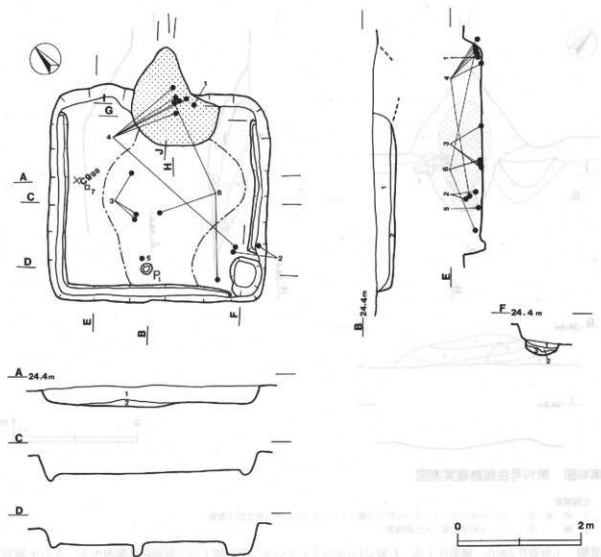
壁 壁高は25～30cmで、外傾して立ち上がる。

壁溝 北東壁を除く、壁下で確認されている。幅15～18cm、深さ6～10cmで、断面形は、逆台形またはU字形である。

床 はほぼ平坦で、竈前面から南西壁際の中央が特に踏み固められている。

ピット 1か所。P₁は、南西壁中央から40cm内側に位置している。径18cmの円形で、深さ19cmの出入口施設に伴うピットと思われる。

貯蔵穴 南コーナー際に付設されている。長径62cm、短径50cmの楕円形で、深さ20cmであり、断面形は逆台形である。



第48図 第10号住居跡実測図

貯蔵穴層解説

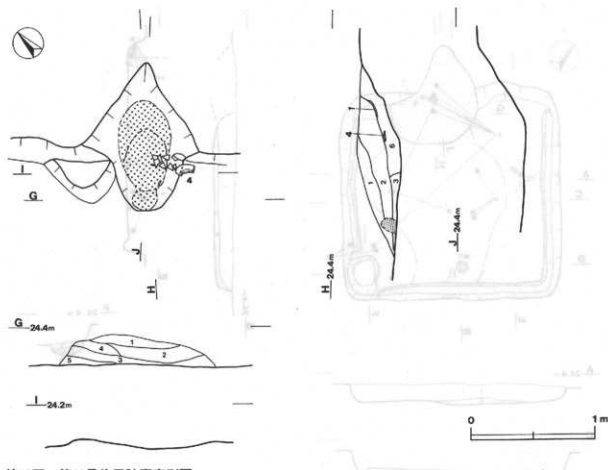
- 1 暗褐色 ローム中・小ブロック・ローム粒子・炭化物微量
- 2 褐色 ローム大・中ブロック・ローム粒子・炭化物微量
- 3 褐色 ローム粒子中層、黒色土粒子微量

竈 北東壁中央部を、壁外に70cm掘り込こんで構築されている。長さ118cm、幅95cmで、左袖部はロームの削り残しを基部としており、右袖部は不明である。覆土中からは凝灰岩の切り石が出土しており、竈の構築材と思われる。火床部は、床面を12cm程掘り窪めており、赤変硬化している。断面形は、緩やかなU字形をしている。天井部は、崩落し遺存していない。煙道部は、緩傾して立ち上がる。覆土は、6層からなる自然堆積である。

覆土層解説

- 1 黒褐色 山砂粒子少量、ローム粒子・粘土粒子微量
- 2 灰褐色 焼土粒子・炭化粒子少量、灰粒子微量
- 3 極暗褐色 焼土粒子・灰粒子少量、炭化粒子微量
- 4 暗褐色 山砂粒子少量、焼土小ブロック・炭化物・灰微量
- 5 暗褐色 炭化物少量、焼土小ブロック・山砂粒子・粘土ブロック微量
- 6 暗赤褐色 焼土粒子中量、焼土小ブロック少量、ローム粒子微量

覆土 2層からなる。1層はロームブロックの含有が多いことからして、人為堆積と思われる。2層は自然堆積である。



第49図 第10号住居跡実測図

土層解説

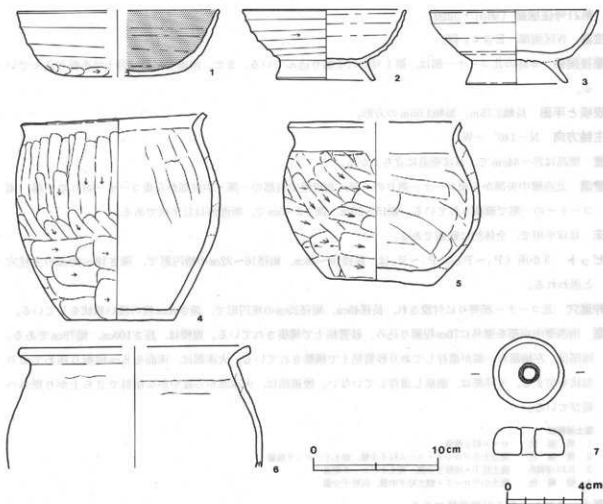
- 1 暗褐色 ローム中ブロック・ローム粒子少量、ローム大ブロック・炭化物微量
 2 褐色 ローム粒子中量、炭化物微量

遺物 土師器片206点、磁器片1点、石製品1点が出土している。第50図1の土師器環は竈内から、5の土師器甕はP付近から、それぞれ覆土下層より出土している。2の土師器高台付坏は、貯蔵穴付近の覆土上層と下層から出土したものが接合している。3の土師器高台付坏は、中央部床面から出土している。4の土師器甕は、竈内の覆土下層や貯蔵穴付近の覆土中層から出土したものが接合している。6の土師器甕は南コーナー部、中央部、および竈内の覆土下層より出土したものが接合している。7の石製紡錘車は、北西壁中央付近の覆土中層から出土している。

所見 本跡の時期は、出土遺物から平安時代（9世紀末～10世紀初頭）と考えられる。

第10号住居跡出土遺物観察表

図面番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考	
第50図 1	土師器	A 16.2	底部から口縁部にかけての破片。平底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部に至る。	ロクロ成形。口縁部内面へラ磨き、外面ナデ。体部内面へラ磨き、外面下縁手持ちへラ削り。底部回転へラ切り後へラナデ。内面黒色処理。	長石・雲母 鈍い黄褐色 普通	P64 P.L.13 50% 竈内覆土下層	
		B 5.2					
		C 10.0					
2	高台付坏 土師器	A 13.0	高台部から口縁部にかけての破片。付高台。高台は直線的に「ハ」の字状に開く。体部は内彎して立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。	ロクロ成形。口縁部、体部、底部及び高台部内・外面ナデ。底部回転へラ切り。器面全体に強いロクロ目が残る。	石英・長石・雲母 鈍い褐色 普通	P62 P.L.13 65% 覆土下層	
		B 5.6					
		D 8.0					
		E 1.3					



第50図 第10号住居跡出土遺物実測図

図番	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第50図 3	高台付杯 土師器	A 13.5	高台部から口縁部にかけての破片。付高台。高台は外反架状に「ハ」の字状に開く。体部は内彎して立ち上がり、口縁部に至る。	口縁部、体部、底部、高台部内・外面ナデ。底部回転糸切り。	長石・雲母 鈍い褐色 普通	P63 P L13 70% 床面 二次焼成
		B 6.0				
		D 8.6 E 2.2				
4	壺 土師器	A 15.1	体部一部欠損。平底。体部はわずかに内彎して立ち上がり、最大径を中位にもつ。口縁部は1cmほどで、外植する。	口縁部内・外面横方向のナデ。体部内面ナデ、外面ヘラ削り後丁寧なナデ。	長石・スコリア 褐色 普通	P60 P L14 70% 壺内覆土下層
		B 16.6				
		C 8.4				
5	壺 土師器	A (13.5)	底部から口縁部にかけての破片。平底。体部は球状で、最大径を中位にもつ。口縁部は短く、外植する。	口縁部内・外面ナデ。体部内面ナデ、外面ヘラ削り後ナデ。底部木葉痕。	長石・雲母・細砂 鈍い赤褐色 普通	P61 P L13 50% 覆土下層
		B 13.2				
		C 8.0				
6	壺 土師器	A (18.6)	体部から口縁部にかけての破片。体部は内彎する。頸部は「く」の字状で、口縁部は外植し、端部はつまみ上げられている。	口縁部及び体部内・外面ナデ。	長石・雲母・パリス 褐色 普通	P65 P L14 10% 壺内覆土下層
		B (9.7)				

図番	器種	計 測 値					石 材	出土地点	備 考
		長さ(cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	孔径 (cm)	重量 (g)			
第50図	石製紡車	径 3.8		1.4	0.8	35.8	滑 石	覆 土 中	Q7

第21号住居跡 (第51・52図)

位置 IV区南部, E 8 c. 区。

重複関係 本跡の北コーナー部は, 第1号炉穴を掘り込んでいる。また, 南東壁が第38号土坑を掘り込んでいる。

規模と平面 長軸2.75m, 短軸2.65mの方形。

主軸方向 N-140° -W

壁 壁高は25~44cmで, ほぼ垂直に立ち上がる。

壁溝 北西壁中央部から東コーナー寄りの一部, 北東壁中央部の一部・中央部から東コーナー寄りの一部, 南コーナーの一部で確認されている。幅15~20cm, 深さ3~5cmで, 断面形はU字状である。

床 ほぼ平坦で, 全体的に軟弱である。

ピット 3か所 (P₁~P₃)。P₁~P₃は, 長径19~26cm, 短径16~22cmの楕円形で, 深さ18~20cmの主柱穴と思われる。

貯蔵穴 北コーナー部寄りに付設され, 長径45cm, 短径29cmの楕円形で, 深さ10cm程の浅い皿状をしている。

竈 南西壁中央部を壁外に70cm程掘り込み, 砂質粘土で構築されている。規模は, 長さ100cm, 幅79cmである。袖部は, 左袖部の一部が遺存しており砂質粘土で構築されている。火床部は, 床面を8cm程掘り窪めており皿状を呈する。天井部は, 崩落し遺存していない。煙道部は, 火床部から緩やかな傾斜で立ち上がり壁外へ延びている。

覆土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子微量
- 2 黒褐色 黒色土小ブロック・ローム粒子少量, 焼土小ブロック微量
- 3 ぶい赤褐色 焼土粒子・灰粒子少量, 焼土小ブロック微量
- 4 暗褐色 焼土小ブロック・焼土粒子中量, 灰粒子少量

覆土 3層からなる自然堆積である。

土層解説

- 1 黒色 ローム小ブロック・ローム粒子微量
- 2 黒褐色 ローム小ブロック・ローム粒子・焼土粒子微量
- 3 暗褐色 ローム粒子少量, ローム中ブロック微量

遺物 土師器片127点, 鉄釘1点が出土している。第52図1の土師器片は, 竈の覆土上層から出土している。2の土師器片は, 竈の覆土中層と下層から出土したものが接合している。

所見 本跡の時期は, 出土遺物から平安時代(9世紀末~10世紀初頭)と考えられる。

第21号住居跡出土遺物観察表

図番	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第52図 1	土師器 環	A 12.0	口縁部一部欠損。平底。体部はわずかに内彎しながら立ち上がり, 口縁部に至る。	ロクロ成形。口縁部内・外面横方向のナデ。体部外面ナデ, 下端手持ちヘラ削り後ナデ。	長石・スコリア 鈍い褐色 普通	F102 P.L17 80% 竈 覆土上層
		B 3.5				
		C 5.2				
2	土師器 壺	A (21.0)	底部から口縁部にかけての破片。平底。体部はわずかに内彎して立ち上がる。口縁部は外反し, 端部はつまみ上げられている。	口縁部内・外面横方向のナデ。体部内面ナデ, 外面へう割り後ナデ。底部外面に木葉痕。	石英・長石・霞母 明赤褐色 普通	P101 50% 竈 覆土下層
		B 29.8				
		C (8.0)				

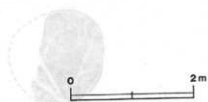
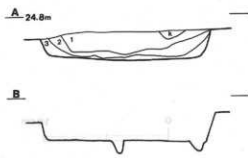
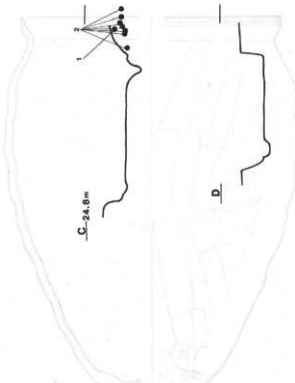
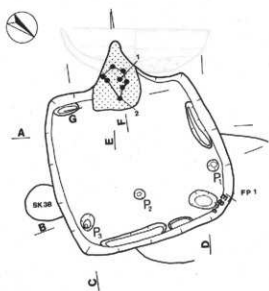
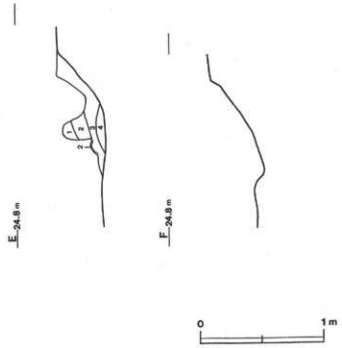
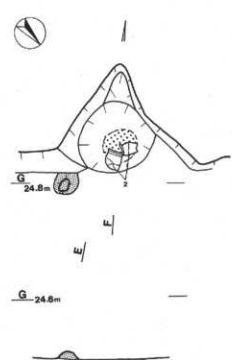
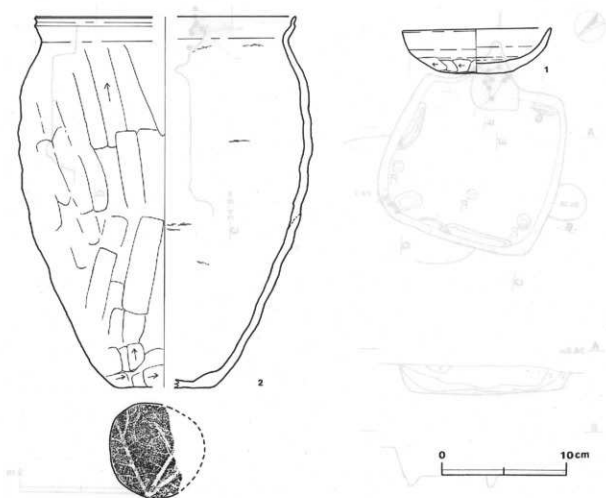


図25 第21号住居跡・竈実測図



第51図 第21号住居跡・竈実測図



第52図 第21号住居跡出土遺物実測図



図53 第21号住居跡出土遺物実測図

表2 屋台遺跡住居跡一覽表

住居跡 番 号	位置	主軸方向	平面形	規模 (m) (長軸×短軸) (距×距)	壁高 (cm)	床面	内 部 施 設						出土 遺 物	備考 新旧關係 (古→新)		
							壁溝	柱穴	貯藏穴	ドット	入口	伊・重			居住 切溝	
1	P9e ₂	N-47°-E	方 形	5.18×4.89	40~74	平坦		4	2		1	1・1	2	自然	土師器(坏・甕・甗)須惠器(坏)手捏土器 土製土製土製土製	
2	E8i ₁	N-65°-E	隅丸 長方形	5.86×5.24	57~80	平坦	-	4	1	-	-	1	1	自然	土師器(器・台・甕・鉢・甗・甗)須惠器(甗)土玉 滑石製白玉	SK30→本跡
3	D6j ₁	N-51°-E	方 形	4.98×4.61	56~90	平坦	一部	4	1	-	-	1	-	自然	土師器(坏・甕)	
4	D9j ₁	N-45°-E	方 形	5.91×5.46	65~92	平坦	一部	4	1	-	1	1	-	自然	土師器(坏・甕・甗・甗・甗)須惠器(重付坏)土玉 土玉	
5	E9h ₁	N-45°-E	方 形	5.09×4.98	28~90	平坦	一部	4	1	3	-	1	-	自然	土師器(坏・高坏・甕)滑石原石 滑石片	
6	C9c ₁	N-52°-E	方 形	3.94×3.08	20~38	平坦	ほぼ 全周	-	-	-	-	1	-	自然	土師器(坏・高台付坏・甕)須惠器(甗)	
7	E9c ₁	N-75°-E	方 形	6.58×6.51	62~80	平坦	一部	4	1	2	1	1	1	自然	土師器(坏・甕・甗)土玉 滑石原石	
8	E10f ₁	N-31°-W	方 形	3.72×[3.45]	23	平坦	-	2	-	-	-	-	-	自然	土師器(甗) 布目瓦	
9	D10g ₁	N-43°-W	方 形	4.72×4.50	45~60	平坦	1/2	2	-	5	1	1	-	自然	土師器(坏・甕・甗)	
10	C9g ₁	N-45°-E	方 形	3.54×3.52	25~30	平坦	ほぼ 全周	-	1	-	1	1	-	人為 自然	土師器(坏・甕・高台付坏)石製紡輪車	
11	D10d ₁	N-90°	横円形	5.80×5.17	10~20	平坦	-	5	-	-	-	-	-	不明	縄文土器片	
12	E8i ₁	N-65°-W	方 形	4.32×4.28	30~44	平坦	-	-	-	-	-	1	-	人為	土師器(甗)	
13	F8a ₁	N-30°-W	方 形	6.44×6.38	70~80	平坦	ほぼ 全周	7	1	2	3	2	5	自然	土師器(坏・甕・甗)白玉 滑石製勾玉	
14	E9j ₁	N-70°-W	長方形	3.50×2.77	35~45	平坦	-	-	-	-	-	1	-	自然	土師器(坏・甕)	
15	E8j ₁	N-106°-W	方 形	4.43×4.40	62~85	平坦	一部	4	1	-	2	1	-	人為	土師器(坏・鉢・高坏・甗)須惠器(甗)	
16	F8c ₁	N-110°-W	方 形	4.90×4.80	52~60	平坦	1/2	4	1	-	1	1	1	自然	土師器(坏・輪・小型甗)土玉 滑石製白玉	
17	E8f ₁	N-132°-W	方 形	5.94×5.48	50~70	平坦	1/2	4	1	-	1	1	2	自然	土師器(坏・高坏・手捏土器)土玉	
18	F8c ₁	N-49°-W	長方形	4.50×4.01	35~40	平坦	-	-	-	-	-	1	-	自然	土師器(坏・甗)土製品 滑石製未製品	
19	F8e ₁	N-112°-W	方 形	4.30×4.00	58~72	平坦	ほぼ 全周	4	1	-	1	1	1	自然	土師器(坏・甗)須惠器(坏・甗)土製品 滑石製玉 滑石製品	
20	F7c ₁	N-50°-W	隅丸 長方形	5.36×4.76	46~62	平坦	一部	4	1	-	1	1	-	人為	弥生土器(広口甗)土師器(坏・甗)土製品	
21	E8c ₁	N-140°-W	方 形	2.75×2.65	25~44	平坦	ほぼ 全周	3	1	-	-	1	-	自然	土師器(坏・甗) 鉄棒	PP-1→本跡 SK30→本跡
22	F8f ₁	N-58°-E	方 形	3.70×3.42	45~66	平坦	-	4	1	1	1	1	-	人為	土師器(坏・甗)	
23	F8g ₁	N-43°-W	隅丸形	5.21×5.10	53~72	平坦	-	4	1	1	-	1	-	自然	土師器片(甗・甗)	

2 土坑

当遺跡からは、土坑62基が検出された。ここでは時代が推定できるものや、特徴的なものについて記述し他は一覧表に掲載する。

第2号土坑（第53図）

位置 II区南東部、D10e.区。

規模と平面形 長径3.02m、短径1.80mの楕円形で、深さ86cm。

長径方向 N-41°-E

壁面 外傾して立ち上がる。

底面 平坦である。

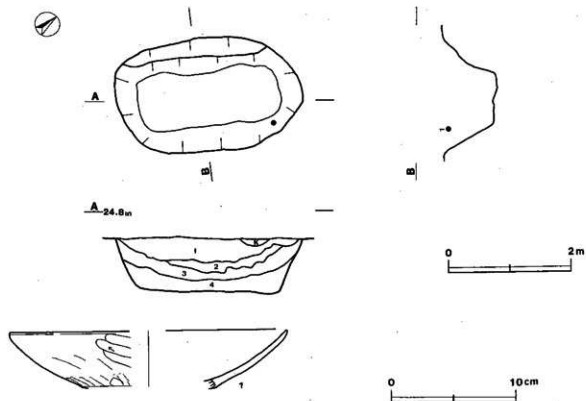
覆土 4層からなる自然堆積である。

土層解説

- | | | |
|---|-----|-------------------------------|
| 1 | 黒色 | ローム粒子少量、ローム小ブロック微量 |
| 2 | 黒褐色 | ローム粒子中量、ローム中・小ブロック・黒色土小ブロック微量 |
| 3 | 暗褐色 | ローム粒子多量、ローム小ブロック中量、ローム中ブロック微量 |
| 4 | 褐色 | ローム粒子少量、ローム小ブロック微量 |

遺物 土師器片19点が出土している。第53図1の土師器高坏片は、北東壁覆土上層より出土している。

所見 本跡の時期・性格については不明である。



第53図 第2号土坑・出土遺物実測図

第2号土坑出土遺物観察表

図録番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第53図 1	高環 土師器	A(22.4) B(4.8)	環部片。環部はわずかに内彎する。	口縁部内・外面横方向のナデ。体部内面ナデ、外面へら削り後ナデ。	ベミス・スコリア 鈍い褐色 普通	P113 PL 20% 覆土上層

第6号土坑(第54図)

位置 II区南部, D9i。区。

規模と平面形 長径1.76m短径1.13mの楕円形で、深さ14cm。

長径方向 N-68°-E

壁面 緩やかに外傾して立ち上がる。

底面 平坦である。

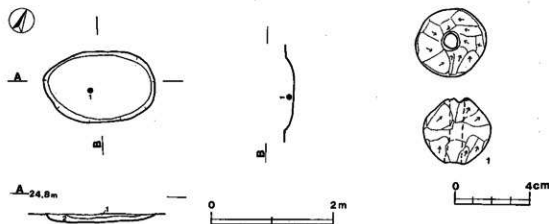
覆土 2層からなる自然堆積である。

土層解説

- 1 褐色 ローム小ブロック・黒色土ブロック散量
2 褐色 ローム粒子散量

遺物 須恵器片4点、土玉1点が出土している。第54図1の土玉は中央部覆土中層から出土している。

所見 本跡は、出土遺物も少なく時期・性格については不明である。



第54図 第6号土坑・出土遺物実測図

第6号土坑出土遺物観察表

図録番号	器種	計		測		出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	高さ(cm)	孔径(cm)		
第54図	土玉	径 3.8		3.5	1.1	42.3	覆土中層 DP17 P.118

第22号土坑(第55図)

位置 II区西部, C8i。区。

規模と平面形 長径1.61m、短径1.45mの楕円形で、深さ25cm。

長径方向 N-14°-W

壁面 外傾して立ち上がる。

底面 平坦である。

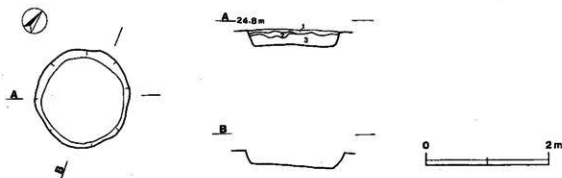
覆土 3層からなる自然堆積である。

土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子少量
- 2 褐色 ローム粒子中量, 黒色土粒子少量
- 3 暗褐色 ローム粒子少量

遺物 覆土中から, 縄文時代中期に位置付けられる縄文土器片が5点出土している。縄文土器深鉢片は中央部覆土上層から出土している。

所見 本跡は, 出土遺物も少なく時期・性格については不明である。



第55図 第22号土坑実測図

第34号土坑 (第56図)

位置 II区北西部, C8e, 区。

重複関係 本跡は, 第35号土坑を掘り込んでいる。

規模と平面形 長軸1.95m, 短軸0.87mの不定形で, 深さ27cm。

長径方向 N-37°-W

壁面 外傾して立ち上がる。

底面 皿状である。

覆土 ロームブロックの含有が多く, 人為堆積と思われる。

土層解説

- 1 暗褐色 ローム大ブロック少量, ローム中・小ブロック・ローム粒子微量

遺物 出土していない。

所見 本跡は, 出土遺物もなく時期・性格は不明である。

第35号土坑 (第56図)

位置 II区北西部, C8d, 区。

重複関係 本跡は, 第34号土坑に掘り込まれている。

規模と平面形 長径(3.35m), 短径1.35mの長楕円形で, 深さ25cm。

長径方向 N-37°-W

壁面 外傾して立ち上がる。

底面 平坦である。

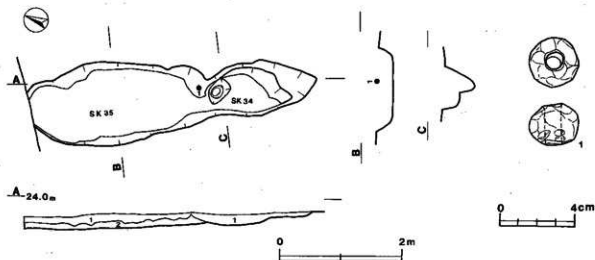
覆土 2層からなる自然堆積である。

土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子散在
2 褐色 黒色土粒子散在

遺物 第56図1の土玉は、南東壁際の覆土上層から出土している。

所見 本跡は、出土遺物も少なく時期・性格については不明である。



第56図 第34・35号土坑・出土遺物実測図

第35号土坑出土遺物観察表

図録番号	遺種	計測値				出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	高さ(cm)	孔径(cm)		
第560	土玉	径 2.6		2.2	0.8	12.5	覆土上層 DP18 PL18

第36号土坑 (第57図)

位置 I区中央部, B11f₁区。

重複関係 第37号土坑と若干重複しているが、新旧関係は不明である。

規模と平面形 長径1.63m, 短径1.15mの楕円形で、深さ46cm。

長径方向 N-89° -W

壁面 ほぼ垂直に立ち上がる。

底面 やや凸面である。

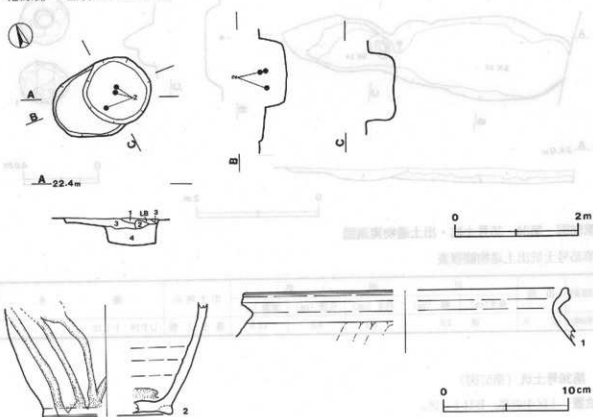
覆土 ブロック状の堆積をしており、人為堆積と思われる。

土層解説

- 1 灰褐色 ローム粒子少量
- 2 暗赤褐色 焼土粒子中量, 焼土小ブロック少量, 炭化粒子微量
- 3 褐色 ローム粒子少量, ローム小ブロック・焼土粒子・炭化粒子微量
- 4 褐色 ローム粒子中量, 炭化粒子少量, ローム中ブロック・焼土粒子微量

遺物 土師器片48点, 灰釉陶器片5点が出土している。第57図1の土師器甕は, 覆土中から出土した。2の灰釉陶器長頸瓶は, 覆土上層から出土した多くの破片が接合されたものである。なお, この灰釉陶器の出土状況は, 人為的な破砕が考えられる。

所見 本跡は, 微量の骨片が確認され, 2の灰釉陶器が折戸53号竈期の可能性が高いことから平安時代(10世紀初頭)の土壌層と思われる。



第57図 第36号土坑・出土遺物実測図

第36号土坑出土遺物観察表

図号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第57図 1	土師器	A(26.0) B(3.5)	体部から口縁部にかけての破片。体部は内彎し, 頸部は「く」の字状で, 口縁部は外傾する。端部はつまみ上げられている。	口縁部内・外面横方向のナデ。体部内面ナデ, 外面へう削り後ナデ。	長石・雲母・砂粒 灰褐色 普通	P107 5% 覆土中
2	長頸瓶 陶器	B(8.9) D(10.4) E 0.7	底部から体部にかけての破片。底部には低い高台がつく。体部はわずかに内彎して立ち上がる。	体部内面へうナデ, 外面へう削り。	石英・長石・雲母 鈍い橙色 普通	P106 P.L17 30% 覆土上層

第37号土坑 (第58図)

位置 I区中央部, B11f, 区。

重複関係 第36号土坑と若干重複しているが, 新旧関係は不明である。

規模と平面形 長径1.35m, 短径1.22mの楕円形で, 深さ52cm。

長径方向 N-59° -E

壁面 外傾して立ち上がる。

底面 やや凹面である。

覆土 不連続な堆積状況から人為堆積と思われる。

土層解説

- 1 極暗褐色 焼土粒子少量, ローム小ブロック・ローム粒子・炭化粒子微量
- 2 黒褐色 ローム粒子・炭化粒子少量, ローム小ブロック・炭化物・焼土粒子微量
- 3 灰褐色 ローム小ブロック・ローム粒子・炭化物少量, 炭化粒子微量

遺物 土師器片209点, 灰釉陶器片15点が出土している。第58図1の土師器甕は, 南西壁寄り覆土下層から出土した破片を接合している。2の土師器甕は, 中央部の覆土下層および中層から出土した破片を接合している。3の土師器甕は東部覆土中層から出土している。第36号土坑出土と同一個体と思われる灰釉陶器長頸瓶は, 細かく割れて覆土中より出土している。2次焼成を受けている。

所見 本跡は, 覆土中に微量の骨片が確認され, 灰釉陶器片が折戸53号窯期の所産と考えられることから, 平安時代(10世紀初頭)の土壌墓と思われる。

第37号土坑出土遺物観察表

図号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第58図 1	甕 土師器	A (17.0)	体部から口縁部にかけての破片。体部は内傾し, 頸部から口縁部は緩やかに外反する。	口縁部内・外面横方向のナデ。体部内面ナデ。体部外面上位ナデ, 下位へう削り。	長石・バミス 鈍い褐色 普通	P108 P L17 30% 覆土下層
		B (31.5)				
2	甕 土師器	A (24.0)	体部から口縁部にかけての破片。体部は内傾し, 頸部から口縁部は緩やかに外反する。端部はつまみ上げられている。	口縁部内・外面横方向のナデ。体部内面ナデ, 外面へう削り。	雲母・砂粒・バミス 鈍い黄褐色 普通	P109 P L17 10% 覆土下層
		B (10.0)				
3	甕 土師器	A (21.0)	体部から口縁部にかけての破片。体部は内傾し, 頸部は「く」の字状である。口縁部は外傾し, 端部はつまみ上げられている。	口縁部内・外面横方向のナデ。体部内面ナデ, 外面へう削り後ナデ。	バミス・砂粒 鈍い黄褐色 普通	P111 10% 覆土中層
		B (7.5)				

第41号土坑 (第59図)

位置 4区東部, F8c, 区。

規模と平面形 径0.73mの円形で, 深さ25cm。

長径方向 N-0°

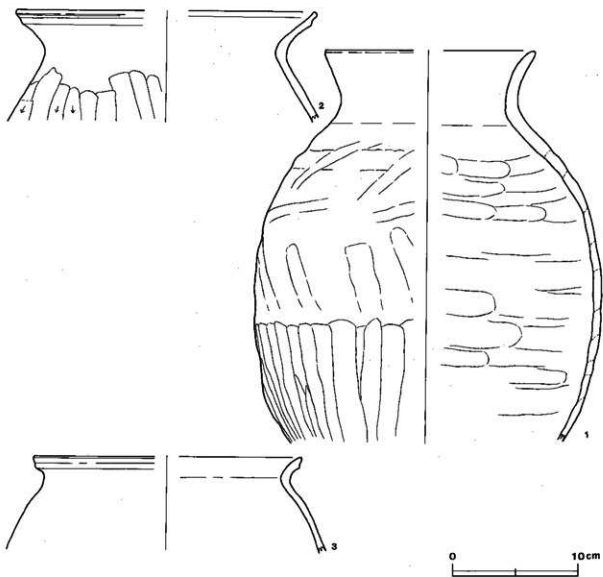
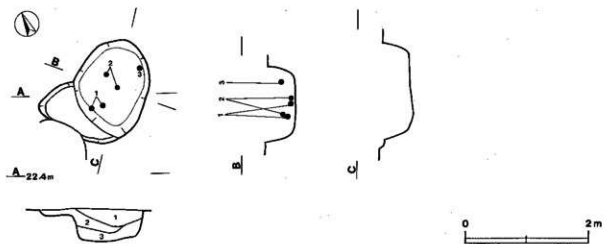
壁面 緩やかに外傾して立ち上がる。

底面 皿状である。

覆土 4層からなる自然堆積である。

土層解説

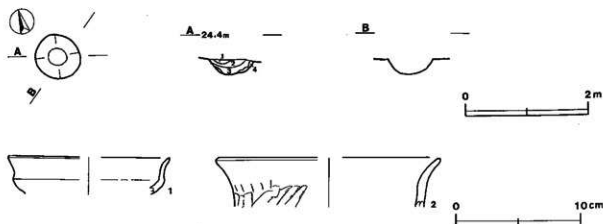
- 1 におい赤褐色 灰少量, 焼土粒子微量
- 2 におい赤褐色 粘土中量, 焼土中・小ブロック・焼土粒子微量
- 3 黒褐色 ローム粒子少量
- 4 褐色 ローム小ブロック微量



第58图 第37号土坑·出土遗物实测图

遺物 土師器片24点が出土している。第59図1の土師器環、2の土師器甕は、覆土中から出土している。

所見 本跡は、出土遺物から古墳時代の土坑と思われるが、性格は不明である。



第59図 第41号土坑・遺物実測図

第41号土坑出土遺物観察表

図説番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第59図 1	環 土師器	A(13.0) B(3.0)	体部から口縁部にかけての破片。体部は内彎し、明瞭な稜を経て、口縁部は外反する。	口縁部内・外面横方向のナデ。体部内面ナデ、外面へう削り後ナデ。	長石・バミス 褐色 普通	P115 10% 覆土中
2	甕 土師器	A(18.0) B(4.0)	体部から口縁部にかけての破片。体部はわずかに内彎し、口縁部は緩やかに外反する。	口縁部内・外面ナデ。体部内面ナデ、外面へう削り	長石・バミス 鈍い赤褐色 普通	P114 10% 覆土中

第45号土坑 (第60図)

位置 IV区南西部, F7f; 区。

規模と平面形 径0.48mの円形で、深さ20cm。

長径方向 N-0°

壁面 外傾して立ち上がる。

底面 皿状である。

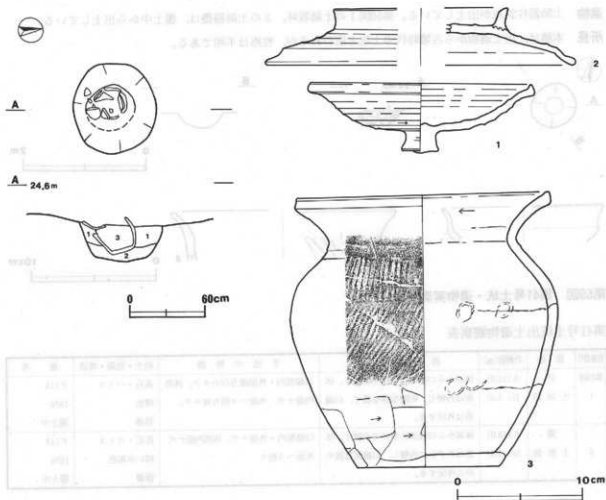
覆土 3層からなる。1, 2層は、人為堆積と思われる。

土層解説

- 1 褐 色 ローム粒中量、焼土粒子少量
- 2 褐 色 ローム小ブロック少量
- 3 暗褐色 骨片少量、ローム粒子微量

遺物 円版の土器3点が出土している。第60図3の須恵器甕に1の須恵器蓋を逆位で内蓋とし、さらに2の須恵器盤を逆位にして外蓋としている。1の甕の中からは、火葬骨と思われる骨片が少量確認された。このことから、すべて蔵骨器として使用されたものと思われる。

所見 本跡は、出土遺物から平安時代前期(9世紀前半)の火葬墓と思われる。

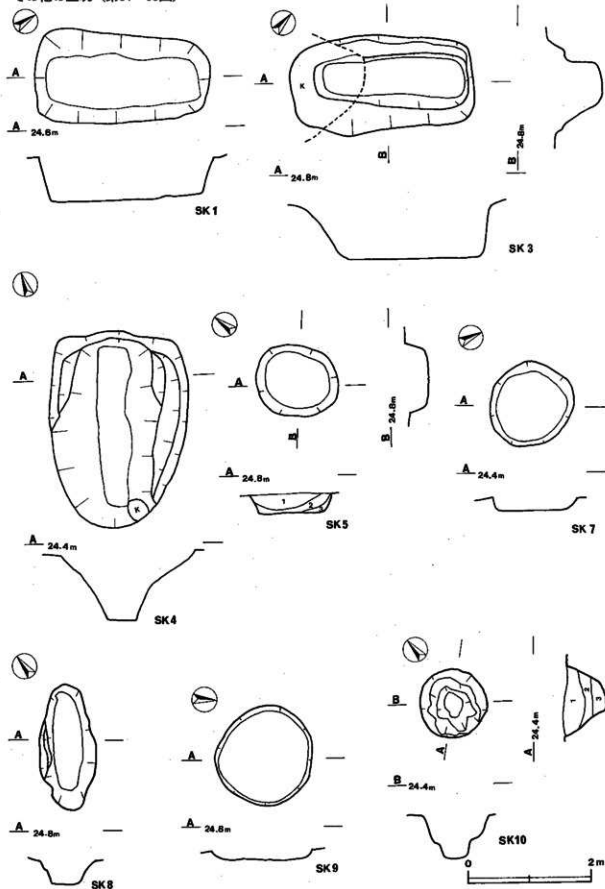


第60図 第45号土坑・出土遺物実測図

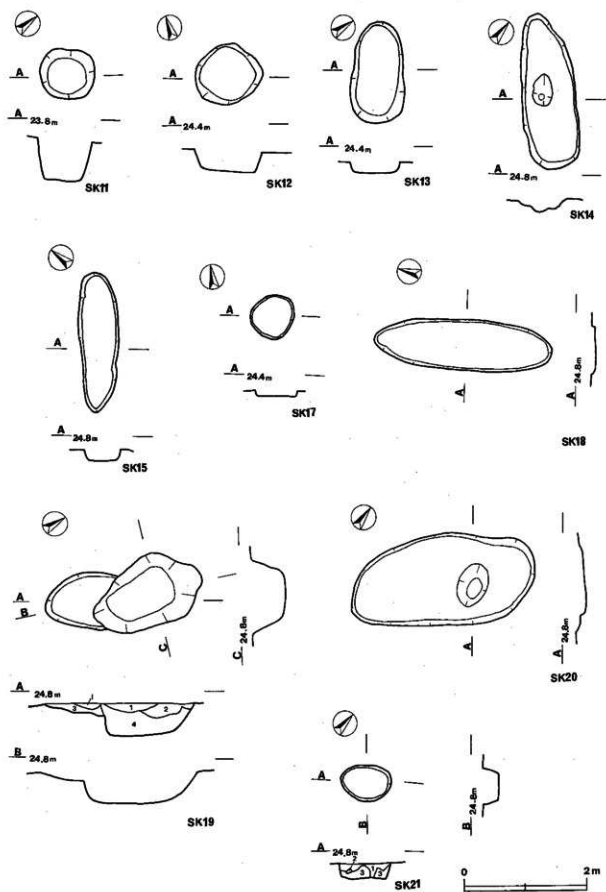
第45号土坑出土遺物観察表

図番	器種	計測値(cm)	図形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
1	須恵器	A 18.0	口縁部一部欠損。逆台形のままみが付く。天井部はなだらかに下降し、	つまみ部ナデ。天井部内面ナデ、外面上位回転ヘラ削り後ナデ、外面下位ナデ。天井部に強いロクロ目が残る。	長石・細糠 灰白色 普通	P125 P L18 70% 炭骨器蓋
		B 5.7				
		F 3.0 G 1.3	端部は下方につまみ出されている。			
2	甕	A (24.8)	高台部から口縁部にかけての破片。	口縁部から底部内面ナデ。口縁部から体部外面ナデ。底部外面回転ヘラ削り後ナデ。高台部内・外面ナデ。体部外面に強いロクロ目が残る。	長石・細糠 灰色 普通	P124 P L18 40% 炭骨器蓋
		B 4.6	付高台。高台は「ハ」の字状に開く。			
		D (14.0)	体部は外傾して立ち上がり、口縁部は外反する。			
		E 1.6				
3	甕	A 20.5	口縁部一部欠損。平底。体部はわずかに内傾して立ち上がる。口縁部は外反し、端部はつまみあげられている。	口縁部内・外面横方向のナデ。体部内面ナデ。体部外面上位平行叩き、下位ヘラ削り。底部内・外面ナデ。	長石・細糠 オリーブ 普通	P128 P L18 90% 炭骨器
		B 21.8				
		C 11.5				

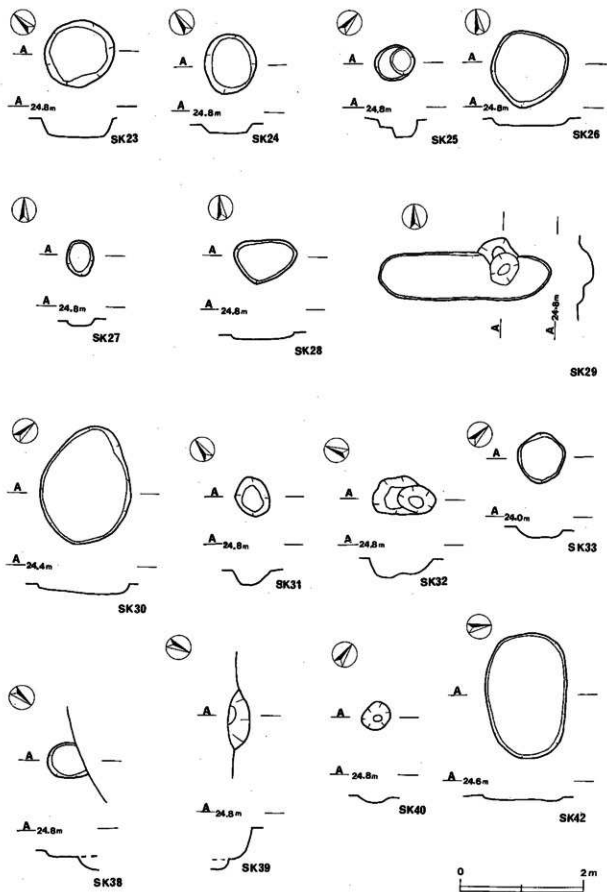
その他の土坑 (第61~65図)



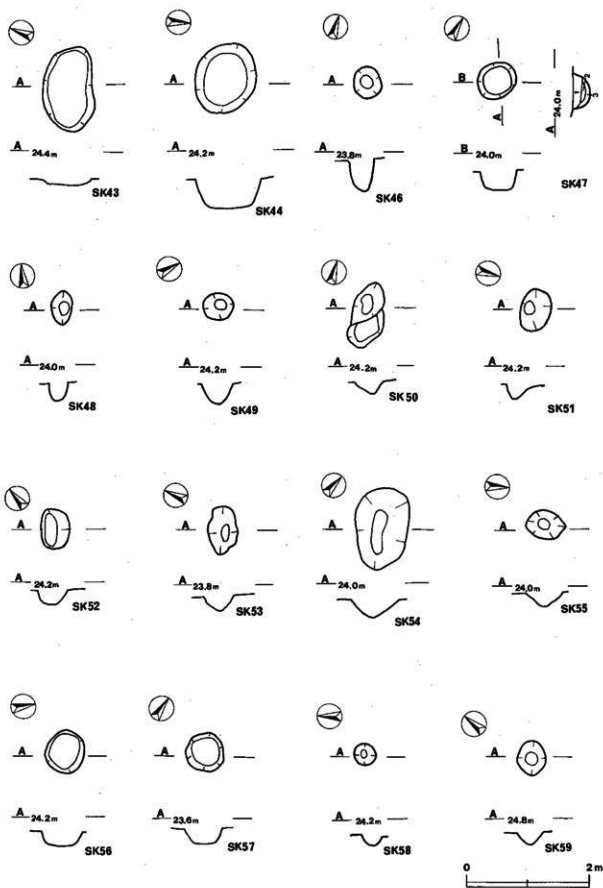
第61図 第1・3~5・7~10号土坑実測図



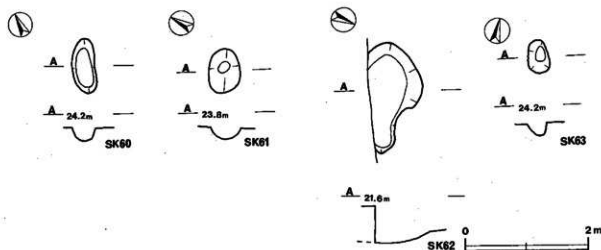
第62图 第11~15·17~21号土坑实测图



第63图 第23~33·38~40·42号土坑实测图



第64图 第43·44·46·47~59号土坑实测图



第65圖 第60~63号土坑実測図

表3 屋台遺跡土坑一覽表

土坑 番号	位置	長径方向 (長軸方向)	平面形	規模		壁面	底面	覆土	出土遺物	備考 重複遺構
				長径×短径 (m) (軸)×(軸)	深さ (cm)					
1	D10i	N-28°-E	隅丸長方形	2.82×1.42	72	外傾	平坦	自然	縄文土器片1点, 土師器片2点	
2	D10n	N-41°-E	槽円形	3.02×1.80	86	外傾	平坦	自然	土師器片19点	
3	D10b	N-46°-E	隅丸長方形	2.97×1.60	92	外傾	平坦	人為		
4	D10d	N-22°-E	不整槽円形	3.20×2.19	110	外傾	平坦	自然	土師器片10点	
5	D10f	N-6°-W	槽円形	1.40×1.18	33	外傾	平坦	自然	土師器片2点	
6	D9i	N-68°-E	槽円形	1.76×1.13	14	緩斜	平坦	自然	須惠器片4点, 土王1点	
7	D10b	-	円形	1.41×1.32	19	外傾	平坦	自然		
8	D10g	N-23°-E	槽円形	2.50×0.90	40	外傾	平坦	自然	土師器片3点	
9	E9b	-	円形	1.61×1.55	16	外傾	平坦	人為	土師器片7点, 石器1点, 須惠器片1点	
10	C10h	-	円形	1.09×1.07	70	外傾	平坦	人為		
11	C10f	-	円形	0.89×0.88	67	外傾	平坦	自然		
12	C10e	-	円形	1.00×0.95	32	外傾	平坦	自然	土師器片1点	
13	C10h	N-44°-W	槽円形	1.63×0.88	18	外傾	平坦	自然	土師器片3点	
14	C9j	N-39°-W	長槽円形	2.63×0.86	20	緩斜	凹凸	自然		
15	D9e	N-45°-E	長槽円形	2.25×0.50	18	外傾	平坦	自然	土師器片20点	
17	C9f	-	円形	0.70×0.70	10	外傾	平坦	自然	縄文土器片3点, 土師器片1点	
18	C9g	N-8°-W	長槽円形	2.85×0.82	8	外傾	平坦	自然		
19	C9h	AN-9°-E BN-27°-E	不定形 (槽円形)	1.86×1.19 0.85×0.92	64 14	外傾 緩斜	平坦	自然	縄文土器片2点	
20	C9i	N-42°-E	槽円形	3.04×1.66	15	緩斜	平坦	自然	縄文土器片2点, 土師器片1点	
21	C8h	N-55°-E	槽円形	0.81×0.56	26	外傾	平坦	人為	縄文土器片1点	
22	C8i	-	円形	1.61×1.45	25	外傾	平坦	自然	縄文土器片5点	
23	C8j	-	円形	1.13×1.10	29	外傾	平坦	自然	須惠器片1点	
24	C8i	-	円形	0.96×0.80	16	外傾	平坦	自然		
25	C9e	-	円形	0.65×0.53	30	外傾	平坦	自然		
26	C8g	-	円形	1.25×1.20	12	外傾	平坦	自然		
27	C8g	N-0°	槽円形	0.66×0.44	12	外傾	平坦	自然		

土坑番号	位置	長径方向 (長軸方向)	平面形	規模		壁面	底面	覆土	出土遺物	備考 重複遺構
				長径×短径(m) (軸×軸)	深さ (cm)					
28	C8f ₁	N-77°-E	不定形	0.94×0.64	10	外傾	平坦	自然		
29	C8e ₁	N-81°-W	長楕円形	2.75×0.70	24	外傾	凹凸	自然		
30	C8e ₁	N-35°-W	楕円形	1.94×1.46	14	外傾	平坦	自然		
31	C8g ₁	N-17°-E	楕円形	0.85×0.53	23	外傾	平坦	自然		
32	C8g ₁	N-25°-W	不定形	1.02×0.61	32	外傾	凹凸	自然		
33	C9b ₁	-	円形	0.80×0.73	14	外傾	平坦	自然		
34	C8a ₁	N-37°-W	不定形	1.95×0.87	27	外傾	皿状	人為		第35号土坑→本跡
35	C8d ₁	N-37°-W	不定形	3.35×1.35	25	外傾	平坦	自然	土玉1点	本跡→第34号土坑
36	B11f ₁	N-89°-W	楕円形	1.63×1.15	46	垂直	凸	人為	土師器片48点, 灰輪陶器片5点	本跡は第37号土坑と重複
37	B11f ₁	N-59°-E	楕円形	1.35×1.22	52	外傾	凹	人為	土師器片209点, 灰輪陶器片15点	本跡は第36号土坑と重複
38	E8e ₁	N-35°-W	楕円形	[0.70]×0.55	10	外傾	皿状	自然	土師器片1点	
39	E8i ₁	N-66°-E	楕円形	[1.00×0.55]	5	外傾	皿状	自然	土師器片1点	
40	E8f ₁	N-36°-E	楕円形	0.48×0.40	5	外傾	平坦	自然	縄文土器片1点, 土師器片13点	
41	F8c ₁	-	円形	0.73×0.71	25	縦傾	皿状	自然	土師器片24点	
42	F8e ₁	N-89°-W	楕円形	2.00×1.30	5	外傾	平坦	自然	土師器片5点	
43	F9b ₁	N-62°-E	楕円形	1.37×0.80	10	外傾	平坦	自然	土師器片7点	
44	F9c ₁	N-75°-W	楕円形	1.00×1.18	48	外傾	平坦	自然	土師器片9点	
45	F7f ₁	-	円形	0.48×0.45	20	外傾	皿状	自然	須恵器(壺・甕・蓋)3点	
46	E7b ₁	N-30°-W	楕円形	0.52×0.44	54	外傾	皿状	自然		
47	E7d ₁	N-10°-E	楕円形	0.68×0.58	32	外傾	平坦	自然		
48	E7f ₁	N-7°-E	楕円形	0.53×0.34	30	外傾	皿状	自然		
49	E7g ₁	-	円形	0.50×0.45	38	外傾	皿状	自然		
50	E7h ₁	N-14°-W	不定形	1.05×0.52	20	外傾	皿状	自然	土師器片1点	
51	E7g ₁	N-90°-E	楕円形	0.68×0.50	26	外傾	皿状	自然		
52	E7i ₁	N-25°-E	楕円形	0.64×0.48	25	外傾	皿状	自然		
53	E7h ₁	N-77°-E	不定形	0.78×0.48	25	外傾	皿状	自然	土師器片5点	
54	E7i ₁	N-40°-W	楕円形	1.32×0.86	31	外傾	皿状	自然	土師器片8点, 須恵器片1点	
55	E7i ₁	N-0°	楕円形	0.65×0.48	24	外傾	皿状	自然	土師器片1点	
56	F7a ₁	N-46°-W	楕円形	0.67×0.54	22	外傾	平坦	自然		
57	E7g ₁	-	円形	0.63×0.63	25	外傾	平坦	自然	土師器片1点	
58	E7e ₁	-	円形	0.36×0.34	19	外傾	平坦	自然	土師器片1点	
59	F7b ₁	N-37°-E	楕円形	0.57×0.46	20	外傾	皿状	自然	土師器片1点	
60	F7i ₁	N-25°-E	長楕円形	0.90×0.36	24	外傾	平坦	自然	土師器片1点	
61	F8i ₁	N-72°-E	楕円形	0.72×0.54	20	外傾	平坦	自然	土師器片2点	
62	G8e ₁	N-76°-E	不定形	1.88×1.80	60	縦斜	平坦	自然		
63	E7i ₁	N-24°-W	楕円形	0.54×0.33	20	外傾	皿状	自然	土師器片5点	

土坑土層解説

第5号土坑

- 1 暗褐色 黒色十大ブロック多量, ローム粒子中量, ローム小ブロック少量, ローム大・中ブロック微量
 2 褐色 ローム粒子中量, ローム小ブロック微量
 3 明褐色 黒色土中ブロック微量

第10号土坑

- 1 褐色 ローム小ブロック中量, ローム大ブロック少量, 炭化材微量 3 褐色 ローム中ブロック中量, ローム大・小ブロック少量
 2 暗褐色 ローム中・小ブロック少量, ローム大ブロック微量

第19号土坑	
1 黒褐色	ローム粒子微量
2 暗褐色	ローム粒子少量、ローム大ブロック微量
3 褐色	黒色土粒子少量
4 暗褐色	ローム粒子少量、ローム中・小ブロック微量

第21号土坑	
1 暗褐色	ローム粒子・黒色土粒子少量
2 極暗褐色	黒色土粒子中量、ローム中ブロック・ローム粒子微量
3 褐色	ローム粒子・黒色土粒子少量

第47号土坑	
1 暗褐色	ローム中・小ブロック・ローム粒子微量
2 褐色	ローム粒子微量
3 褐色	ローム粒子少量、ローム小ブロック微量

3 炉穴

当遺跡から、炉穴1か所が検出されている。以下、その特徴について記載する。

第1号炉穴（第66図）

位置 IV区北部，E8b₁区。

重複関係 本跡の南半分を第21号住居跡の北コーナー部が掘り込んでいる。

規模と平面形 長径 [2.35m]，短径 [2.00m] の不整長方形で，深さ12cm。

長軸方向 N-51°-W

壁面 緩やかに外傾して立ち上がる。

底面 平坦である。

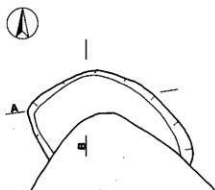
覆土 1層からなる。

土層解説

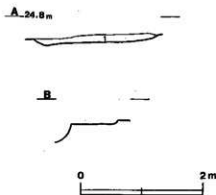
- 1 におい赤褐色 焼土粒子少量、焼土小ブロック・炭化粒子微量

遺物 縄文土器細片が出土している。

所見 本跡は、縄文土器の細片が覆土中に含まれていたことや焼土粒子・ブロックが広範囲に出土したことから縄文時代の炉穴と思われる。



第66図 第1号炉穴実測図



4 溝

調査区の南西部で，西から東へ延びる1条の溝を検出した。以下，特徴と出土遺物について記載する。

第1号溝（第67図）

位置 IV区南部，G7f₁～G8f₁区。

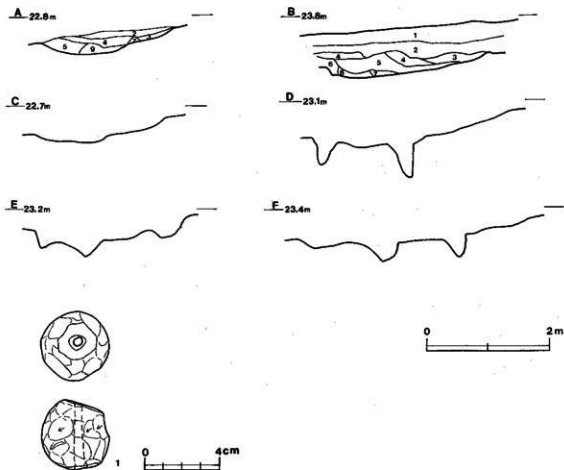
規模と平面形 上幅90~260cm, 下幅50~140cm, 深さ10~28cm, 断面形は, 緩やかなU字状を呈している。
 方向 (N-88. -E) ほぼ東西に直線的に延び, 長さは, 18.1mを確認したが, さらに調査区域外に続く。
 覆土 9層からなる自然堆積である。

土層解説

- | | | | |
|-------|---------------------------|-------|--------------------|
| 1 黒褐色 | ローム粒子微量 | 6 褐色 | ローム粒子中量 |
| 2 黒褐色 | ローム粒子少量 | 7 褐色 | 黒色土粒子少量 |
| 3 暗褐色 | ローム粒子少量 | 8 暗褐色 | ローム粒子中量 |
| 4 暗褐色 | ローム粒子少量, ローム中・小ブロック・炭化物微量 | 9 黒褐色 | ローム中・小ブロック・ローム粒子微量 |
| 5 暗褐色 | ローム粒子少量, ローム小ブロック微量 | | |

遺物 土師器甕片1点や鉄製品1点が, 中央部覆土中から出土している。第67図1の土玉は西部覆土上層から出土している。

所見 本跡は, 片側が2段掘り込みしてあることと, 南部底面からピットが多数確認されていることが特徴的である。時期は, 出土遺物も少なく時期・性格は不明である。



第67図 第1号溝土層断面図・出土遺物実測図

第1号溝出土遺物観察表

図版番号	器種	計 測 値					出土地点	備 考
		長さ(cm)	幅 (cm)	高さ (cm)	孔径 (cm)	重量 (g)		
第67図	土 玉	径	3.6		3.7	0.5	45.9	覆土上層 DP19 PL18

5 旧石器集中地点

当遺跡における旧石器時代の遺物は、3か所の集中地点から出土している。いずれも基本層序の第2層・第3層からの出土である。3か所の集中地点と、その付近から出土した石器総数は25点程である。石器の内訳は、ナイフ形石器2点、スクレイパー1点、ノッチ1点、剥片20点、石核1点である。以下、検出された石器集中地点と、そこから出土した主な遺物について記載する。

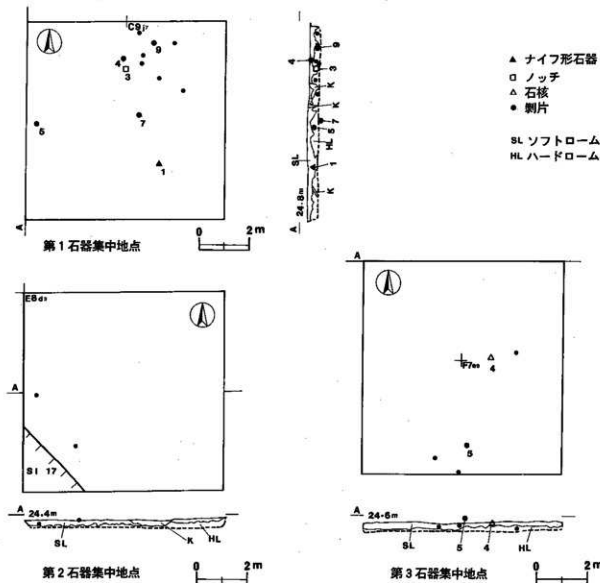
第1号石器集中地点 (第68・69図)

位置 C9j。区からD9a7区。特に、遺物の密集する地点は東部である。

規模 東西約2.5m、南北約4mの不整形の範囲に集中して出土している。

確認土層 基本層序の第2層から第3層。

遺物 剥片類を主体として、ナイフ形石器1点、ノッチ1点、剥片10点が出土している。なお、その周辺からもスクレイパー1点と剥片2点が出土している。



第68図 第1～3号石器集中地点遺物出土状況図

第2号石器集中地点（第68・70区）

位置 E 8 e₃ 区。

規模 東西約2m, 南北約2.20mの範囲。

確認土層 基本層序の第2層。

遺物 剥片2点が出土している。なお、その周辺からもナイフ形石器1点と剥片2点が出土している。

第3号石器集中地点（第68・70区）

位置 F 7 e₃ 区からF 7 f₃ 区。

規模 東西約2m南北約5.00mの範囲。

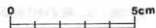
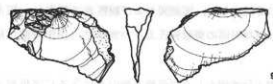
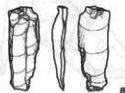
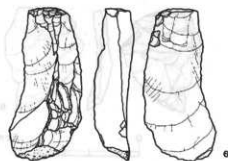
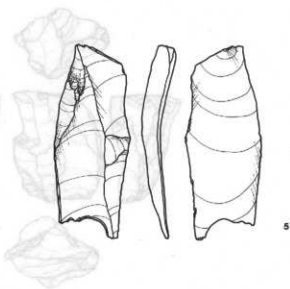
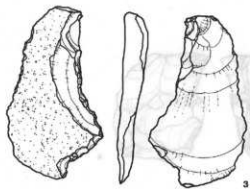
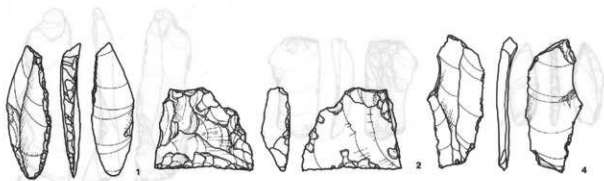
確認土層 基本層序の第2層から第3層。

遺物 石核1点, 剥片4点が出土している。なお、その周辺からも剥片1点が出土している。

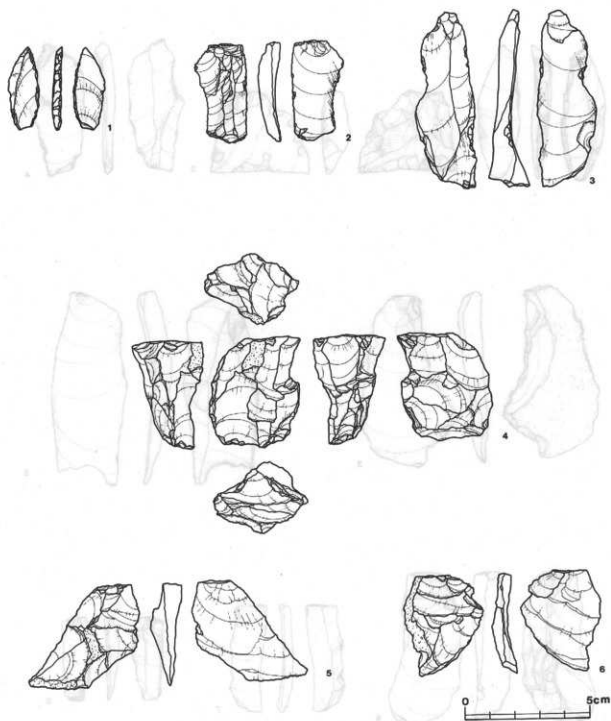
所見 第1号・第2号・第3号石器集中地点からは, 大形剥片やツールの出土が見られるが, 出土石器の総数が少ない。特に, チップ類の出土が少ないことや, ハンマー, 母岩が出土していないことから, 石器製作の場と言うより短期間の生活跡と考えられる。時期は, 石器組成や出土層位から, 後期旧石器時代と考えられる。

旧石器出土遺物観察表

図版番号	種別	計測値				材質	出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
第69図1	ナイフ形石器	5.3	1.7	0.7	6.7	硬質頁岩	石器集中地点	Q32 P L19
第69図2	スクレイパー	3.3	3.9	1.1	13.0	黒曜岩	1区表採	Q33 P L19
第69図3	ノッチ	6.9	3.9	0.9	17.7	黒色頁岩	石器集中地点	Q34 P L19
第69図4	縦長剥片	5.3	2.2	0.5	5.6	硬質頁岩	石器集中地点	Q35 P L19
第69図5	縦長剥片	7.7	3.0	0.7	16.8	硬質頁岩	石器集中地点	Q39 P L19
第69図6	縦長剥片	6.1	2.9	1.4	22.0	流紋岩	2区Eトレンチ	Q36 P L19
第69図7	縦長剥片	4.2	1.3	0.4	2.8	硬質頁岩	石器集中地点	Q40 P L19
第69図8	縦長剥片	3.3	1.2	0.5	2.5	赤玉石	S I - 4 覆土	Q42 P L19
第69図9	横長剥片	3.0	4.3	1.1	6.6	黒色頁岩	石器集中地点	Q43 P L19
第70図1	ナイフ形石器	3.3	1.2	0.3	1.4	頁岩	4区表土中	Q31 P L19
第70図2	縦長剥片	3.9	2.0	0.7	5.5	縦長頁岩	4区表土中	Q37 P L19
第70図3	縦長剥片	7.0	2.3	1.7	13.6	頁岩	4区表土中	Q38 P L19
第70図4	石核	4.3	3.5	2.8	39.1	流紋岩	石器集中地点	Q41 P L19
第70図5	横長剥片	4.1	4.3	1.0	10.5	頁岩	石器集中地点	Q44 P L19
第70図6	剥片	4.0	3.1	0.6	7.5	流紋岩	4区表土中	Q45 P L19



第69图 第1石器集中地点出土遗物实测图

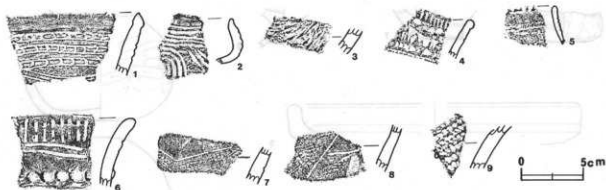


第70図 第2・3号石器集中地点出土遺物実測図

6 遺構外出土遺物

本項では、遺構外から出土した遺物のうち特徴のあるものを抽出して、実測図および観察表で報告し、拓本土器については説明を加えて解説する。なお、72図1の坩は阿見町埴の栗原昇氏よりの寄贈で、10年程前に屋台遺跡の3区より出土したとのことである。

第71図1は、縄文時代前期後葉に位置付けられる土器群で平行沈線もしくは弧線と押し引きによるC字爪形文が施されている。2は平行沈線文、渦巻文が施されている。3は条線文が施されている。4は口縁部に条線文が、口辺部に三角刺突文が施され、波状口縁と思われる。5は口縁に刺突文、口辺部にC字爪形文、貝殻腹縁



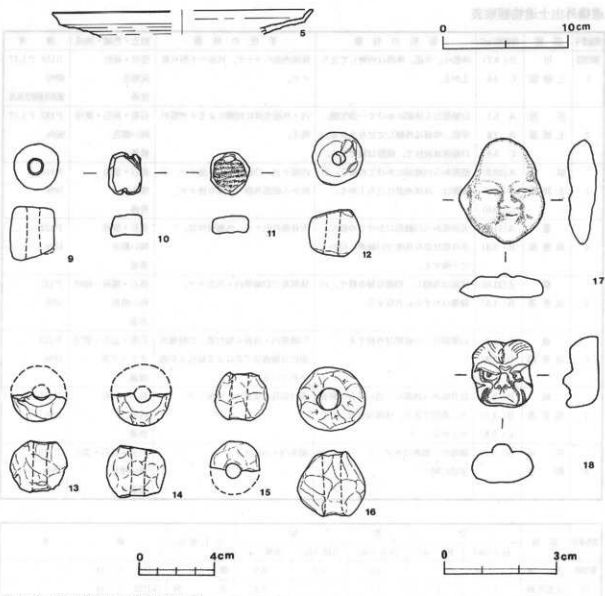
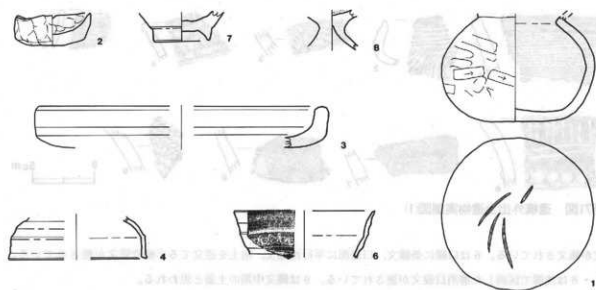
第71図 遺構外出土遺物実測図(1)

文が施文されている。6は口縁に条線文、口辺部に平行沈線文、粘土を逆立てる半篋竹管文が施されている。7・8は沈線で区画した磨消貝殻文が施されている。9は縄文中期の土器と思われる。

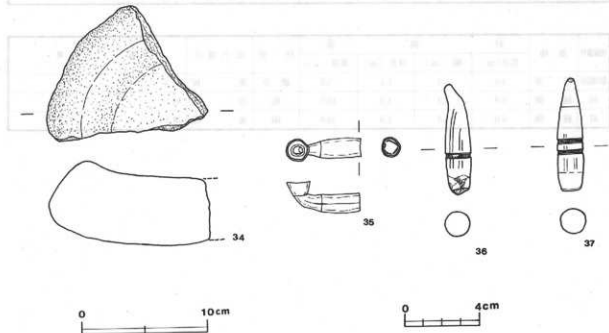
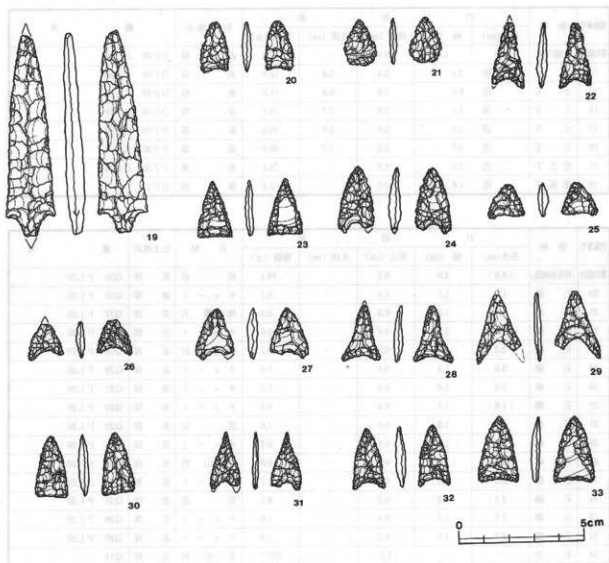
遺構外出土遺物観察表

図番	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第72図	埴	B(8.7)	体部片。平底。体部は内彎して立ち上がる。	体部内面ヘラナデ、外面ヘラ削り後ナデ。	雲母・砂粒 灰褐色 普通	P118 P.L17 60%
	土師器	C(4.5)				
2	手捏	A(6.1)	口縁部から体部にかけて一部欠損。平底。体部は外彎して立ち上がる。口縁部は波状で、成形は轆である。	内・外面全体に指頭によるナデ筋が残る。	石英・長石・雲母 純い褐色 普通	P123 P.L17 90%
	土師器	B(2.6)				
	土師器	C(5.6)				
3	焙焼	A(23.0)	底部から口縁部にかけての破片。口縁部は、ほぼ垂直に立ち上がる。	内面ナデ。口縁部上位外面ナデ、下位から底部外面ヘラ削り後ナデ。	長石・雲母 褐色 普通	P116 10%
	土師器	B(2.2)				
	土師器	C(20.0)				
4	甕	A(11.0)	天井部から口縁部にかけての破片。天井部は急な角度で口縁部に向かって下降する。	天井部内面ナデ、外面輪付着。	長石・雲母 純い褐色 普通	P122 10%
	須恵器	B(3.3)				
5	鍋	A(21.0)	体部は外傾し、明確な腰を経て、口縁部はわずかに外反する。	体部及び口縁部内・外面ナデ。	長石・雲母・砂粒 純い褐色 普通	P121 10%
	須恵器	B(1.5)				
6	罎	A(11.3)	口縁部片。口縁部は外傾する。	口縁部内・外面に輪付着。口縁部外面には轆歯状工具による波状文が施されている。	石英・長石・雲母 オリーブ黒 普通	P120 10%
	須恵器	B(3.8)				
7	甕	B(2.4)	高台部から体部片。低い高台は断面が三角形である。体部は内彎して立ち上がる。	高台部及び底部内・外面ナデ。	長石・砂粒 灰色 普通	P117 10%
	須恵器	D(4.1)				
	須恵器	E(0.8)				
8	高坏 陶器	B(3.1)	胴部片。胴部は外反して、「ハ」の字状に開く。	胴部内・外面ナデ。	石英・長石・雲母 純い褐色 普通	P119 25%

図番	器種	計測値					出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	高さ(cm)	孔径	重量(g)		
第72図	土師	径	2.3	3.0	0.9	16.9	覆土中	DP21 P.L18
10	土器片	径	2.3	1.7	1.0	4.9	表	径 DP22 P.L18



第72図 遺構外出土遺物実測図(2)



第73图 遺構外出土遺物実測図(3)

図版番号	器種	計測値				出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	高さ(cm)	孔径(cm)		
第7図11	土製円板	2.3	2.1	0.9	-	5.0	表 採 DP25 PL18
12	土玉	径 2.4		2.4	0.8	16.6	表 採 DP20 PL18
13	土玉	径 3.0		2.8	0.8	11.3	表 採 DP23 PL18
14	土玉	径 3.1		2.8	0.7	14.7	表 採 DP28 PL18
15	土玉	径 2.7		2.6	0.8	10.9	表 採 DP24 PL18
16	土玉	径 3.7		3.5	1.3	36.4	表 採 DP26 PL18
17	泥面子	径 2.8		0.8	-	3.2	表 採 DP30 PL18
18	泥面子	径 1.8		0.9	-	2.3	表 採 DP31

図版番号	器種	計測値					石材	出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	孔径(cm)	重量(g)			
第7図19	有舌尖環	(8.9)	2.0	0.7	-	10.1	頁岩	表 採 Q30 PL20	
20	石鏃	1.9	1.1	0.4	-	0.7	チャート	表 採 Q16 PL20	
21	石鏃	1.8	1.3	0.3	-	0.5	黒曜石	表 採 Q17 PL20	
22	石鏃	[2.9]	1.2	0.4	-	1.0	チャート	表 採 Q18 PL20	
23	石鏃	2.3	1.4	0.3	-	0.7	硬質頁岩	表 採 Q19 PL20	
24	石鏃	2.6	1.4	0.5	-	1.5	チャート	表 採 Q20 PL20	
25	石鏃	1.3	1.4	0.4	-	0.7	チャート	表 採 Q21 PL20	
26	石鏃	(1.8)	1.4	0.4	-	0.5	チャート	表 採 Q22 PL20	
27	石鏃	2.0	1.5	0.4	-	1.0	頁岩	表 採 Q23 PL20	
28	石鏃	[2.4]	1.6	0.4	-	0.7	チャート	表 採 Q24 PL20	
29	石鏃	(3.0)	(1.9)	0.3	-	0.8	安山岩	表 採 Q25 PL20	
30	石鏃	2.5	1.3	0.4	-	1.1	チャート	表 採 Q26 PL20	
31	石鏃	[2.4]	[1.2]	0.2	-	0.4	頁岩	表 採 Q27 PL20	
32	石鏃	2.5	1.3	0.4	-	1.0	チャート	表 採 Q28 PL20	
33	石鏃	2.7	1.6	0.3	-	1.3	チャート	表 採 Q29 PL20	
34	石皿	-	-	(5.0)	-	857.7	安山岩	表 採 Q14	

図版番号	器種	計測値				材質	出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
第7図25	煙管	4.0	1.2	1.1	5.0	鍍金	表 採 M3	
36	銃弾	5.9	1.3	1.3	43.5	銅	表 採 M1	
37	銃弾	6.0	1.3	1.3	39.9	銅	表 採 M4	

第4節 第5号住居跡出土炭化材の樹種

1 はじめに

星合遺跡の5号住居跡（古墳時代後期）からは、住居構築材と考えられる炭化材が出土している。茨城県では、これまでも多くの遺跡で、古墳時代の焼失家屋から出土した住居構築材の樹種同定を行っている（未公表資料）。その結果、沿海地ではアカガシ亜属などの暖温帯常緑広葉樹林（いわゆる照葉樹林）の構成種が多く、内陸ではクスギ節・コナラ節などの落葉広葉樹が多くなることが指摘されている。その境界に関する詳細は明らかではないが、本地域周辺で行われた調査では、落葉広葉樹が比較的多い。

本報告では、住居構築材と考えられる炭化材の樹種を明らかにし、既存資料と比較しながら用材選択の傾向などについて考察する。

2 試料

試料は、5号住居跡（SI-5）から出土した炭化材4点（試料番号(i)~(iv)）である。各試料の詳細は、樹種同定結果と共に表に記した。

3 方法

木口（断面図）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の3断面の割断面を作製し、実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて木材組織の特徴を観察し、種類を同定する。

4 結果

炭化材は全てコナラ属コナラ亜属クスギ節に同定された（表）。解剖学的特徴などを以下に記す。

・コナラ属コナラ亜属クスギ節（*Quercus* subgen. *Lepidobalanus* sect. *Cerris* プナ科）

環孔材で孔圈部は1~3列、孔圈外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら放射状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1~20細胞高のものと複合放射組織とがある。柔組織は周囲状および短接線状。柔細胞はしばしば結晶を含む。

表 炭化材の樹種同定結果

時代・時期	試料番号	用途など	樹種
古墳時代後期	(i)	住居構築材（楕木?）	コナラ属コナラ亜属クスギ節
	(ii)	住居構築材（楕木?）	コナラ属コナラ亜属クスギ節
	(iii)	住居構築材（楕木?）	コナラ属コナラ亜属クスギ節
	(iv)	住居構築材（楕木?）	コナラ属コナラ亜属クスギ節

5 考察

住居構築材と考えられる炭化材は全てクスギ節であった。本地域周辺では、つくば市内や牛久市内の各遺跡で確認された古墳時代の住居構築材について樹種同定が行われている（未公表資料）。それらの結果では、いずれもクスギ節が多い結果が得られており、今回の結果とも調和的である。このことを考慮すれば、今回の第5号住居跡の住居構築材もクスギ節を主とする種類構成であったことが推定される。

茨城県内では、沿海地で常緑広葉樹のアカガシ亜属等が住居構築材に多い結果が得られており、沿海地と内

陸の植生の違いを反映していることが指摘されている(高橋・植木, 1994)。どの付近を境界に、常緑広葉樹を主とする植生から落葉広葉樹を主とする植生に変化していくのか、現段階で詳細は不明である。しかし、これまでの調査結果から、少なくとも霞ヶ浦西岸地域では落葉広葉樹を主とする植生であったと考えられる。今後、さらに県内各地で調査事例を増やし、用材選択と植生の関係について明らかにしたい。

〈引用文献〉

高橋 敦・植木 真吾(1994) 樹種同定からみた住居構築材の用材選択. PALYNO, 2, p.5-18

第5節 まとめ

当遺跡から検出された遺構は、旧石器集中地点3か所、縄文時代中期の竪穴住居跡1軒、古墳時代前期の竪穴住居跡3軒、後期の竪穴住居跡16軒、平安時代の竪穴住居跡3軒、その他、溝1条、炉穴1基、土坑62基である。ここでは、各時代の特徴的な遺構および遺物について説明を加えまとめたい。

1 旧石器集中地点

当遺跡では、石器集中地点が3か所検出されている。出土した石器の数は多くはないが、材質は頁岩類が中心である。ナイフ形石器・大形剥片等出土しているが、数が少ないことから短期間の生活跡と考えることができる。時期は、ソフトローム層の下層からハードローム層の上層に、集中して出土していることから後期旧石器時代と思われる。

2 縄文時代

縄文時代の住居跡は1軒のみ検出され、出土遺物から縄文時代中期のものと思われる。縄文土器片は、縄文時代前期から中期にかけてものが少量であるが出土している。また、遺跡の表土中から、多くの石鏃が出土している。その様子から推察すると、住居を構える場所というよりもキャンプサイトの性格をもった地区の可能性があるように思われる。

3 古墳時代

当遺跡の主になる時代であり、住居跡は19軒検出されている。前期3軒、後期16軒にわけることができる。ここでは、山土土器や住居形態などをもとに各時代の特徴について整理したい。

◎前期-第2・20・23号住居跡。

主軸方向がほぼ同じであり、地床が持っている。床面直上の遺物、住居の形状(隅丸方形・長方形)から4世紀後半の住居であると思われる。第2・20号住居跡の覆土上層からは、古墳時代後期初頭の手掘土器が出土しており、また、破砕された須恵器等が集中して出土している。その様子から、住居が埋没する段階での窪地を利用した祭祀跡の可能性が考えられる。

◎後期-第1・3~5・7~9・12~19・22号住居跡。

ここでは、特に初期竈の構築方法と付設位置の違いを中心にⅢ期に分類してみた。

[Ⅰ期] 東壁東コーナー寄りに付設されている。(東竈)

- ・第1・3・4・5・7・22号住居跡であり、竈の右側に貯蔵穴が付設されている。
- ・山砂と粘土で構築され、ローム土の埋め戻しによって壁に付設されているタイプで、比較的簡単な

作りなので古手と思われる。

- ・壁と竈の間は、ローム土の埋め戻しによって充填されている。煙道部は、住居内にある。

【Ⅱ期】 南西壁南コーナー寄りに付設されている。(西竈)

- ・第15・16・17・19号住居跡であり、竈の左側に貯蔵穴が付設されている。
- ・煙道部の掘り方の一部に、山砂と粘土を張り込んだタイプで、構築の仕方からしてもⅠ期より新しいと思われる。
- ・煙道部の掘り方の一部を壁外に若干掘り込み、その部分に山砂と粘土を貼り込み、熱に対する補強が施されている。煙道部は住居内である。

【Ⅲ期】 北西壁中央部に付設されている。(北竈)

- ・第9・第13号住居跡である。
- ・煙道部がやや外に出るタイプで、一番新しいと思われる。
- ・煙道部を壁外に掘り込み、山砂と粘土で構築されている。煙道部は若干住居外である。

特に、第13号住居跡においては、Ⅱ期からⅢ期の作り替えが確認されている。

以上のことからⅠ→Ⅲ期の順で新しくなると思われ、煙道部が住居外に出るタイプ程、新しいと思われる。竈を持つ住居跡の他にも、炉を持ち比較的小形の住居跡である第12・14・18号と、炉も持たない倉庫的役割と思われる小形の第8号住居跡が検出されている。つまり、竈を持つ住居と炉を持つ住居が同時期に存在していたことが確認されている。

検出状況の全般的特徴は、(1)土器細片が多かったこと、(2)焼土塊があり焼失家屋と思われる住居が比較的多かったこと、(3)主軸方向で、ある程度の時期分類ができたことの3点である。また、焼失家屋と思われる第5号住居跡の建築材は、クヌギ節と考えられる分析結果が得られている。(第3章第4節参照)

4 平安時代

住居跡3軒、土坑3基が検出されている。第6・10号住居跡は、主軸方向がほぼ同じであり位置も近くである。どちらの住居跡も、出土遺物・立地・形状から平安時代の同時期と考えられる。また、台地縁辺部に立地していたことから、集落の本体は斜面から低地にあるものと思われる。第21号住居跡は、南西壁中央に竈を持ち、第6・10号住居跡とは形状が異なり離れているが、出土遺物からはほぼ同時期と思われる。

土壌炭と思われる第36・37号土坑からは、当時としては貴重な遺物である灰陶器が出土している。火葬墓と思われる第45号土坑から出土した蔵骨器は、遺物の覧に示したように、須恵器甕に須恵器蓋を逆位で内蓋とし、さらに須恵器甕を逆位にして外蓋としている。今後、他の類別との検証を重ね検討を加えていきたい資料である。

参考文献

- 茨城県教育財団「一般国道6号東水戸道路改良工事地内埋蔵文化財調査報告書Ⅱ 概内遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告第100集』1995年9月
- 茨城県教育財団「牛久北部特定土地地区面整理事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅳ 馬場遺跡 行人田遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告第106集』1996年3月

第4章 中ノ台遺跡

第1節 遺跡の概要

中ノ台遺跡は、阿見町南東部に位置し、阿見一区から南西方向に流れる清明川右岸の標高23~25mの舌状台地上に立地している。遺跡の現況は畑及び山林で、調査面積は7,685㎡である。

今回の調査によって、縄文時代の竪穴住居跡5軒、平安時代の竪穴住居跡2軒及び縄文時代の陥し穴や時期不明を含め土坑37基を検出した。遺物は、縄文時代の土器及び石鏃、平安時代の土師器（高台付坏、甕）、須恵器（甕）、金属製品（刀子）などが出土している。

以上のことから、当遺跡は縄文時代及び平安時代の集落跡及び生活跡であることが判明した。

第2節 基本層序

調査区内（C2i区）にテストピットを設定し、第4図に示すような土層の堆積状況を確認した。

なお、耕作のためにソフトローム層は削られていた。また、表土は除去してある。以下の各層は台地上で一般的に見られるロームに比して、黒味を帯びて粘性が強く、水に浸っていたように見える状況である。

第1層は、15~20cmの厚さで、火山ガラス粒子を比較的多く含み、2層に比べて明るい褐色のハードローム層である。下総台地のVI層に対比できるものと思われる。

なお、遺構は第1層上面で確認した。

第2層は、22~35cmの厚さで、褐色のハードローム層である。

第3層は、25~40cmの厚さで、暗褐色のハードローム層である。第1層、第2層及び第3層は立川ローム層に相当するものと考えられる。

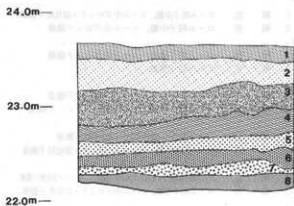
第4層は、15~30cmの厚さで、褐色のハードローム層である。

第5層は、10~20cmの厚さで、褐色のハードローム層である。第4層及び第5層は武蔵野ローム層に相当するものと考えられる。

第6層は、10~25cmの厚さで、明褐色のハードローム層である。箱根-東京バミスに相当するものと考えられる。

第7層は、5~15cmの厚さで、灰褐色の常総粘土層への漸移層である

第8層は、10~20cmの厚さで、灰褐色の常総粘土層である。



第74図 中ノ台遺跡基本土層図

第3節 遺構と遺物

1 竪穴住居跡

今回の調査では、縄文時代及び平安時代の住居跡を7軒検出した。以下、検出された竪穴住居跡の特徴と、そこから出土した主な遺物について記載する。

(1) 縄文時代の住居跡

第1号住居跡 (第76図)

位置 調査区中央部, B2f, 区。

規模と平面形 床面下まで削平されているため不明であるが、焼土の広がりとそれを取り囲む柱穴列の配置から、径(5.80)m前後の円形と推定される。

主軸方向 不明である。

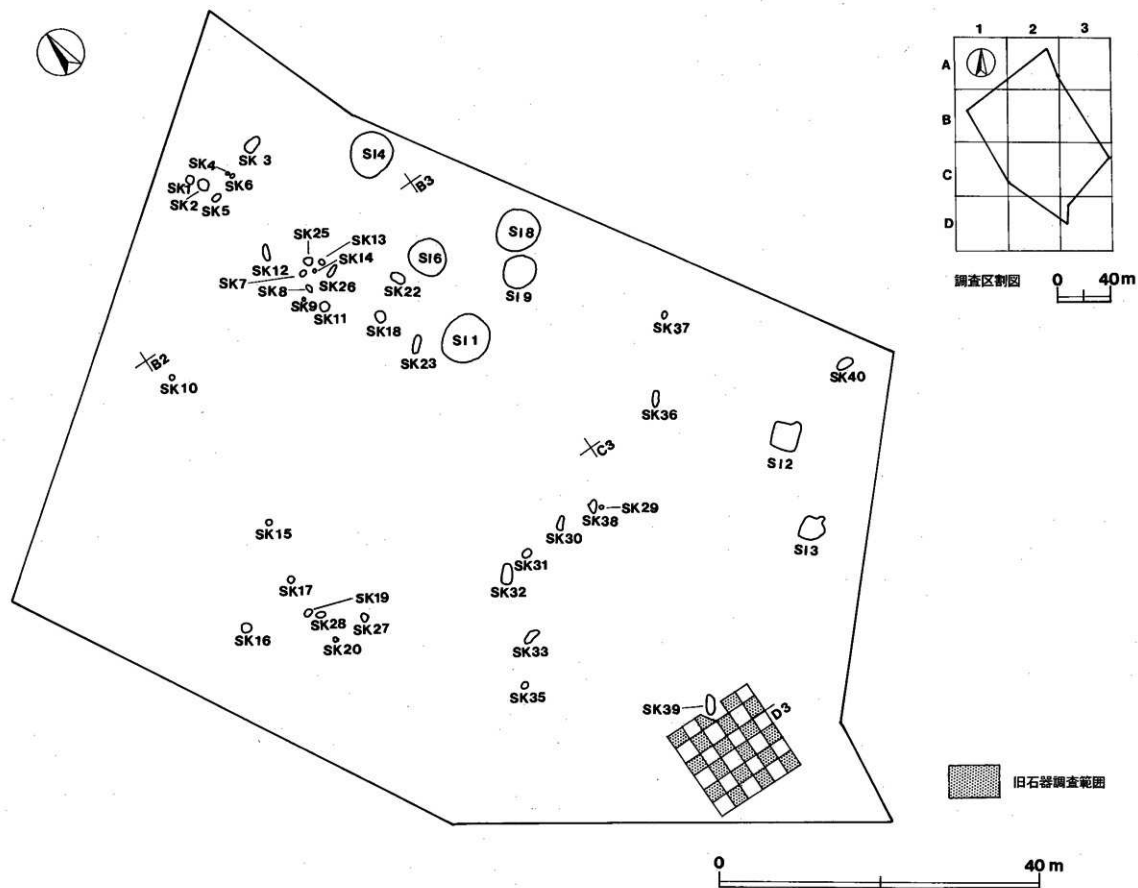
壁 残っていない。

床 削平されていて、残っていない。

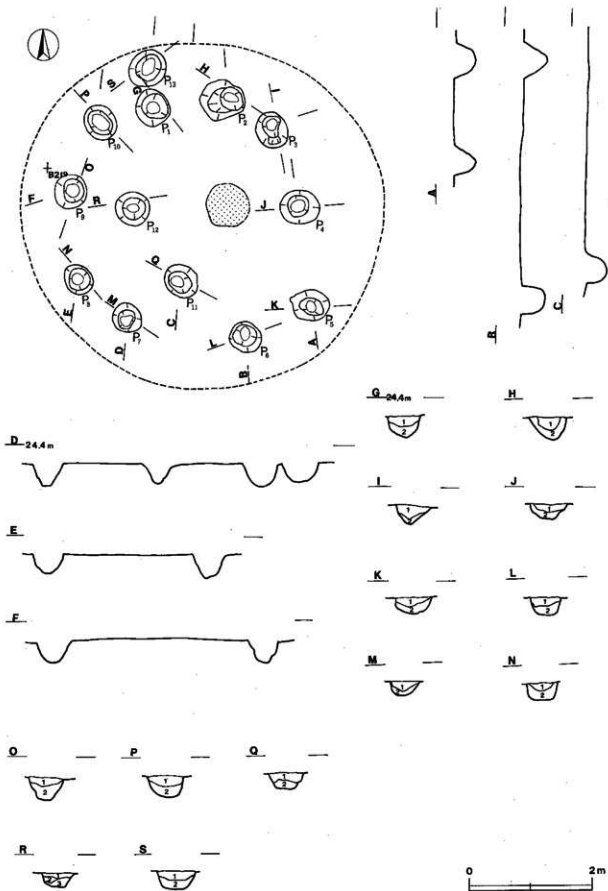
ピット 13か所 ($P_1 \sim P_{13}$)。 $P_1 \sim P_{10}$ は径45~65cmの円形で、深さ35~40cmの主柱穴と思われる。 $P_{11} \sim P_{13}$ は径50~60cmの円形で、深さ22~30cmの補助柱穴と考えられる。

ピット土層解説

P_1	1	褐色	ローム粒子少量, ローム小ブロック・炭化粒子微量	P_4	1	褐色	ローム粒子中量, ローム小ブロック・焼土小ブロック・炭化粒子微量
	2	褐色	ローム粒子中量, ローム小ブロック微量		2	褐色	ローム粒子少量, ローム小ブロック・炭化粒子微量
P_2				P_5			
	1	褐色	ローム粒子中量, ローム小ブロック微量		1	褐色	ローム粒子少量, 焼土小ブロック・焼土粒子・炭化粒子微量
	2	褐色	ローム粒子微量		2	褐色	ローム粒子少量, ローム小ブロック微量
P_3				P_6			
	1	褐色	ローム粒子中量, 炭化物・炭化粒子微量		1	褐色	ローム粒子中量, ローム小ブロック・焼土小ブロック・炭化粒子微量
	2	暗褐色	ローム粒子少量, ローム中・小ブロック微量		2	褐色	ローム小ブロック微量
P_4				P_7			
	1	褐色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量		1	褐色	ローム粒子中量, ローム小ブロック・炭化粒子微量
	2	褐色	ローム粒子中量, ローム小ブロック・炭化粒子微量		2	褐色	ローム粒子少量, ローム小ブロック・炭化粒子微量
P_5				P_8			
	1	褐色	ローム粒子少量, ローム小ブロック・焼土小ブロック・炭化粒子微量		1	褐色	ローム粒子少量, ローム小ブロック・焼土小ブロック微量
	2	褐色	ローム粒子少量, ローム小ブロック・炭化粒子微量		2	褐色	ローム粒子中量, ローム小ブロック・炭化粒子微量
P_6					3	褐色	ローム粒子少量, 炭化物微量
	1	褐色	ローム粒子中量, ローム小ブロック・焼土小ブロック・炭化粒子微量	P_9			
	2	褐色	ローム粒子少量, 炭化粒子微量		1	褐色	ローム粒子少量, ローム小ブロック・焼土小ブロック・炭化物微量
P_7					2	褐色	ローム粒子少量, ローム小ブロック・炭化粒子微量
	1	褐色	ローム粒子少量, ローム小ブロック・焼土小ブロック・炭化物微量				
	2	暗褐色	ローム粒子少量, 焼土粒子・炭化粒子微量				



第75図 中ノ台遺跡遺構全体図



第76图 第1号住居跡実測図

炉 中央部やや北東寄りに位置している。耕作のために削平され、炉の底部が残る。焼土が径約70cmの円形に薄く広がる。火床部の掘り込みは確認できない。火熱によるロームの赤変硬化は弱い。

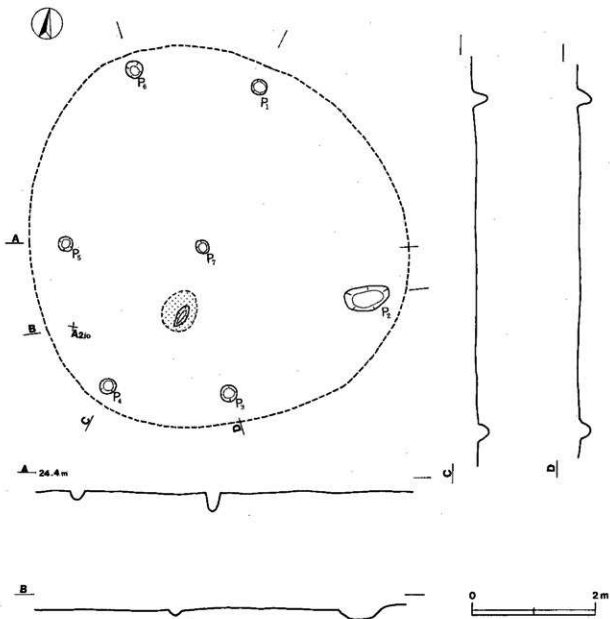
覆土 残っていない。

遺物 出土していない。

所見 本跡は、遺物が出土していないため時期は明確でないが、規模や形状及び周囲から縄文土器が出土していることなどから、縄文時代の住居跡と思われる。

第4号住居跡（第77図）

位置 調査区北部，A2i。区。



第77図 第4号住居跡実測図

規模と平面形 床面下まで削平されているため不明であるが、焼土の広がりとそれを取り囲む柱穴列の配置から、径〔6.20〕m前後の円形と推定される。

主軸方向 不明である。

壁 残っていない。

床 削平されていて、残っていない。

ピット 7か所（ $P_1 \sim P_7$ ）。 P_1 及び $P_2 \sim P_6$ は径25~35cmの円形で、深さ20~25cm。 P_7 は長径75cm、短径40cmの楕円形で、深さ21cm。 P_7 は中央部に位置し、径25cmの円形で、深さ35cm。いずれも、その規模や配置から、主柱穴と考えられる。

炉 中央部南寄りに位置している。長径約70cm、短径約55cmの楕円形に焼土が薄く広がり、中央部が深さ10cmほど掘り込まれている。火熱によるロームの赤変硬化は弱い。

覆土 残っていない。

遺物 出土していない。

所見 本跡は、遺物が出土していないため時期は明確でないが、規模や形状及び周囲から縄文土器が出土していることなどから、縄文時代の住居跡と思われる。

第6号住居跡（第78図）

位置 調査区北部、B2c区。

規模と平面形 床面下まで削平されているため不明であるが、焼土の広がりとそれを取り囲む柱穴列の配置から、径〔5.00〕m前後の円形と推定される。

主軸方向 不明である。

壁 残っていない。

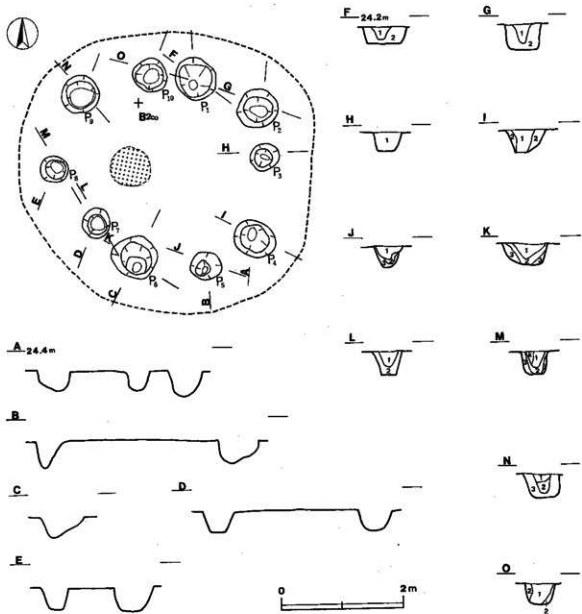
床 削平されていて、残っていない。

ピット 10か所（ $P_1 \sim P_{10}$ ）。 P_1 、 P_2 、 P_3 、 P_4 、 P_5 、 P_6 は径45~70cmの円形で、深さ25~30cmの主柱穴と思われる。 P_7 、 P_8 、 P_9 、 P_{10} は径約45cmの円形で、深さ30~40cmの補助柱穴と考えられる。

ピット土層解説

P_1		
1	暗褐色	ローム粒子多量、ローム大ブロック少量
2	暗褐色	ローム粒子多量、ローム小ブロック少量
P_2		
1	暗褐色	ローム粒子中量、ローム中ブロック微量
2	暗褐色	ローム粒子中量、ローム大・小ブロック少量
P_3		
1	暗褐色	ローム粒子中量、ローム大ブロック少量
P_4		
1	褐色	ローム粒子中量、ローム小ブロック少量
2	暗褐色	ローム粒子中量、ローム小ブロック少量、ローム大ブロック少量
P_5		
1	褐色	ローム粒子中量、ローム中ブロック少量
2	暗褐色	ローム粒子中量、ローム中ブロック微量
3	暗褐色	ローム粒子中量
P_6		
1	褐色	ローム大・小ブロック少量
2	暗褐色	ローム粒子少量、焼土粒子微量
3	褐色	ローム粒子中量、ローム大ブロック少量

P_7		
1	褐色	ローム粒子中量、ローム小ブロック少量
2	暗褐色	ローム小ブロック・ローム粒子少量
P_8		
1	褐色	ローム粒子中量、ローム小ブロック少量
2	暗褐色	ローム粒子中量
3	暗褐色	ローム粒子中量、ローム大・中ブロック少量
P_9		
1	褐色	ローム粒子中量、ローム小ブロック少量
2	暗褐色	ローム粒子多量、ローム大・小ブロック少量



第78图 第6号住居跡実測图

炉 中央部やや西寄りに位置している。長径約70cm、短径約55cmの楕円形に焼土が薄く広がり、中央部が深さ10cmほど掘り込まれている。火熱によるロームの赤変硬化は弱い。

覆土 残っていない。

遺物 出土していない。

所見 本跡は、遺物が出土していないため時期は明確でないが、規模や形状及び周囲から縄文土器が出土していることなどから、縄文時代の住居跡と思われる。

第8号住居跡 (第79図)

位置 調査区東部、B3d区。

規模と平面形 床面下まで削平されているため不明であるが、焼土の広がりとそれを取り囲む柱穴列の配置から、径〔5.80〕m前後の円形と推定される。

主軸方向 不明である。

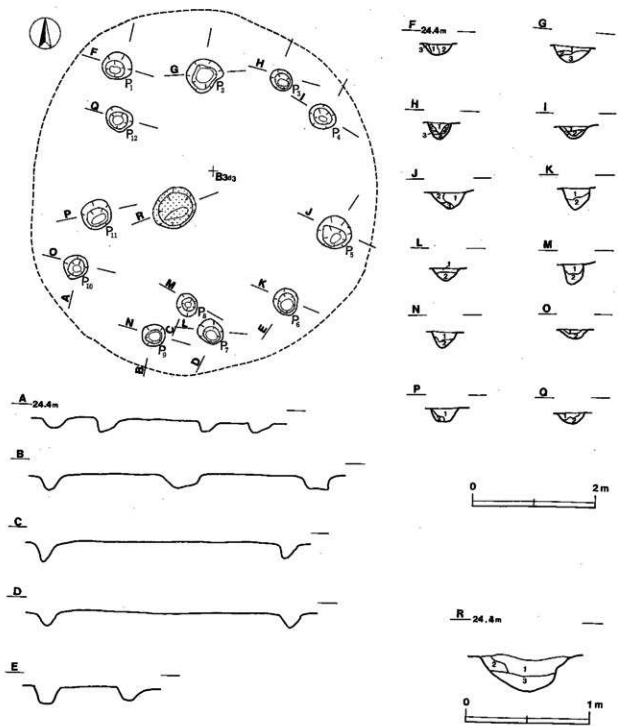
壁 残っていない。

床 削平されていて、残っていない。

ピット 12か所 (P₁～P₁₂)。P₁、P₄、P₅、P₆、P₈、P₉、P₁₁は径30～55cmの円形で、深さ18～30cmの主柱穴と思われる。P₂、P₃、P₇、P₁₀は径約45cmの円形で、深さ約20cmの補助柱穴と考えられる。

ピット土層解説

P ₁		P ₂	
1 暗褐色	ローム粒子少量、焼土小ブロック・炭化粒子微量	1 褐色	ローム粒子中量、炭化粒子少量
2 褐色	ローム粒子中量、炭化粒子微量	2 褐色	ローム粒子中量、ローム大・中ブロック微量
3 褐色	ローム粒子中量、ローム中ブロック微量	P ₃	
P ₄		1 褐色	ローム小ブロック・ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量
1 黒褐色	ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量	2 褐色	ローム粒子中量、ローム小ブロック微量
2 暗褐色	ローム大ブロック・ローム粒子少量	P ₄	
3 褐色	ローム粒子少量	1 褐色	ローム粒子少量、ローム大ブロック・焼土小ブロック微量
P ₅		2 褐色	ローム粒子少量、ローム大・小ブロック微量
1 暗褐色	ローム粒子少量	P ₅	
2 褐色	ローム大ブロック・ローム粒子少量、炭化物微量	1 暗褐色	ローム粒子・焼土小ブロック・炭化物微量
3 暗褐色	ローム粒子少量	2 暗褐色	ローム粒子少量、ローム中・小ブロック微量
4 褐色	ローム粒子中量、炭化粒子微量	P ₆	
P ₆		1 暗褐色	ローム中ブロック、ローム小ブロック・炭化粒子微量
1 暗褐色	ローム粒子少量、焼土粒子微量	2 暗褐色	ローム中量、ローム大ブロック・ローム小ブロック・焼土小ブロック微量
2 暗褐色	ローム中ブロック・ローム粒子・炭化粒子微量	P ₇	
3 褐色	ローム粒子少量、焼土粒子微量	1 暗褐色	ローム小ブロック・ローム粒子少量、炭化粒子微量
P ₇		2 褐色	ローム粒子中量、ローム中・ローム小ブロック微量
1 暗褐色	ローム大・中ブロック微量	P ₈	
2 褐色	ローム粒子少量、ローム中ブロック微量	1 暗褐色	ローム中ブロック少量、焼土小ブロック・焼土小ブロック・炭化粒子微量
3 褐色	ローム粒子中量	2 褐色	ローム大ブロック・ローム粒子少量、炭化粒子微量
P ₈		3 褐色	ローム粒子中量、ローム大ブロック少量、炭化粒子微量
1 暗褐色	焼土粒子少量、ローム粒子少量、焼土小ブロック・炭化粒子微量		
2 暗褐色	ローム中ブロック・ローム小ブロック微量		



第79图 第8号住居跡実測図

炉 中央部やや西寄りに位置している。長径約70cm、短径約60cmの楕円形に焼土が薄く広がり、中央部が深さ25cmほど掘り込まれている。火熱によるロームの赤変硬化は弱い。

覆土 残っていない。

遺物 出土していない。

所見 本跡は、遺物が出土していないため時期は明確でないが、規模や形状及び周囲から縄文土器が出土していることなどから、縄文時代の住居跡と思われる。

第9号住居跡 (第80図)

位置 調査区東部、B3e区。

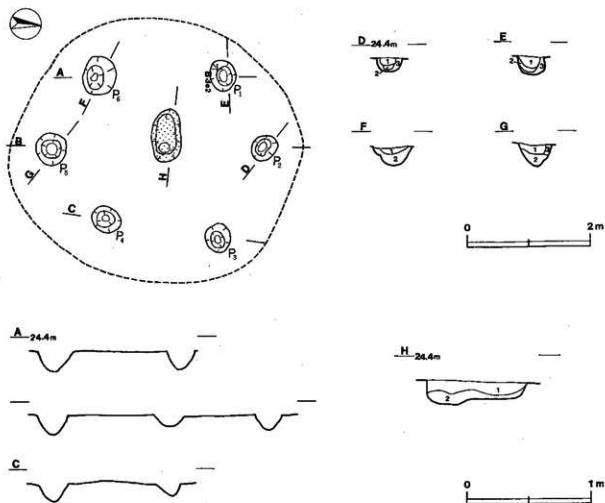
規模と平面形 床面下まで削平されているため不明であるが、炕土の広がりとそれを取り囲む柱穴列の配置から、径(4.60)m前後の円形と推定される。

主軸方向 不明である。

壁 残っていない。

床 削平されていて、残っていない。

ピット 6か所(P₁~P₆)。P₁~P₆は径50~70cmの円形で、深さ32~40cmの支柱穴と考えられる。



第80図 第9号住居跡実測図

ピット土層解説

P₁

1	灰褐色	ローム大ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子少量
2	褐色	ローム小ブロック・ローム粒子少量
3	褐色	ローム粒子多量、ローム大ブロック少量

P₂

1	灰褐色	ローム中ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子少量
2	褐色	ローム小ブロック・ローム粒子少量
3	褐色	ローム粒子多量、ローム大ブロック少量

P₃

1	暗褐色	ローム粒子中量、ローム大・中ブロック少量
2	暗褐色	ローム粒子中量、ローム大ブロック微量
3	褐色	ローム粒子多量、ローム大ブロック少量

P₄

1	褐色	ローム粒子中量、ローム大ブロック少量
2	褐色	ローム粒子中量、ローム中・小ブロック少量

伊 中央部に位置している。長径約70cm、短径約55cmの楕円形に焼土が薄く広がり、中央部が深さ20cmほど掘り込まれている。火熱によるロームの赤変硬化は弱い。

覆土 残っていない。

遺物 出土していない。

所見 本跡は、遺物が出土していないため時期は明確でないが、規模や形状及び周囲から縄文土器が出土していることなどから、縄文時代の住居跡と思われる。

(2) 平安時代の住居跡

第2号住居跡（第81図）

位置 調査区東部、C3d区。

規模と平面形 削平されていて明確でないが、長軸（3.50）m、短軸（3.30）mの隅丸方形と推定される。

主軸方向 N-49°-E

壁 壁高は5～20cm。崩落しているが、わずかに残る部分から、ほぼ垂直に立ち上がるものと思われる。

床 平坦である。遺物の出土状況や土層から床と判断した面は、軟らかくて明確な硬化面は確認できなかった。

ピット 1か所。P₁は、南西壁寄りに位置する。長径約30cm、短径約20cmの楕円形で、深さ15cmの出入り口施設に伴うピットと考えられる。

竈 東コーナー北寄りに、壁を奥行き50cm、幅70cmほど掘り込んで付設している。袖部は、ローム混じりの褐色の砂質土で構築しているが、上部は削平されて失われている。焚口部は床面から数cm高くなり、火床部は15cmほど掘り込まれている。火床部及び袖部内面に焼土は確認されるが、燃焼によるロームの赤変硬化は比較的弱い。煙道部は削平されていて確認できない。

覆土層解説

1	赤褐色	焼土大ブロック多量、焼土中ブロック・焼土粒子少量	5	鈍い赤褐色	ローム粒子中量、焼土小ブロック少量、炭化粒子微量
2	鈍い赤褐色	砂粒多量、焼土小ブロック・焼土粒子・炭化粒子少量	6	鈍い赤褐色	焼土中ブロック・焼土小ブロック少量、炭化粒子微量
3	鈍い赤褐色	焼土粒子・粘土小ブロック・砂粒少量	7	鈍い赤褐色	ローム粒子・山砂少量、焼土粒子微量
4	鈍い赤褐色	ローム粒子中量、焼土粒子少量			

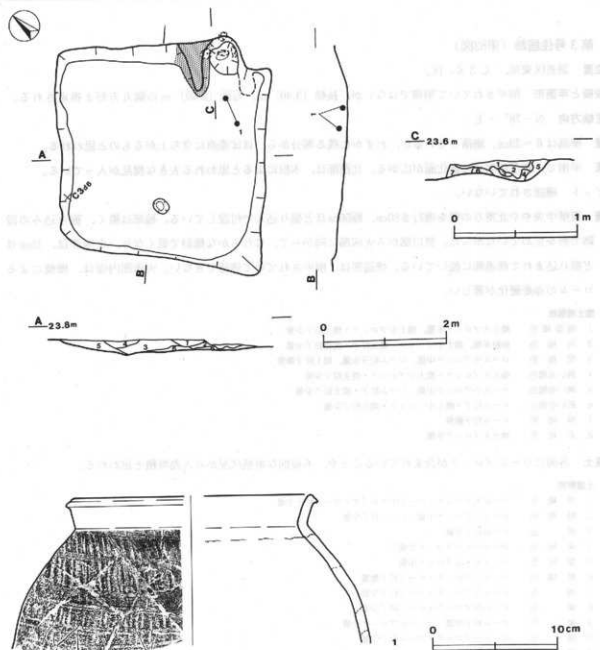
覆土 6層から成る。ロームブロックが多量に見られることから、人為堆積と思われる。

土層解説

1	黒色	ローム大ブロック・ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量	4	暗褐色	ローム粒子中量
2	黒褐色	ローム大ブロック中量、ローム粒子少量、焼土粒子微量	5	褐色	ローム大ブロック中量、焼土粒子・炭化粒子微量
3	暗褐色	ローム大・中・小ブロック少量	6	褐色	ローム粒子多量

遺物 土師器片10点及び流れ込んだと思われる縄文土器片14点が出土している。第81図1の土師器甕の口縁部から体部上位にかけての破片は、竈手前覆土下層から出土している。

所見 本跡は、出土遺物及び第3号住居跡と主軸線や規模が類似し、15mほどの間隔をおいて台地縁辺部に並んでいることなどから、第3号住居跡と時期的に大きな違いのない、平安時代の住居跡と考えられる。



第81図 第2号住居跡・出土遺物実測図

第2号住居跡出土遺物観察表

図録番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第2図	炊 須恵器	A (19.0) B (12.0)	体部から口縁部にかけての破片。体部は内彎し、頸部は「く」の字である。口縁部はわずかに外反し、端部はつまみ出されている。	口縁部内面ナデ、外面平行叩き後ナデ。頸部外面に横方向の強いナデ感。体部内面ナデ、外面平行叩き。	長石・スコリア 浅黄棕色 不良	P1 P L 25 10% 覆土

第3号住居跡 (第82図)

位置 調査区東部, C 3 8. 区。

規模と平面形 削平されていて明確ではないが、長軸 (3.40) m, 短軸 (2.60) m の隅丸方形と推定される。

主軸方向 N-78° - E

壁 壁高は6~29cm。崩落しているが、わずかに残る部分から、ほぼ垂直に立ち上がるものと思われる。

床 平坦で、竈手前部分に硬化面が広がる。北西部は、木根によると思われる大きな掘込みが入っている。

ピット 確認されていない。

竈 東壁中央やや北寄りの壁を奥行き80cm, 幅50cmほど掘り込んで付設している。袖部は脆く、掘り込みの段階で形を止めていなかった。焚口部から火床部に向かって、なだらかな傾斜で低くなり、火床部は、15cmほど掘り込まれて煙道部に続いている。煙道部は、削平されていて確認できない。火床部内面は、燃焼によるロームの赤変硬化が著しい。

産土層解説

- 1 暗赤褐色 焼土大ブロック多量、焼土中ブロック・焼土粒子少量
- 2 灰褐色 砂粒多量、焼土小ブロック・焼土粒子・炭化粒子少量
- 3 黒褐色 ローム小ブロック中量、ローム粒子少量、焼土粒子微量
- 4 鈍い赤褐色 焼土大ブロック・焼土小ブロック・焼土粒子少量
- 5 鈍い赤褐色 ローム小ブロック中量、ローム粒子・焼土粒子少量
- 6 鈍い赤褐色 ローム粒子・焼土小ブロック・焼土粒子少量
- 7 黒褐色 ローム粒子微量
- 8 赤褐色 焼土大ブロック多量

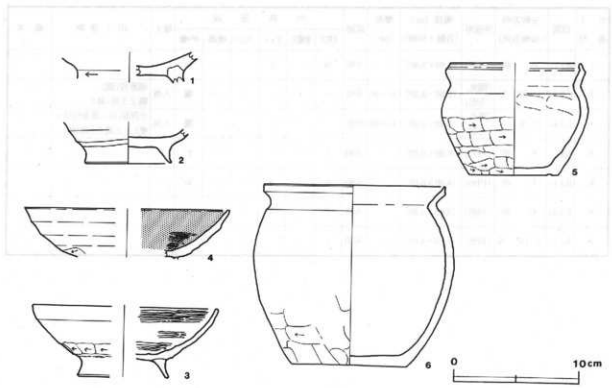
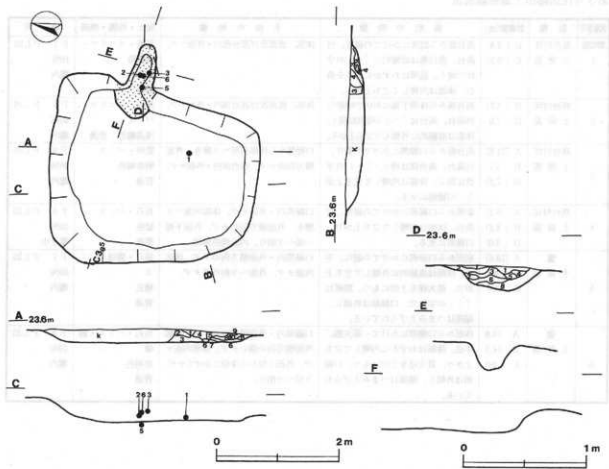
産土 各層にロームブロックが含まれていることや、不規則な堆積状況から人為堆積と思われる。

土層解説

- 1 黒褐色 ローム大ブロック・ローム中ブロック・ローム粒子少量
- 2 暗褐色 ローム小ブロック中量、ローム粒子少量
- 3 褐色 ローム粒子多量
- 4 黒褐色 ローム中・小ブロック少量
- 5 黒褐色 ローム大・小ブロック少量
- 6 黒褐色 ローム小ブロック・ローム粒子微量
- 7 褐色 ローム大ブロック・ローム粒子少量
- 8 褐色 ローム中ブロック・ローム粒子少量
- 9 褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック少量
- 10 褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量
- 11 褐色 ローム粒子少量

遺物 土師器片127点及び混入と考えられる縄文土器片26点が出土している。第129図1の土師器高台付坏は南東コーナー寄り覆土下層から、2及び3の土師器高台付坏、5の土師器小形甕及び6の土師器甕はいずれも竈内からの出土である。5の小形甕は竈火床部中央から逆位で出土しており、位置や二次焼成の状況から支脚に転用したものと考えられる。また、6の土師器甕は、正位で竈内の比較的高い位置から出土している。4の土師器高台付坏は覆土中からの出土である。

所見 本跡は、形状や出土した遺物から、平安時代(9世紀末~10世紀初)の住居跡と考えられる。



第82図 第3号住居跡・出土遺物実測図

第3号住居跡出土遺物観察表

図番	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	粘土・色調・焼成	備考
第3図	高台付坏土師器	B (2.0) E (0.6)	高台部から底部にかけての破片。付高台。高台部は直線的に「ハ」の字状に開く。底部はわずかに丸みを帯び、体部は内彎して立ち上がる。	体部、底部及び高台部内・外面ナデ。	石英・スコリア・黒炭母 褐色 普通	P 4 PL25 10% 窺内
2	高台付坏土師器	B (3.7) D 7.0	高台部から体部下端にかけての破片。付高台。高台は「ハ」の字状に開く。体部は直線的に外傾して立ち上がる。	体部、底部及び高台部内・外面ナデ。	長石・スコリア・パミス 赤褐色 普通	P 6 PL25 40% 窺内
3	高台付坏土師器	A (14.8) B 5.7 D (7.2)	高台部から口縁部にかけての破片。付高台。高台部は薄く、「ハ」の字状に開く。体部は内彎して立ち上がり、口縁部に至る。	口縁部から体部内面へラ磨き、外面横方向のナデ。高台部内・外面ナデ。	雲母・パミス 明赤褐色 普通	P 3 PL25 30% 窺内
4	高台付坏土師器	A (16.2) B (4.2) D (9.0)	底部から口縁部にかけての破片。付高台。体部は内彎して立ち上がり、口縁部に至る。	口縁部内・外面ナデ。体部内面へラ磨き、外面横方向のナデ、外面下端一部へラ削り。内面黒色処理。	長石・パミス 褐色 普通	P 5 PL25 30% 覆土中
5	甕土師器	A (10.6) B 9.0 C 7.4	底部から口縁部にかけての破片。平底。体部は直線的に外傾して立ち上がり、最大径を上位にもつ。頸部は「く」の字状で、口縁部は外傾し、端部はつまみ上げられている。	口縁部内・外面横方向のナデ。体部内面ナデ、外面へラ削り復ナデ。	長石・雲母・パミス 褐色 普通	P 7 PL25 60% 窺内
6	甕土師器	A 14.8 B 14.6 C 9.0	体部から口縁部にかけて一部欠損。平底。体部はわずかに内彎して立ち上がり、最大径を上位にもつ。口縁部は外傾し、端部はつまみ上げられている。	口縁部内・外面横方向のナデ。頸部外面横方向の強いナデ。体部内面ナデ、外面上位から中位にかけてナデ、下位へラ削り。	長石・パミス・粗礫 赤褐色 普通	P 8 PL25 70% 窺内

表4 中ノ台遺跡住居跡一覽表

S I 番号	位置 (長軸方向)	主軸方向 (長軸方向)	平面形	規模 (m) (長軸×短軸)	壁高 (cm)	床面	内 部 施 設						出土遺物	備考
							柱穴	窟穴	ピト	入口	壁溝	炉・竈		
1	B2f,	不 明	[円形]	[5.80×5.80]	—	不明	10	—	3	—	—	炉	—	
2	C3d,	N-49° -E	[楕円 方形]	[3.50×3.30]	5~20	平坦	—	—	—	1	—	竈	人為	須恵器(甕), 縄文土器(鉢)
3	C3e,	N-78° -E	[楕円 方形]	[3.40×2.60]	6~29	平坦	—	—	—	—	—	竈	人為	土師器(坏・高台付坏・ 甕), 刀子, 縄文土器(鉢)
4	A2i,	不 明	[円形]	[6.20×6.20]	—	不明	7	—	—	—	—	炉	—	
6	B2c,	不 明	[円形]	[5.00×5.00]	—	不明	6	—	4	—	—	炉	—	
8	B3d,	不 明	[円形]	[5.80×5.80]	—	不明	7	—	5	—	—	炉	—	
9	B3e,	N-15° -W	[円形]	[4.60×4.60]	—	不明	6	—	—	—	—	炉	—	

2 土坑

今回の調査では、縄文時代の陥し穴を含め40基の土坑を検出した。以下、主な土坑の特徴と出土遺物について記載し、他の土坑については一覧表に掲載する。

第3号土坑（第83図）

位置 調査区北部，A2B，区。

規模と平面形 長径2.41m，短径1.62mの楕円形で，深さ73cm。

長径方向 N-72°-E

壁面 外傾して立ち上がる。

底面 平坦である。

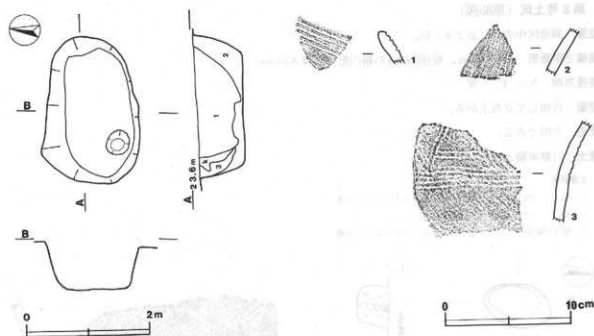
覆土 自然堆積と思われる。

土層解説

- 1 黒褐色 ローム小ブロック・ローム粒子微量
- 2 暗褐色 ローム粒子少量
- 3 褐色 ローム粒子少量

遺物 縄文時代前期に位置付けられる細片を中心に，流れ込みと思われる縄文土器片23点が出土している。第83図1～3は，いずれも第1層出土で，2には撚糸文が施されている。1及び3は，撚糸文を地文に竹管による平行沈線が施されている。

所見 本跡は，規模や形状から陥し穴と考えられる。時期は明確ではない。



第83図 第3号土坑・出土遺物実測図

第7号土坑（第84図）

位置 調査区中央部，B2a，区。

規模と平面形 長径1.07m，短径0.81mの楕円形で，深さ43cm。

長径方向 N-73°-W

壁面 外傾して立ち上がる。

底面 平坦である。

覆土 自然堆積と思われる。

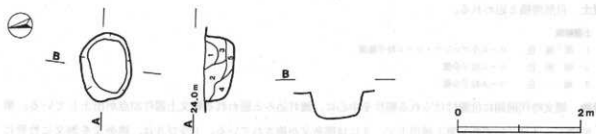
土層解説

- 1 黒褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量、ローム中ブロック少量
- 2 暗褐色 ローム粒子中量、ローム中ブロック少量
- 3 暗褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック少量
- 4 褐色 ローム粒子多量

5 暗褐色 ローム粒子中量

遺物 縄文時代前期に位置付けられる細片を中心に、縄文土器片が14点出土している。いずれも流れ込んだものと思われる。

所見 時期や性格は不明である。



第84図 第7号土坑実測図

第8号土坑 (第85図)

位置 調査区中央部、B2a区。

規模と平面形 長径1.08m、短径0.69mの楕円形で、深さ51cm。

長径方向 N-4°-W

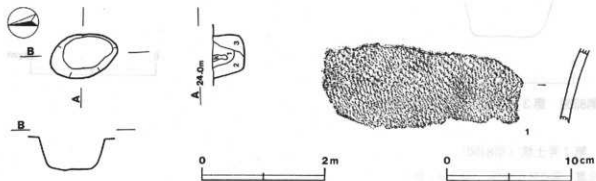
壁面 外傾して立ち上がる。

底面 平坦である。

覆土 自然堆積と思われる。

土層解説

- 1 褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック少量
- 2 褐色 ローム粒子多量
- 3 鈍い褐色 ローム粒子多量、ローム小ブロック少量



第85図 第8号土坑・出土遺物実測図

遺物 縄文時代前期に位置付けられる土器片3点が出土している。いずれも覆土上層からの出土で、流れ込んだものと思われる。第85図1は第1層から出土したもので、撫糸文が施されている。本跡は、規模や形状から陥し穴と考えられる。時期は明確ではない。

第11号土坑 (第86図)

位置 調査区中央部, B 2 b; 区。

規模と平面形 長径1.32m, 短径1.08mの楕円形で、深さ76cm。

長径方向 N-83° -W

壁面 外傾して立ち上がる。

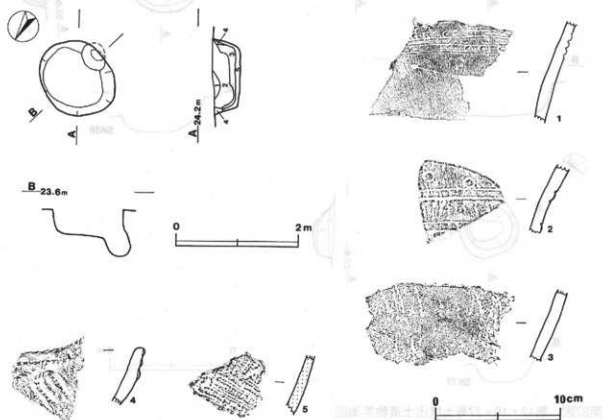
底面 平坦である。底面南端部に、斜めに掘り込まれた深さ45cmのピットをもつ。

覆土 自然堆積と思われる。

土層解説

- | | |
|--------|------------------------------|
| 1 暗褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子・焼土粒子微量 |
| 2 黒褐色 | ローム中ブロック・ローム小ブロック・焼土粒子・炭化物微量 |
| 3 極暗褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子・炭化粒子微量 |
| 4 褐色 | ローム粒子少量 |
| 5 暗褐色 | ローム粒子少量, ローム小ブロック微量 |

遺物 縄文時代前期に位置づけられる細片を中心に、縄文土器片32点が出土している。第86図1, 2, 4は覆土中層から出土している。1は撫糸文を地文に竹管による菱形爪形文が、2は撫糸文を地文に竹管による円形文と平行沈線が、4は縄文を地文に浮線文が施文されている。3及び5は、覆土上層から出土し、3は貝殻腹縁文が、5は羽状縄文が施されている。



第86図 第11号土坑実測図

所見 本跡は、出土遺物から縄文時代前期の遺構と思われる。土器片が主に第2層から出土していることから、一括放棄されたものと考えられる。

第12号土坑（第87図）

位置 調査区北部、A2j、区。

規模と平面形 長径2.34m、短径0.81mの長楕円形で、深さ56cm。

長径方向 N-29°-E

壁面 外傾して立ち上がる。

底面 平坦である。

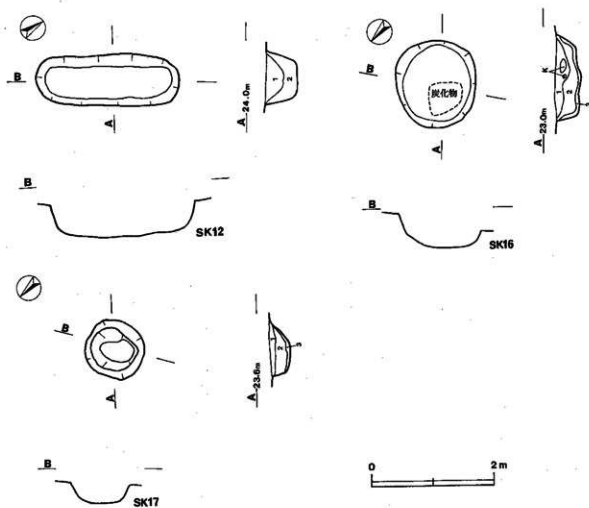
覆土 自然堆積と思われる。

土層解説

- | | | |
|---|-----|-----------------------------|
| 1 | 暗褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子中量、ローム大ブロック少量 |
| 2 | 褐色 | ローム粒子多量、ローム中ブロック微量 |

遺物 出土していない。

所見 本跡は、遺物が出土していないため時期は不明である。規模や形状から陥し穴と考えられる。



第87図 第12・16・17号土坑出土遺物実測図

第16号土坑 (第87図)

位置 調査区西部, B1j, 区。

規模と平面形 長径1.45m, 短径1.30mの楕円形で, 深さ40cm。

長径方向 N-52° -W

壁面 ほぼ垂直に立ち上がる。

底面 皿状である。

覆土 2層から焼土や炭化物が出土している。不規則な堆積状況から, 人為堆積と思われる。

土層解説

- | | | | |
|--------|---------------------------------|-------|------------------------|
| 1 灰褐色 | ローム中ブロック・ローム小ブロック・焼土小ブロック・炭化物微量 | 3 暗褐色 | ローム粒子少量, 焼土小ブロック・炭化物微量 |
| 2 極暗褐色 | 焼土小ブロック・炭化物少量, ローム中・小ブロック微量 | | |

遺物 縄文時代前期に位置付けられる土器片8点が出土している。いずれも細片で流れ込んだものと思われる。

所見 本跡は, 壁面や底面に繰り返し火を燃やした痕跡が認められないことから, 焼土や炭化物は投棄されたものと考えられる。時期は明確ではない。

第17号土坑 (第87図)

位置 調査区中央部, B2i, 区。

規模と平面形 長径1.00m, 短径0.89mの楕円形で, 深さ35cm。

長径方向 N-60° -W

壁面 外傾して立ち上がる。

底面 皿状である。

覆土 自然堆積と思われる。

土層解説

- | | | | |
|--------|---------------------------------|------|------------------------|
| 1 暗褐色 | ローム粒子少量, ローム小ブロック・焼土粒子・炭化物微量 | 3 褐色 | ローム粒子少量, 焼土小ブロック・炭化物微量 |
| 2 極暗褐色 | ローム中ブロック・ローム小ブロック・焼土小ブロック・炭化物微量 | | |

遺物 縄文時代前期に位置付けられる縄文土器片20点及び平安時代に位置付けられる土師器片3点が出土している。いずれも細片で流れ込みと思われる。

所見 時期や性格は明確ではない。

第18号土坑 (第88図)

位置 調査区中央部, B2d, 区。

規模と平面形 長径1.37m, 短径1.17mの楕円形で, 深さ100cm。

長径方向 N-40° -E

壁面 垂直に立ち上がる。

底面 平坦である。

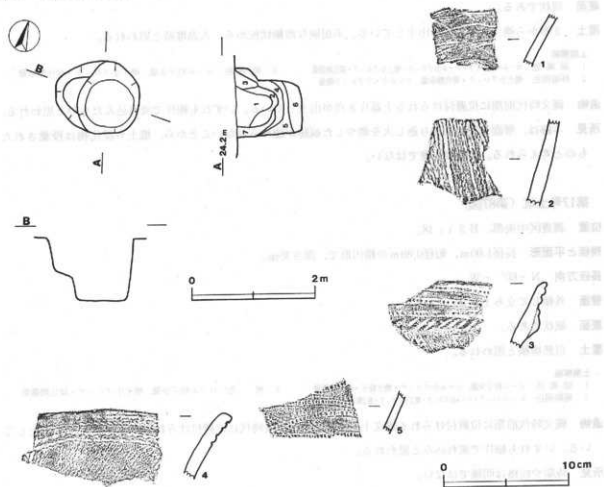
覆土 各層にロームブロックが含まれることや, 不規則な堆積状況から人為堆積と思われる。

土層解説

- | | | | |
|-------|---------------------------------------|-------|----------------------------------|
| 1 暗褐色 | ローム小ブロック中量, ローム中ブロック少量, 焼土小ブロック・炭化物微量 | 5 暗褐色 | ローム小ブロック中量, ローム大ブロック・炭化物少量 |
| 2 暗褐色 | ローム小ブロック中量, ローム大ブロック少量, 炭化物微量 | 6 褐色 | ローム小ブロック中量, ローム大ブロック少量 |
| 3 褐色 | ローム小ブロック多量, 焼土粒子微量 | 7 褐色 | ローム大ブロック・ローム中量, 焼土小ブロック少量, 炭化物微量 |
| 4 暗褐色 | ローム小ブロック中量, ローム大ブロック・焼土粒子・炭化物微量 | | |

遺物 縄文時代前期に位置付けられる細片を中心に、縄文土器片67点が出土している。第88図1は覆土下層から出土し、貝殻腹縁文が多方向に施されている。2は覆土上層から出土し、摺糸文が縦位に施されている。3は覆土中出土で、竹管による変形爪形文が施されている。4及び5は底面から出土し、摺糸文を地文に、竹管による変形爪形文や平行沈線が施されている。

所見 本跡は、出土遺物から縄文時代前期の遺構と考えられる。性格は不明である。



第88図 第18号土坑・出土遺物実測図

第22号土坑 (第89図)

位置 調査区中央部, B 2 c, 区。

規模と平面形 長径1.95m, 短径1.18mの楕円形で、深さ68cm。

長径方向 N-15° -W

壁面 垂直に立ち上がる。

底面 平坦である。

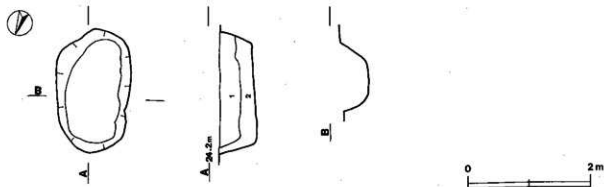
覆土 自然堆積と思われる。

土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子少量, ローム小ブロック・粘土小ブロック微量
 2 暗褐色 ローム粒子少量, ローム中・小ブロック微量

遺物 出土していない。

所見 本跡は、規模や形状から陥し穴と考えられる。時期は不明である。



第89図 第22号土坑実測図

第23号土坑 (第90図)

位置 調査区中央部, B 2 e₃ 区。

規模と平面形 長径2.45m, 短径0.81mの長楕円形で, 深さ83cm。

長径方向 N-48° - E

壁面 垂直に立ち上がる。

底面 平坦である。

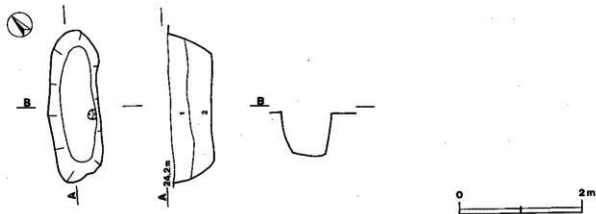
覆土 自然堆積と思われる。

土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子少量, ローム中・小ブロック・焼土粒子・炭化粒子微量
- 2 褐色 ローム粒子少量, ローム中・小ブロック微量

遺物 縄文時代前期に位置付けられる縄文土器片2点が出土している。

所見 本跡は、規模や形状から陥し穴と考えられる。時期は明確でない。



第90図 第23号土坑実測図

第26号土坑 (第91図)

位置 調査区中央部, B 2 b₃ 区。

規模と平面形 長径2.02m、短径0.62mの長楕円形で、深さ38cm。

長径方向 N-62° -E

壁面 外傾して立ち上がる。

底面 平坦である。

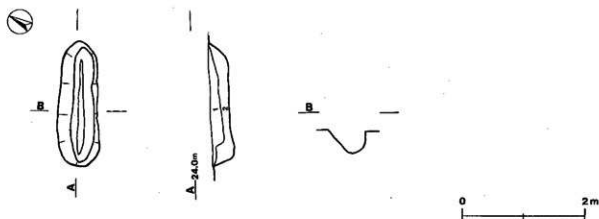
覆土 人為堆積と思われる。

土層解説

- 1 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量
- 2 黒褐色 ローム粒子多量、ローム小ブロック少量

遺物 出土していない。

所見 本跡は、規模や形状から陥し穴と考えられる。時期は不明である。



第91図 第26号土坑実測図

第30号土坑 (第92図)

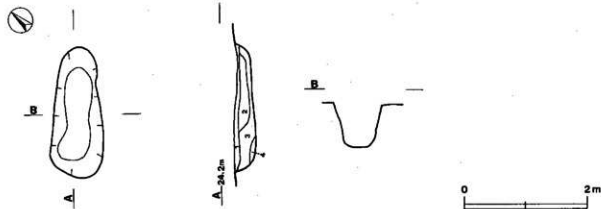
位置 調査区中央部、C2b、区。

規模と平面形 長径2.10m、短径0.66mの長楕円形で、深さ73cm。

長径方向 N-45° -E

壁面 外傾して立ち上がる。

底面 平坦である。



第92図 第30号土坑実測図

覆土 自然堆積と思われる。

土層解説

- | | | |
|---|-----|--|
| 1 | 暗褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子・焼土小ブロック・焼土粒子・炭化物・炭化粒子微量 |
| 2 | 暗褐色 | ローム中ブロック・ローム粒子・焼土小ブロック・焼土粒子・炭化物・炭化粒子微量 |
| 3 | 褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子微量 |
| 4 | 褐色 | ローム粒子微量 |

遺物 縄文時代前期に位置付けられる土器片8点が出土している。いずれも細片で流れ込みと思われる。

所見 本跡は、規模や形状から陥し穴と考えられる。時期は明確ではない。

第32号土坑（第93区）

位置 調査区北部，C2b区。

規模と平面形 長径3.00m，短径1.42mの長楕円形で，深さ74cm。

長径方向 N-28° - E

壁面 外傾して立ち上がる。

底面 平坦である。

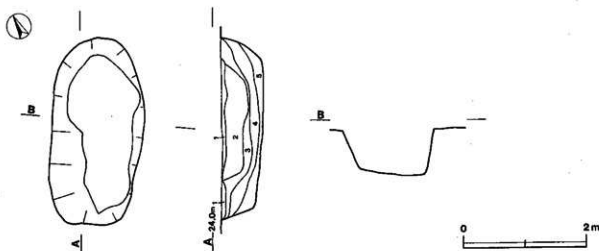
覆土 自然堆積と思われる。

土層解説

- | | | |
|---|-----|---|
| 1 | 暗褐色 | ローム中ブロック・ローム粒子・焼土小ブロック・焼土粒子・炭化物・炭化粒子微量 |
| 2 | 黒褐色 | ローム大ブロック・ローム中ブロック・焼土小ブロック・焼土粒子・炭化物・炭化粒子微量 |
| 3 | 褐色 | ローム中ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子微量 |
| 4 | 暗褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子微量 |
| 5 | 褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子少量 |

遺物 縄文時代前期に位置づけられる土器片8点が出土している。いずれも細片で流れ込みと思われる。

所見 本跡は、規模や形状から陥し穴と考えられる。時期は明確ではない。



第93図 第32号土坑実測図

第33号土坑（第94区）

位置 調査区中央部，C2d区。

規模と平面形 長径2.34m，短径0.89mの不整楕円形で，深さ77cm。長径方向 N-80° - E

壁面 外傾して立ち上がる。

底面 平坦である。

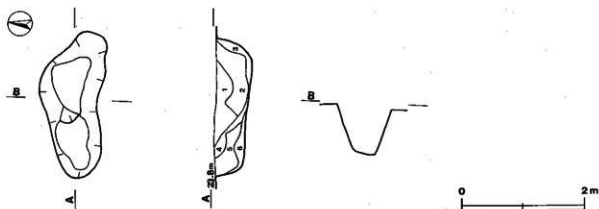
覆土 自然堆積と思われる。

土層解説

- | | | |
|---|-----|---|
| 1 | 褐色 | ローム粒子少量・ローム中ブロック・ローム小ブロック・焼土粒子・焼土小ブロック・炭化粒子・炭化物微量 |
| 2 | 暗褐色 | ローム中ブロック・ローム粒子・ローム小ブロック・炭化粒子微量 |
| 3 | 暗褐色 | ローム粒子・炭化粒子微量 |
| 4 | 褐色 | ローム粒子・ローム小ブロック・焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 5 | 暗褐色 | ローム粒子・ローム大ブロック・ローム中ブロック・ローム小ブロック微量 |
| 6 | 褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量 |

遺物 出土していない。

所見 本跡は、規模や形状から陥し穴と考えられる。時期は不明である。



第94図 第33号土坑実測図

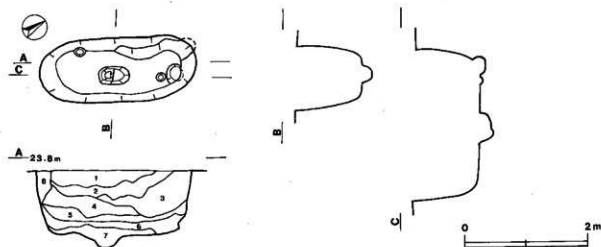
第39号土坑 (第95図)

位置 調査区中央部、C 2 f. 区。

規模と平面形 長径2.52m、短径1.03mの楕円形で、深さ112cm。

長径方向 N-28° - E

壁面 垂直に立ち上がる。



第95図 第39号土坑実測図

底面 平坦である。中央部には長径50cm、短径30cmの楕円形で深さ25cmのピットが、また、北西端には長径約40cmで、深さ約40cmの斜めに掘り込まれたピットが確認できた。

覆土 自然堆積と思われる。

土層解説

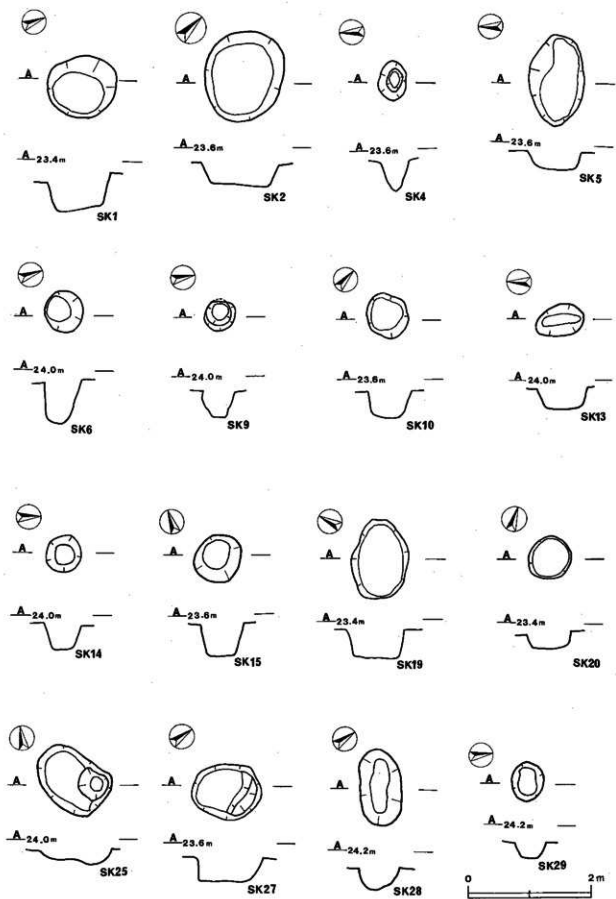
- 1 暗褐色 ローム中ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子・炭化粒子微量
- 2 暗褐色 ローム中ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子・炭化物・炭化粒子微量
- 3 極暗褐色 ローム大ブロック・ローム中ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子・炭化粒子微量
- 4 褐色 ローム中ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子・炭化粒子微量
- 5 褐色 ローム粒子少量、ローム大ブロック・ローム中ブロック・ローム小ブロック・炭化粒子微量
- 6 極暗褐色 ローム大ブロック・ローム中ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子微量
- 7 褐色 ローム大ブロック・ローム中ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子・炭化粒子微量
- 8 褐色 ローム粒子少量、ローム小ブロック・炭化粒子微量

遺物 出土していない。

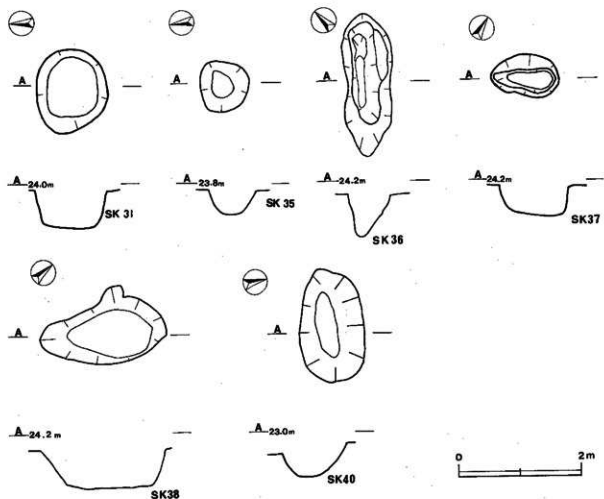
所見 本跡は、規模や形状から陥し穴と考えられる。底面に掘り込まれたピットは殺傷用の坑（いわゆる逆茂木）を立てた痕跡の可能性はある。時期は不明である。

表5 中ノ台遺跡土坑一覧表

土坑番号	位置	長短方向 (長軸方向)	平面形	規模		壁面	床面	覆土	出土遺物	備考 重複遺構
				長軸×短軸(m)	深さ (cm)					
1	A28,	N-14°-W	楕円形	1.15×1.00	60	垂直	平坦	自然	土師器(壺)	
2	A28,	N-31°-W	楕円形	1.45×1.24	36	外傾	平坦	自然	縄文土器(鉢)	
3	A28,	N-72°-E	楕円形	2.41×1.62	73	外傾	平坦	自然	縄文土器(鉢)、土師器(壺)	
4	A21,	N-90°	楕円形	0.64×0.43	52	外傾	皿状	自然		
5	A2h,	N-86°-W	楕円形	1.47×0.88	30	外傾	平坦	自然		
6	A28,	-	円形	0.64×0.59	71	垂直	皿状	自然		
7	B2a,	N-73°-W	楕円形	1.07×0.81	43	外傾	平坦	自然	縄文土器(鉢)、土師器(壺)	
8	B2a,	N-4°-W	楕円形	1.08×0.69	51	外傾	平坦	自然	縄文土器(鉢)	
9	B2a,	-	円形	0.52×0.50	43	外傾	平坦	自然		
10	B2a,	-	円形	0.71×0.70	45	外傾	平坦	自然	縄文土器(鉢)	
11	B2b,	N-83°-W	楕円形	1.32×1.08	76	外傾	平坦	自然	縄文土器(鉢)	
12	A2j,	N-29°-E	長楕円形	2.34×0.81	56	外傾	平坦	自然		
13	B2a,	N-36°-W	楕円形	0.82×0.50	35	外傾	平坦	自然	縄文土器(鉢)、土師器(壺)	
14	B2a,	-	円形	0.58×0.56	42	外傾	平坦	自然		
15	B2b,	-	円形	0.80×0.70	53	外傾	平坦	自然	縄文土器(鉢)	
16	B1j,	N-52°-W	楕円形	1.45×1.30	40	垂直	皿状	人為	縄文土器(鉢)	
17	B2i,	N-60°-W	楕円形	1.00×0.89	35	外傾	皿状	自然	縄文土器(鉢)、土師器(壺)	
18	B2d,	N-40°-E	楕円形	1.37×1.17	100	垂直	平坦	人為	縄文土器(鉢)、土師器(壺)	
19	C2a,	N-85°-E	楕円形	1.30×0.86	47	垂直	平坦	人為	縄文土器(鉢)、土師器(壺)	
20	C2b,	-	円形	0.70×0.70	28	垂直	皿状	自然	縄文土器(鉢)	
22	B2c,	N-15°-W	楕円形	1.95×1.18	68	垂直	平坦	自然		
23	B2e,	N-48°-E	長楕円形	2.45×0.81	83	垂直	平坦	自然	縄文土器(鉢)	
25	B2a,	N-44°-W	楕円形	1.24×0.85	24	外傾	凸凹	不明	縄文土器(鉢)	
26	B2b,	N-62°-E	長楕円形	2.02×0.62	38	外傾	平坦	人為		
27	C2a,	N-28°-E	楕円形	1.10×0.86	41	外傾	平坦	自然	縄文土器(鉢)	
28	C2b,	N-68°-W	楕円形	1.22×0.78	34	外傾	凸凹	自然		
29	C2c,	N-72°-W	楕円形	0.63×0.50	28	外傾	皿状	自然	縄文土器(鉢)	



第96図 その他の土坑実測図(1)



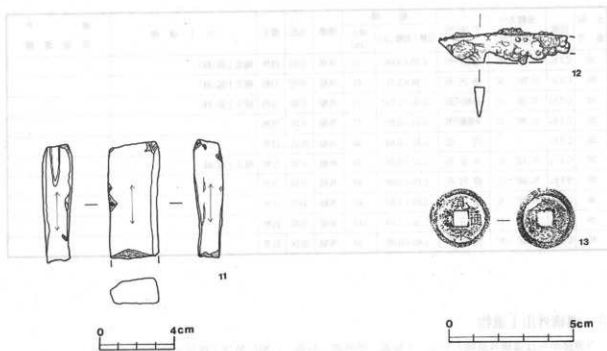
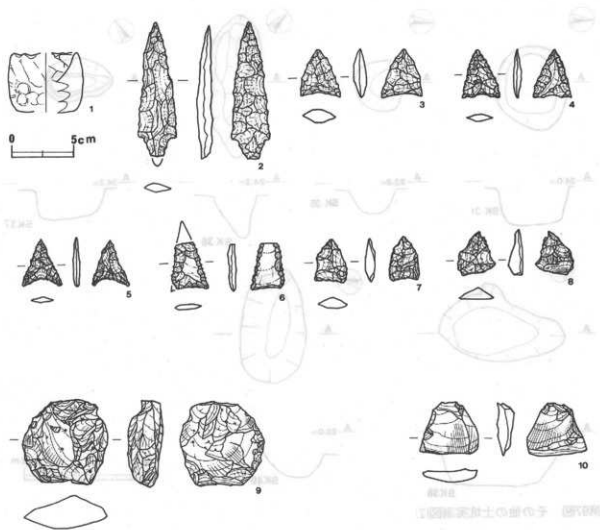
第97図 その他の土坑実測図(2)

土坑 番号	位置	長短方向 (長軸方向)	平面形	規模		壁溝	床面	覆土	出土遺物	備考 重複遺構
				長軸×短軸 (m)	深さ (cm)					
30	C2b ₁	N-45°-E	長楕円形	2.10×0.66	73	外縦	平垣	自然	縄文土器(鉢)	
31	C2B ₁	N-70°-W	楕円形	1.48×1.16	61	外縦	平垣	自然	縄文土器(鉢)	
32	C2b ₁	N-28°-E	長楕円形	3.00×1.42	74	外縦	平垣	自然	縄文土器(鉢)	
33	C2d ₁	N-80°-E	不整形円形	2.34×0.89	77	外縦	平垣	自然		
35	C2f ₁	-	円形	0.87×0.84	40	外縦	皿状	自然		
36	C2j ₁	N-42°-E	不定形	2.32×0.55	70	外縦	平垣	自然	縄文土器(鉢)	
37	B3h ₁	N-68°-E	楕円形	1.10×0.66	48	外縦	平垣	自然		
38	C2a ₁	N-32°-E	楕円形	2.03×1.24	62	外縦	平垣	自然		
39	C2f ₁	N-28°-E	楕円形	2.52×1.03	112	垂直	平垣	自然		
40	C3c ₁	N-83°-W	楕円形	1.83×0.98	44	外縦	皿状	自然		

3 遺構外出土遺物

当遺跡からは遺構外遺物として、土師器、須恵器、石器、石製品及び古銭などが出土している。

以下主なものを掲載する。



第98图 遺構外出土遺物実測図(1)

遺構外出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	粘土・色調・焼成	備考
第99図1	手探 土師器	A〔5.0〕 B 4.7 C〔3.5〕	底部から口縁部にかけての破片。底部は平底で厚い。体部は内彎しながら立ち上がる。口縁部は波状で薄い。	口縁部内面指痕によるナデ。外面ナデ。体部内・外面指痕によるナデ。底部外面に擦痕。	紫褐色・パミス 鈍い褐色 普通	P 2 P L 25 25% S I 2 刷線

図版番号	器種	計 測 値					石 材	出土地点	備 考
		長さ(cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	孔径 (cm)	重量 (g)			
第99図1	右舌尖残片	5.4	1.5	0.4	—	4.2	安山岩	表 探	Q 1 P L 25
3	石 鏝	1.9	1.6	0.6	—	1.2	安山岩	表 探	Q 2 P L 25
4	石 鏝	2.0	1.5	0.3	—	0.7	黒曜岩	表 探	Q 3 P L 25
5	石 鏝	1.8	1.6	0.3	—	0.6	黒曜岩	表 探	Q 4 P L 25
6	石 鏝	1.8	1.5	0.3	—	1.2	安山岩	表 探	Q 5 P L 25
7	石 鏝	1.8	1.3	0.4	—	0.8	黒曜岩	表 探	Q 6 P L 25
8	石 鏝	2.0	1.5	0.6	—	0.7	黒曜岩	表 探	Q 7
9	石 鏝	3.4	3.4	1.4	—	14.8	黒曜岩	表 探	Q 10 P L 25
10	割 片	1.9	1.6	0.6	—	1.2	黒曜岩	表 探	Q 11

図版番号	器種	計 測 値					石 材	出土地点	備 考
		長さ(cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	孔径 (cm)	重量 (g)			
第99図11	磁 石	7.8	3.5	0.9	—	45.1	凝灰岩	表 探	Q 12 P L 25

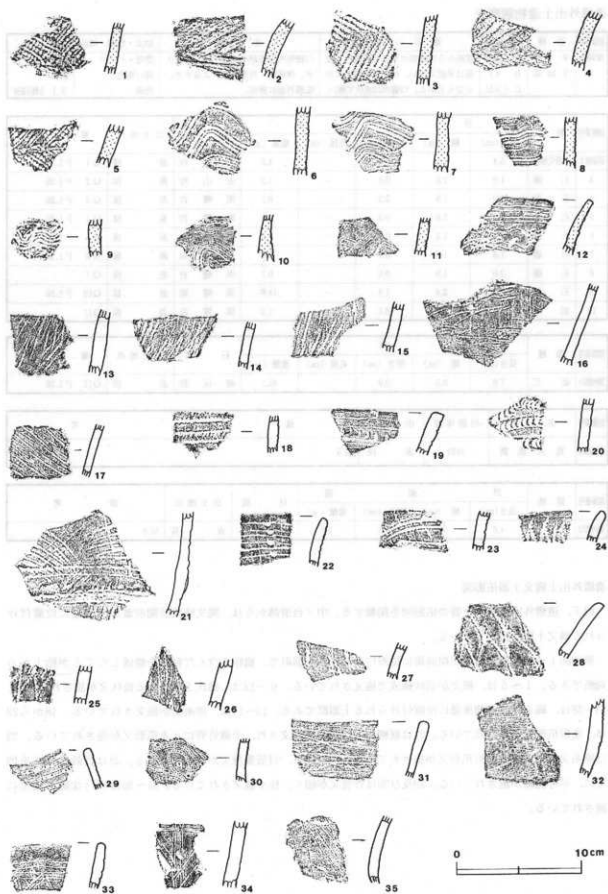
図版番号	名 称	初編年度	出土地点	備 考
第99図13	寛永通寶	1624	表 探	M 5

図版番号	器種	計 測 値				材 質	出土地点	備 考
		長さ(cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)			
第99図12	刀 子	4.6	0.6	0.3	5.0	鉄	表 探	M 3

遺構外出土縄文土器拓影図

以下、遺構外出土縄文土器の拓影図を掲載する。中ノ台遺跡からは、縄文時代前期前葉から後葉に位置付けられる縄文土器が出土している。

第99図1～12は縄文時代前期前葉に位置付けられる土器群で、繊維を含んだ粘土を焼成したことが胎土から判断できる。1～5は、縄文が羽状構成で施文されている。6～12は、櫛状工具による波状文が施されている。13～38は、縄文時代前期後葉に位置付けられる土器群である。13～17は、燃糸文が施文されている。18から22は、変形爪形文が施されている。21は縦横に平行沈線が施文され、半截竹管による爪形文が施されている。22は燃糸文を地文に、変形爪形文が施されている。23～28は、貝殻腹縁文が施されている。23は貝殻腹縁文を地文に、平行沈線が施されている。29及び30は竹管文が細く、狭く施文されている。31～36は平行沈線が横位に施されている。



第99図 遺構外出土遺物実測図(2)

第4節 まとめ

当遺跡から検出された遺構は、縄文時代及び平安時代の竪穴住居跡7軒、土坑40基である。

ここでは、各時代の主な遺構と遺物についての簡単な考察を行い、調査報告のまとめとする。

縄文時代のものと思われる遺構は、竪穴住居跡5軒と陥し穴10基が検出されている。このうち、竪穴住居跡5軒については、耕作のために床面下まで削平され、柱穴列としてしか確認できなかったために、詳細な史料は得られなかった。しかし、陥し穴については、掘り方が深いために比較的良好な状態で検出された。ここで、陥し穴と判断した土坑について表にまとめてみると、土坑番号8と22を除き、北に向いて東へ90度までにほぼ収まっている。この向きは台地の等高線の向きと概ね一致するものが多いことから、陥し穴は無造作に掘り込まれたのではなく、その多くが意図的に斜面に平行に設置されたものと考えられる。

出土した縄文土器片はその多くが細片で、遺構覆土中・上層からの出土や遺構外出土である。時期的には、縄文時代前期前葉及び前期後葉に位置付けられるものである。前期前葉に位置付けられる土器は、縄文が羽状構成で施文され、胎土に纖維を含んでいるのを特徴としている。当遺跡出土のこの時期の上器は、その多くが花壇下層式土器に比定されるものと思われる。また、前期後葉に位置付けられる土器群は、施文具として竹管を利用しているほか、貝殻や櫛状工具なども使用している。この中には、摺糸文を地文に平行沈線が施された、浮島I式土器も含まれている。当遺跡出土のこの時期の土器は、浮島I・II式土器、諸磯a・b式土器、興津式土器などが含まれる。出土した石磯についても、基部に挟りが入る形態のもので、縄文前期に一般的に見られる物である。当遺跡は出土した縄文土器や石磯の特徴から、縄文時代前期前葉から前期後葉にかけての遺跡と考えられる。性格は、陥し穴が確認され、石磯が出土していることから、主に狩り場として利用され、一時期集落が形成されていたものと思われる。

平安時代の住居跡も2軒確認されたが、いずれも削平されていた。軸方向、規模、出土遺物、及び隣接する位置関係などから、ほぼ同時期と考えられる。東向竪をもつことや高台付環の器形などから、10世紀前後の竪穴住居跡と考えられる。2軒の確認された位置が台地基部であることから、北に広がる台地縁辺部に集落が広がっている可能性がある。

中ノ台遺跡陥し穴一覧表

土坑番号	位置	長短方向 (長軸方向)	平面形	規模		壁溝	床面	覆土	備考
				長軸×短軸 (m)	深さ (cm)				
8	B 2 a,	N-4°-W	楕円形	1.08×0.69	51	外傾	平坦	自然	
22	B 2 c,	N-15°-W	楕円形	1.85×1.18	68	垂直	平坦	自然	
32	C 2 b,	N-28°-E	長楕円形	3.00×1.42	74	外傾	平坦	自然	
39	C 2 f,	N-28°-E	楕円形	2.52×1.03	112	垂直	平坦	自然	
12	A 2 j,	N-29°-E	長楕円形	2.34×0.81	56	外傾	平坦	自然	
30	C 2 b,	N-45°-E	長楕円形	2.10×0.66	73	外傾	平坦	自然	
23	B 2 c,	N-48°-E	長楕円形	2.45×0.81	83	垂直	平坦	自然	
26	B 2 b,	N-62°-E	長楕円形	2.02×0.62	38	外傾	平坦	人為	
3	A 2 g,	N-72°-E	楕円形	2.41×1.62	73	外傾	平坦	自然	
33	C 2 d,	N-90°-E	不整形円形	2.34×0.89	77	外傾	平坦	自然	

写 真 図 版

星 合 遺 跡

中ノ台遺跡

遺跡全景



I, II, III 区
調査終了全景



IV 区
調査終了全景

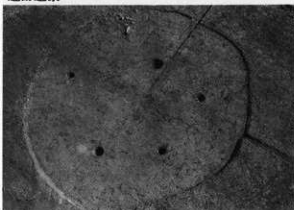




遺跡遠景



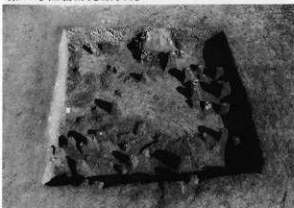
遺構確認状況



第11号住居跡完掘状況



第1号住居跡完掘状況



第1号住居跡遺物出土状況



第1号住居跡電完掘状況



第2号住居跡完掘状況



第2号住居跡遺物出土状況



第3号住居跡完掘状況



第3号住居跡竈完掘状況



第4号住居跡完掘状況



第4号住居跡竈完掘状況



第5号住居跡完掘状況



第5号住居跡竈完掘状況



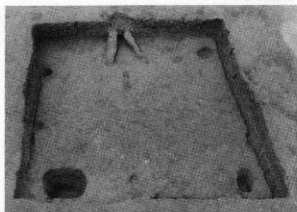
第7号住居跡完掘状況



第7号住居跡竈完掘状況



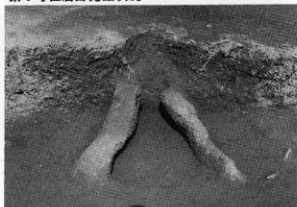
第8号住居跡完掘状況



第9号住居跡完掘状況



第9号住居跡遺物出土状況



第9号住居跡竈完掘状況



第12号住居跡完掘状況



第12号住居跡遺物出土状況



第13号住居跡完掘状況



第13号住居跡竈完掘状況



第14号住居跡完掘状況



第15号住居跡完掘状況



第15号住居跡遺物出土状況



第15号住居跡竈完掘状況



第16号住居跡完掘状況



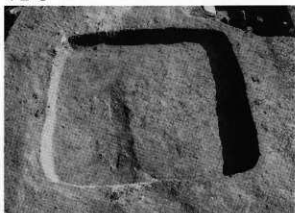
第16号住居跡遺物出土状況



第17号住居跡完掘状況



第17号住居跡竈完掘状況



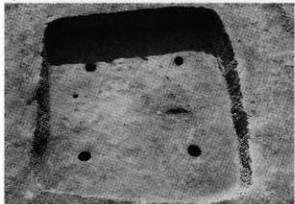
第18号住居跡完掘状況



第19号住居跡完掘状況



第19号住居跡竈遺物出土状況



第20号住居跡完掘状況



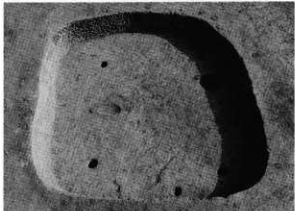
第20号住居跡遺物出土状況



第22号住居跡完掘状況



第22号住居跡竈遺物出土状況



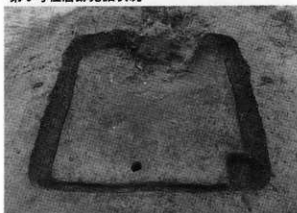
第23号住居跡完掘状況



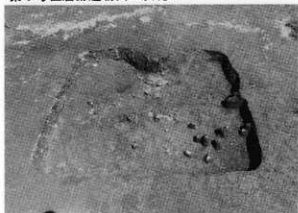
第6号住居跡完掘状況



第6号住居跡遺物出土状況



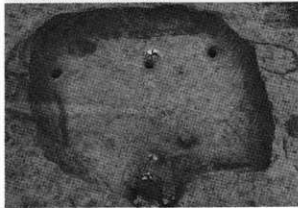
第10号住居跡完掘状況



第10号住居跡遺物出土状況



第21号住居跡完掘状況



第21号住居跡遺物出土状況



II区旧石器調査状況



第1石器集中地点遺物出土状況



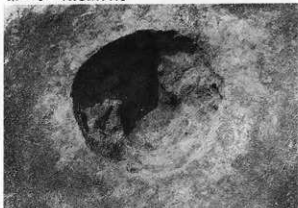
第2号土坑完掘状况



第4号土坑完掘状况



第6号土坑遺物出土状况



第10号土坑完掘状况



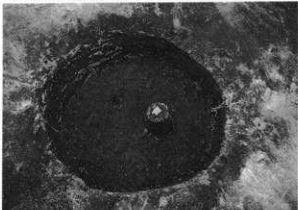
第12号土坑遺物出土状况



第19号土坑完掘状况



第21号土坑遺物出土状况



第22号土坑遺物出土状况



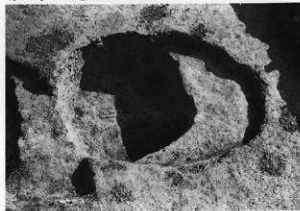
第25号土坑完掘状況



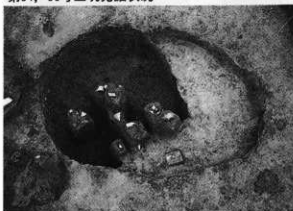
第30号土坑遺物出土状況



第34, 35号土坑完掘状況



第36号土坑完掘状況



第36号土坑遺物出土状況



第37号土坑完掘状況



第37号土坑遺物出土状況



第45号土坑遺物出土状況



9-1



9-2



9-3



9-4



9-5



9-6



9-7



9-8



9-13



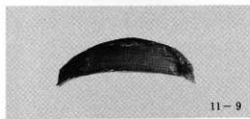
9-9



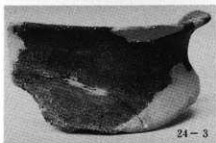
11-1



11-2

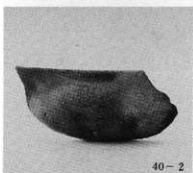
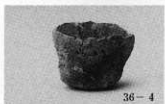




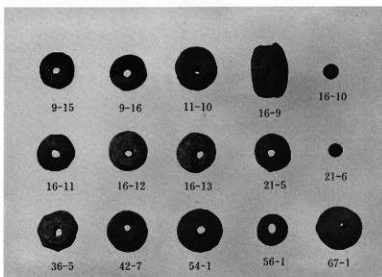
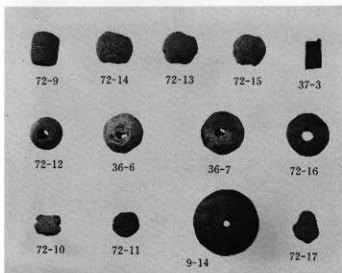




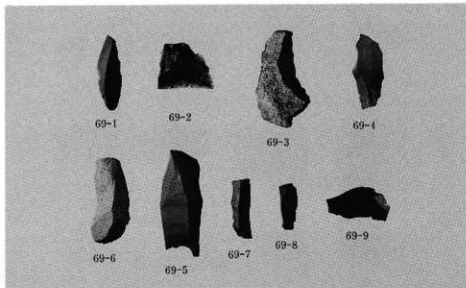




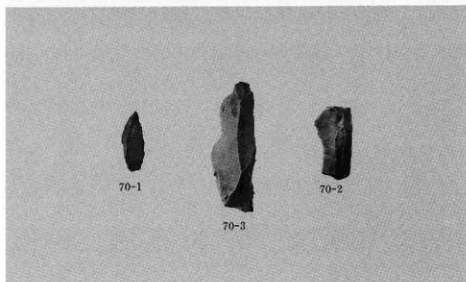




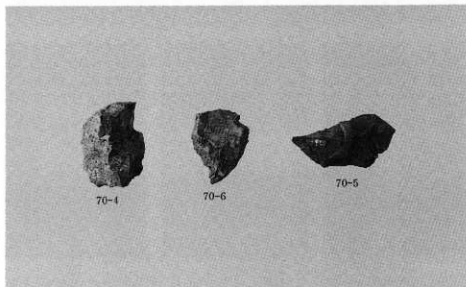
第1 石器集中地点
出土遺物

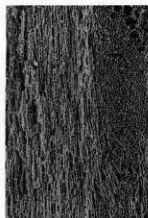
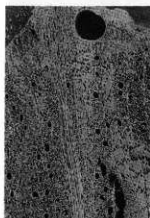
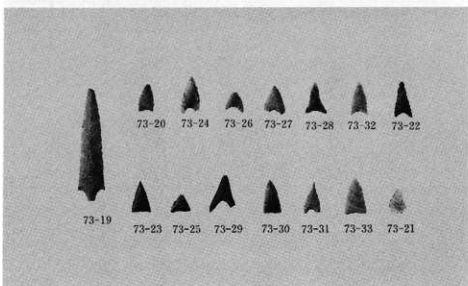
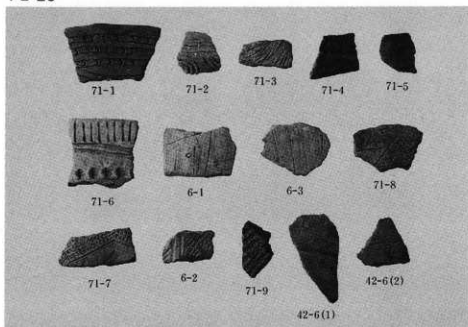


第2 石器集中地点
出土遺物



第3 石器集中地点
出土遺物





1, コナラ属コナラ亜属クヌギ節 (SI-5ニ)
 a: 木口, b: 柃目, c: 板目

200 μ m: a
 200 μ m: b, c



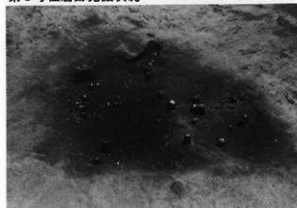
調査前全景



第2号住居跡完掘状況



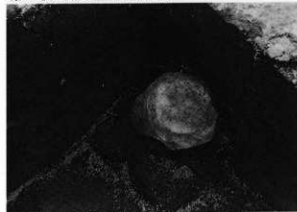
遺構確認状況



第3号住居跡遺物出土状況



第1号住居跡完掘状況



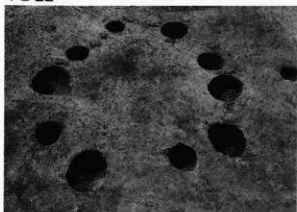
第3号住居跡出土遺物



第2号住居跡遺物出土状況



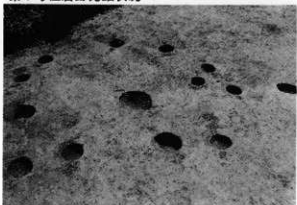
第3号住居跡完掘状況



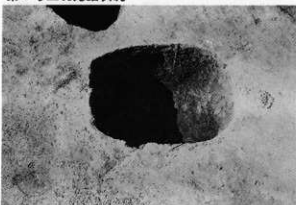
第6号住居跡完掘状況



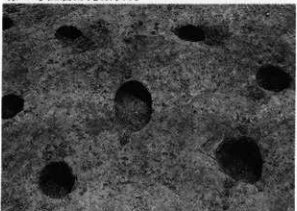
第3号土坑完掘状況



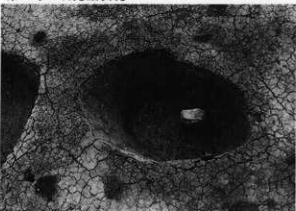
第8号住居跡完掘状況



第7号土坑完掘状況



第9号住居跡完掘状況



第8号土坑遺物出土状況



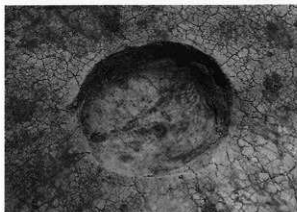
第3号土坑遺物出土状況



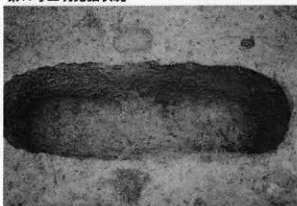
第11号土坑遺物出土状況



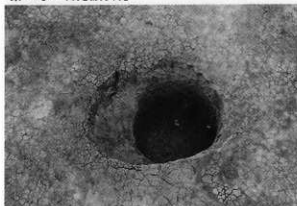
第11号土坑完掘状況



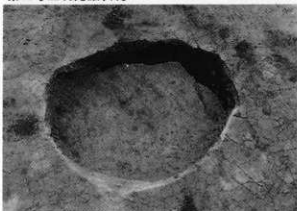
第17号土坑完掘状況



第12号土坑完掘状況



第18号土坑遺物出土状況



第16号土坑完掘状況



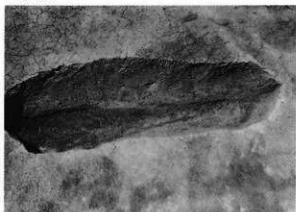
第18号土坑完掘状況



第17号土坑遺物出土状況



第22号土坑遺物出土状況



第26号土坑完掘状況



第39号土坑完掘状況



第30号土坑遺物出土状況



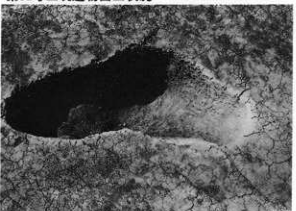
調査後全景



第32号土坑遺物出土状況



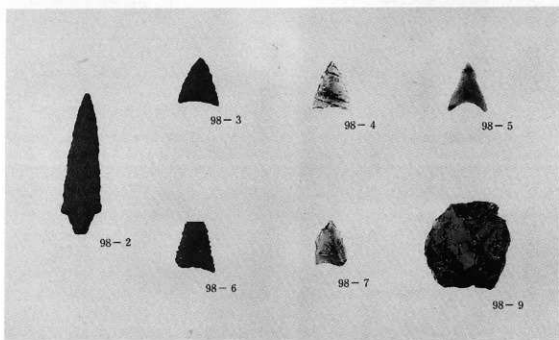
調査後全景



第33号土坑完掘状況



旧石器調査状況



茨城県教育財団文化財調査報告第137集

阿見東部工業団地造成工事
地内埋蔵文化財調査報告書

星合遺跡 中ノ台遺跡

平成9（1997）年9月26日 印刷

平成9（1997）年9月30日 発行

発行 財団法人 茨城県教育財団
水戸市見和1丁目356番地の2
TEL 029-225-6587

印刷 野沢印刷株式会社
TEL 029-248-0117